
ガンパウダー・ティー・パーティー

ラ行わをん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンパウダー・ティー・パーティー

【Nコード】

N8055H

【作者名】

ラ行わをん

【あらすじ】

紅茶をこよなく愛する宅急便トラック運転手の「僕」はあることから巨大軍需企業の陰謀に巻き込まれてしまう。「極討放送」を名乗る報道手段に助けられるも、これがまたクセモノぞろい。はたして、生き延びることはできるのだろうか

一杯目

陶磁のポットから零れ落ちる雫の美しさに、思わず息を呑んだ。

茶越しをすり抜けた黄金色の「それ」は、やがてティーカップを満たし、セイロン産紅茶特有の強い芳香を放つ。

ティーカップは決して、底が浅くて飲み口の薄い上品な物ではなかったが、すばらしい水色を堪能するには十分すぎるほど白かった。ジユペリ先生は輪切りしたレモンを小さなトングで持ち上げて紅茶の中で揺らした。

やがて、クエン酸の働きで深い赤褐の水色が明るくなり、鼻腔を通る酸味を帯びた新鮮な香りが昼寝から覚めたばかりの頭に滑り込む様に入って来る。

ティースプーン一杯の砂糖があつという間に溶けてなる光景は、週に一度しかないティータイムの楽しみの一つだった。

綺麗……

まだ十歳で、ボキヤブラリーの数も限られていたあの頃の僕に、一杯のすばらしい紅茶ア・ナイスカップ・オブ・ティーに対するそれ以上の賛辞は見つけることができなかった。

このイギリス出身のプロテストント宣教師は表情筋の使い方を一つしか学んでいないのか、一日中笑顔以外の表情を見せる事がほとんどない。

かなりの暇人なのだろうか、無愛想なせいで周りの子供や他の先生たちの中に馴染めなかった僕を院長室に呼んでは、紅茶を飲みながら一方的に話をする。

僕が紅茶を飲み始めたのはこれがきつかけだった。

ジユペリ先生は紅茶に視線を注ぐ僕に優しく微笑み、口ずさむ。

「人は不思議な生き物で、たった一杯の紅茶で幸せな気持ちになれることもあれば、世界を手に入れても幸せになれないことだってあるのです」

孤児院で暮らしていた時いつも思っていたのだが、彼女は妙に難しい話をする。

僕は押し黙ったまま紅茶を飲み干した。周りの子供たちより少しだけマセていた僕は、遠慮っていう世間のしがらみにうすうす気づいてはいたけど、小さい内は知らない振りをした方が楽しく生きられる事も知っていた。

心地よく喉を流れる暖かな液体の感触や香りを楽しむまでは成長していなかったけど、これだけは確かに言える。

ちよっぴり、心が温かい。

「でも、紅茶を本当に楽しむにはちよつとした秘訣があつて」
ジユペリ先生はまた一方的にしゃべりだす。口数の多いおばさんだな、と煙たく思う時も少なくない。

それとは対照的に、僕は初めから最後まで、黙りっぱなしだ。

別に会話自体が嫌いな訳ではない。ただ、ジユペリ先生の話だけで、もうこの空間に定められた言葉の容量は飽和していると思っただけだ。

そして、なによりも、この紅茶は美味しい。

ジユペリ先生は空になったティーカップに再び紅茶を注ぎ始めた。

「ほら、遠慮せずにたくさん飲んで。イギリスではみんなこのティーカップの倍の大きさで六杯は飲むわよ」

もしそうなら、茶園の生産が追いつかなくなるだろう。

捻りのない冗談だ。それにセンスや日本文化に対する理解の欠如を感じる。

「紅茶はおいしいかしら？ これはオレンジペコの中でも特に」
今日も舌の滑りが絶好調のイギリス人は強張った僕の表情に気がついたらしく、話を変えた。

僕が七割方聞き流している事には気がついていないのか、それとも気にせずしゃべっているのかは分からない。

けど、僕はわりと素直に頷いて見せた。

言葉と違って、紅茶にはウソが入りこむ隙は存在しない。紅茶を好

きになる理由はそれだけで十分だ。

そのかわり、紅茶が語ってくれる。

僕が感じた温かさがどこから来たものなのか分かる気がした。

ジユペリ先生が淹れた紅茶は、時に、先生以上におしゃべりだ。

ベッドから転げ落ちて目が覚めた。乱反射ガラスを通ったぼやけた朝の太陽が冷たい。

時計の短い針はまだ左下を指していた。土曜にしては珍しく早起きだ。

夕べの雨の所為で洗濯物は全て部屋干しにしている。寝起きの顔に水滴が付いている事にはもう慣れたので、不平はしない事になっている。

乾燥機をつければいいだけの話だが、あいにく、うちに乾燥機は一台しかない。

ちなみにその乾燥機は隣の部屋一晩中つけっ放した。別に客が泊まっているわけではない。ただ、隣の部屋には湿気が入るとマズいものが置いてあるだけだ。

洗顔を終え、隣の部屋の扉を開けた。それと同時に、香ばしい、乾燥した空気が流れが低血圧の体を包む。

四つの棚には、この数年間集めてきた膨大な数の紅茶や茶具が陳列されている。

木箱に入ったものや缶入りの奢侈品を始め、安価なティーバッグまで、種類は様々だ。

茶具も紅茶の種類や天気、人数に合わせて使えるよう、多種多様なものがそろえてある。

宅急便のトラックを運転して稼いだ給料から食費を削ってまで正確に言つとこれも食費と数えるべきだが 専門店で直接選んで来たものばかりだ。

お陰で我が家のエンゲル係数は危険域レッドゾーンに達しているけど。

さらに、この中にある紅茶、ことさらに缶入りの高級品は殆どが

まだ開けられていない。

宝の持ち腐れといわれても仕方がないが、これにはちゃんと事情がある。

紅茶は基本的に、開けると三ヶ月くらいしかもたないのだ。

十五の時、孤児院を出て一人暮らしを始めた僕には家に呼べる身よりも友達も恋人もいない。

仕事が多忙な所為でゆっくり紅茶を飲める時間は週末しかないのに、三ヶ月で1kgの紅茶を一缶消費することは不可能に近いのだ。だからいつも手軽なティーバッグで我慢している。

僕の仕事は足軽宅急便のトラック運転手だ。

まだまだ駆け出しの十代が紅茶を買う程の金を手に入れるにはこれが一番だった。

ただし、足軽宅急便の業務はハードという言葉では済まされないほど過酷だ。

免許を取り就職したまではよかったものの、「足軽ダッシュ」とかいう妙な決まりに従って運転をしなければならぬ事が一番の悩みの種だ。

「危険箇所以外では止まってはいけない」のだ。

給与は基本給に配達数による歩合制が加わる形をとっているため、スピードが鍵を握る。

止まらずに走り続けなければいけないというプレッシャーは生半可なものではない。

その分、給料は、他社の比ではないというのも事実だ。

足軽宅急便での勤務経験はトラック運転手の勲章といわれるほどで、過酷な労働条件を乗り越えて来た歴戦のドライバーの一人として、同業者からほんのちよつとだけ尊敬されたりもする。

しかし、そんな超越者たる我ら、足軽のトラック運転手も胃袋に穴が開く事にはさすがに参ってしまうのだ。もうすでに限界に達した体を保つためには週一の休みは物足りないと感じることもしばしばあ

る。

最近は「走行中の足軽宅急便のトラックに描かれた赤いフンドシを触ると幸せになれる」とかいう、稚気あふれる都市伝説が流行している所為で、通行人との接触事故も多発している。

バックミラーに映る通行人がフンドシに手を伸ばす度に、胃に開いた穴が少しずつ広がる感覚はマゾヒストではない僕にとって、ただの苦痛に過ぎない。

馬車馬みたいに働かされる日々はいつたいどこへ向かうのか。

机の上に放り出したままの胃薬を見た瞬間、強い苛立ちがこみあげる。

紅茶が飲みたい

誰かに向けた言葉ではなかった。

単に内なる願望が言葉になっただけだった。

しかし、そのあまりにも微弱な動機に、僕は突き動かされてしまった。

発作的に棚の一番上にある小さめの木箱を乱暴にこじ開ける。

理性もそれを止めようとはしなかった。

キッチンに駆け込んでやかんを火にかけ、茶具の棚から一人用のポットやティーカップの中で一番高かったものを取り出した。

ドイツ・マイセン製のインドの華。

ナポレオンの愛人のためにデザインされた模様を持つ陶磁製のティーセットだ。

最もピュラーな緑の草が描かれたもので、飲み口や表面に金細工が施されている。

いつもならゆっくり鑑賞するところだが、そんな余裕はない。お茶請けもいらなくらいだ。

今、香り高い紅茶を飲まなければ死ぬかも知れないと、強迫感すら覚える。

しかし、焦る僕をあざ笑うかの様に、今日のやかんはなかなか沸

騰してくれない。

待つこと数分、ついにやかんがブクブクと音を立てはじめた。

ポットに紅茶をティースプーン三杯入れ、熱湯を注ぐ。

人数分より紅茶を一杯分多く入れる事は「ポットの分^{フォー・ポット}」と言われており、この行為の由来には諸説ある。だけど、僕の場合、ただ疲れているから濃い目に飲みたいだけだ。せつかく箱入りをあけたのだ。二杯位飲まないと気が済まない。紅茶もミルクも入れずにストレートで飲んでやる。

だが、紅茶を蒸らし終えて、カップに注いだ時、僕は銘柄を確認しなかった自分の迂闊さを呪った。

手作りの木箱に仰々しい欧文書体で「マカイバリ茶園オーガニックダージリンティー」と記されている。

「シ……シル……シルバーニードルズ……」

今夜は線路の上で寝るのもいいかも知れないと思えた。

そう。これはカルカタティーオークションにて史上最高値をたたき出した、世界最高のダージリン茶。

天体の動きを取り入れるシュタイナー農法ではぐくまれ、満月の夜に摘まれたものの内、新芽を多く含んだ茶葉だけが出芽される。

震える掌の上から今にも落ちてしまいそうな木箱入りの紅茶は百グラムで、通常14700円程度で取引されるものだ。

なぜ気づかなかったのだろう。この銀色に染まった綿毛を見逃す筈がない。そもそも木箱を取り出した時点で気づくべきだった。

しかし時すでにおそし。

パンドラの箱どころではない。希望どころか、紅茶が95gだけ残っている。

この紅茶をどんな思いで買ったかを思い出ただけで、涙で紅茶をもう一杯淹れられそうだ。

シルバーニードルズを買うとき、初めて二人用のポットを買ったんだっけな。

そのポットは埃を被ったまま、例の棚の奥にしまつてある。

最初の秘訣はね……一人で紅茶を飲まないことよ。だって、一人で飲むのはさびしいでしょう？

ジユペリ先生が教えてくれた最初の秘訣は、実効を検証できないままだ。

二人分淹れた紅茶には、一人で飲む紅茶とは違う色が、違う香りが、確かに存在している。

もう一度誰かと紅茶を飲みたい。

僕は心底、二人用のティーポットで紅茶を淹れてみたいと願つた。

そのときだった。ジリリリ、と単調な携帯電話の着信音が思考に割り込みをかけたのは。

「もしもし」

「飴沢、悪い。用事ができて午後の仕事出れなくなった。代わり頼む」

仕事先の同僚からの電話だった。

悪いと言っているが特に悪びれた様子もなく、まるで当たり前のことを話しているかのような態度だ。

今日はせつかくの休日だ。こんな奴の代わりに出勤してやる義務なんかあるまい。

適当にあしらつて他をあたる様に誘導してやるう。

「すみません、今日は」

どんな嘘をつこうか。友達の忌日なんかどうだろう。いや、忌日はベタ過ぎる。ここはひとまず……

「マジか！ 本当にありがてえ。今度うまいラーメン奢ってやるから、それじゃ」

またもや、生まれて初めて他人の耳の構造を知りたくなつた。それと同時に、初めて他人の顔面を本気でぶん殴つてやりたくなつた。

開いたままの携帯電話をベッドの上へ乱雑に放り投げた。

ちゃんとベッドの上に着陸するはずだったが、コントロールミスによりゴミ箱の中へ滑り落ちる。

今日はどうやら初めてづくしの素敵な一日になりそうだ。

半分は皮肉だ。もちろん。

ひとまず、冷蔵庫から胡瓜のサンドイッチを出して、紅茶を飲みながら、この、極めて不愉快な気分を中和する事にした。

仕事は午後からだ。飲み終えてから昼寝をしても、十分お釣りが来る。

終わったら、きっちり請求書を書いてやらないと気が済みそうにない。

僕のティータイムを邪魔した代価は高くつく事をおしえてやる。

二杯目

「お久しぶりです。ご隠居^{ヘルメス}」

いつも通りの紅茶の時間、過去が老人を呼んだ。

昨夜とどいたお茶請けのチョコレートケーキと濃厚なアッサムのミルクティーが並べられたテーブルの上に、ガラスのミルク入れが力なく落ちた。

「あなた一体誰?!」

ティーカップを口に運んでいた少女の大きい目が戸惑ったようにまばたきをする。

窓枠の上に座っている男が陽光を遮り、部屋は不吉な影に覆われた。男が左手にはめた指輪に細い網目が刻み込まれた羽の模様が浮かび上がる。

スズメバチだ。

老人はこの指輪を、確かに知っている。

「お嬢さま。お待ちを!」

憤然と立ち向かう少女を引きとめ、老人は前へ進む。

「羽生教授は死んだ。研究は中断されたのに、いまさらなんの用だ!」

敵意を、決意を剥き出しにした老人の言葉をきっかけに、鈍く退色していた男の怒りが大気の中に広がり始めた。

「爺、この人は一体だれ?」

木製の床の上に滑るように舞い立つ男の懐から取り出されたものに、部屋中が凍りついた。

「何の用って決まっているじゃないですか」

「早く逃げてください!」

全身全霊を込めた叫び、のはずだった。

ただど老人の声は少女に届かない。

命中こそしなかったものの、音超えの銃弾はかすっただけで老人の

頸部を抉る威力を持っていた。喉笛に開けられた穴から血も息も言葉も、声になる前に漏れ出してしまふ。

「爺!!!」

少女が金切り声を上げた。

「会社を裏切ったあなたが悪いんですよ。羽生教授の研究は既に完成していたのに、あなたはそれを隠し通していた。同じディーラーとして酷く心が痛む」

苦悶の色が老いた体を狂わせ、荒い息が漏れる。

大量出血で青ざめていく老人の肌は少女に恐怖を与えるに十分なものであった。

「そう。材料工学の権威、羽生教授が生み出した防業壁だが、羽生教授は脳腫瘍でなくなり、研究資料は行方をくらました。ファイアーシャッターは未完成のまま闇の中へ消えた、と思われた」

老人は声を出そうとしたが、そのたび、喉に開けられた穴から湧き出る血の流れが激しくなるだけだった。

「だけど、それはあなたの情報操作だった。羽生一家に情が移ったのか、波乱に巻き込みたくないがために死んだ羽生教授の研究データを全て消した!」

乾燥しきつた怒りが抑揚の少ない口調を通して淡々と語られる。

「それを奪うために羽生家に執事として潜り込んだあなたが!」

さらに数回、老人の背中から血しぶきが舞った。

少女の真つ白い額に赤い雫が降り注ぐ。

「いやあ!!!」

少女の悲鳴にかまうことなく、男は静かに笑みを浮かべた。

「しかし、幸いなことに、羽生教授が作り出したファイアーシャッターのサンプルのうち、まだ一つだけあなたによって廃棄されてないものがあつた」

拳銃を持つ男は床を這う老人の背中を一瞥して、少女に向きなおす。

「わたしにその奥歯をくれはしないか?」

阿鼻叫喚の沙汰の中、静かな、動きのない面持ちで夜叉は立つ。

開いた少女の口の中、燦然とした光を放つ奥歯が見える。

「娘の虫歯をコーティングする際に新素材を使うなんて、かなりの変わり者だったみたいだな。羽生教授は」

「い、いや……近づかないで」

足に血が通わない。つま先から徐々に冷気が少女の体を蝕んでいく。

倒れたまま、必死にあとずさる彼女に、火薬臭の染み付いた死神の手が触れようとしている。

「あまり時間を取らせないで欲しいな。こつ見えても私は忙しいから」

少女は電話機に手を伸ばしたが、男はそれを止めようとしな

「無駄だ。電話線は全て切つてある」

「人殺し……」

搾り出したようなかすかな声を、男は嗤う。

「そうとも、商人は刃あきんどについた血も舐めないといけないものだ」

少女の両肩を皮の手袋が捕らえた。

必死に振りほどこうとするも、体格の差はそうそう覆せるものではない。

ナイロン製の縄が少女の四肢に絡みつく。

「大丈夫。殺しはしない」

形を持つ猶予付きの死刑宣告が今、確かに下された。

悲鳴を上げる事は許されない。

口に丸めたタオルが詰められ、目隠しをかけられた。

堅牢な固定器具によって、下あごが開いたまま固定される。

そして、見えない何かがタオルの隙間から入り込み、少女の奥歯を揺らし始めた。

助けて！

痛みでフェードアウトしそうな精神をなんとか保とうと必死に体を動かしたところで何も変わらない。

男は少女の首を掴みあげたまま抜歯を行おうとしているのだ。

常軌を逸脱した不条理な力で持ち上げられた少女は自ら舌を噛み切ろうとしたが、タオルに阻まれてしまう。

「……」
不意に男の手が止った。インターホンのモニターに人影が一つ。

「おっと、来客みたいだな。痛いと思うけど少しこのまま待っていてくれ」

締め付けられていた喉が放された所為か、嗚咽が止まらず、逆流した胃液がタオルを濡らす。

なんで私が、何で爺が、何でお父様が……

木製の扉が軋む音をたて、一人、部屋に取り残された。

火薬、そして忌むべき鉄の匂いの只中、わずかにミルクティーの香りが漂う。

これからはもう飲めないであろう老人が淹れた紅茶の残り香を胸いっぱい吸い込んで、少女は思いを巡らす。

最悪の土曜日だ。

外の空気は湿っぽくて、それに暑かった。

雨の後の脂照りは現代日本人の普遍的価値観における、最も嫌な天候の一つだろう。

不覚にも、三回はずしたらアウトになるという法則ルールが天気予報に適用されないということを忘れていた。

外すのが売りだと主張する七光り野郎のキャスターに期待した僕が悪いが。

僕の仕事は担当地域の宅急便取扱店や顧客の元を訪ねまわって荷物を集めることだ。

これを集配担当といい、こうして仕事の内容を言葉に表すと短いが集配担当の一日はとても忙しい。

それに、何かしらストレスがたまる要因が多い。

例えば、こんな具合だ

トラックが通るには道があまりにも狭い。

いや、正確に言うと、狭いのではなく、狭くなってしまっている。木々に囲まれた閑静な郊外の細道が、両端に不法駐車された二台の乗用車によって極細道と化していた。

乗用車の持ち主が通っていた学校では、「迷惑」という言葉の意味を教えてあげなかったのだろうか。

もしも会えることなら、正しい人格形成のためにマーマレードと生クリームをたっぷり塗ったスコーンを食べさせながら教育を施してやろう。ただし、その時スコーンを食べるのは口ではなく鼻だ。

車に強烈なローキックを放とうかと思っただが、足軽宅急便のブランドイメージのために心頭滅却することにした。

念の為に言っておくが、決してBMWのエンブレムを見て恐れをなした訳ではない。

長年培ってきた企業戦士の自制心を舐めてもらっては困る。

……そんなことより、今は仕事のほうが大事だ。

「さて、どうしようか」

今日の気温は摂氏28。五月の初めにしては早い真夏日だ。

目的地まではもう少しあるけど、車が通れない以上台車をもって歩いて行くしかない。

なにせこの暑さだ。不快な汗がだらだらと胸板を撫で回す。

運転席に戻りたい気持ちを抑えてなんとか台車を後ろから取り出した。

「別にライメンが好きじゃないけど、こうなったら、トッピング全載せに替え玉プラス半チャーハンだ」

不倶戴天の乗用車どもに恨めしい視線を投げかけ、先を急ぐ事にした。

とりあえず、トラックは道路沿いにそっとしておこう。

そう、これは不法駐車なんかじゃない。いわゆる生活の知恵だ。

調布に来るのは何年ぶりだろうか。緑の多い町並みは、見る側と

しては大変心が落ち着く。恒常的な胃の痛みも苛立ちもなんだか和らぐ気がした。

家が等間隔に並べられた住宅街とは違い、余白の美学に彩られている。

ゆったりとしていて、風が香る。

都心とは時間の流れ方がまるつきり違うような心地だ。

こんな所に住めるのならどんなにいいだろうか。

庭で陽光に当たりながらキーン茶を飲む自分の姿を頭に描き、しばらくその場で立ち留まったまま景色の余韻を楽しんだ。

「いかん、いかん」

白昼夢に至る寸前で気を持ち直す。

台車を押してしばらく進んだところで、表札が見えた。

大理石製の表札に黒い字でくつきりと、「羽生」の二字が刻まれている。

これは確か……ハブ、と読むはずだ。少し難解な読み方だが、独特な所為で忘れずにいられた。そういえば、知り合いの羽生さんを何回も間違えてハオイさんと呼んでいたな。

「しかし、なんだ。東京にもこんな家があったとはな……」

そう。いわゆる「御殿」って奴だ。八面を庭で囲った二階建ての洋式石造建築物がえも言えぬ程の威容を誇っている。

執事と華族の流れを汲む深窓のお嬢様が住んでいて、十一時と十六時にティータイムを持つ光景を想像するのは容易い。

だが、それと同時に、何処か生活感のなさが感じられる。

全て閉め切ったままのカーテン。

玄関の郵便物入れからはみ出したいいくつものダイレクトメールとチラシ。

極めつけは庭に伸び放題の雑草。

もう誰も住んでいないと言われても信じてしまいそうだ。

しかし、集配の依頼は確かにこの住所からだ。

ひとまず、内向的な人物、もしくは庭に気を使わない人が住んで

いると仮定してみる事にした。

「むっ、あれは……」

雑草の中にまぎれた花壇にレモングラスやピンクペッパーなどのハーブ類が育てられている。

ハーブは紅茶にブレンドして飲むと中々美味だ。アイステイーを飲む前、ハーブをそのまま閉じ込めた立方体の氷を入れると見た目も美しい上、溶けたあとの香りもまた、格別だ。

植木鉢を置くには狭すぎるうちのベランダを思い出すと、鬱憤さえ覚える。

「ブルジョアめ……」

「知らない間にポケットの中に入っていました」作戦で持ち帰られないだろうか。

だめだ。持ち帰るのは「十年以下の懲役と五十万円以下の罰金」という高度のリスクを伴う。でもせめて香りだけでも嗅いでみたいないや。用があるのは荷物の方だ。

壱百八つある煩悩のカテゴリに分類すべきかどうかよくわからない欲を払い除けつつ、思考回路を仕事に戻しインターホンを鳴らした。

……あれ？

インターホンは鳴らない。

そのかわり、中から小さい電子音が聞こえている。

中の受話器がちゃんと掛けられていないのだ。

仕方がない。ここはひとまず、古き良きワールドスタンダード、

「ドアにノック」といこうか。

石畳十枚分ほど奥にある真っ黒の扉に近づき、二回、軽く叩いた。数秒待った所、返事はない。

もう一度、今度は少し強めに叩いた。中指の第二関節が案外に痛い。

「はい」

何の前触れもなく開いた鉄製のドアがものすごい勢いで鼻先を掠

めた。

反射的に後ろに下がらなかつたら整形外科の世話になるところだった。

中から出てきた人物は黒いジャージに眼鏡をかけた、どこか胡散臭い格好の青年だった。

ユルい、という表現がしつくりくる半開きの目が上下している。

「なんでしょうか」

寝起きが悪いのか、言葉にひどく苛立ちがこもっている。

宅急便を呼んでおいてなんでしょうかはないだろうが。

呼んだ本人にしる、違うにしる。

「足軽宅急便の者です。ちょっとインターホンが鳴らなかったので……」

語尾を濁し、申し訳ないといわんばかりに、苦笑いを作っ て見せた。

あたかも僕が悪いことをしたかのように、だ。

そう、日本ではこれを「サービス」という。

「宅急便……えーと、宅急便……そうだ！」

青年は伸び放題の髪をかきむしっては、何かを思い出したようで、奇声を上げながら家の中へ走り去ってしまった。

僕は閉まりかけた扉を足で止め、ポケットから伝票や小型端末を取り出した。

こいつはポータブルPOSというもので、伝票のバーコードを読み取る時に使う。

たまにバーコードを上手く読み取れない所が玉にきずだが、かれこれ、もう一年半使っている。

「しかしながら、立派な玄関だなこりゃ」

ここの住人は内装をやけに気にしているらしく、棚に並べられた装飾品はどれもかなり高価そうなものばかりだった。

どうやら海外のお土産が多いようで、カナダの国旗を持っているクマのぬいぐるみや、チングス・ハンの顔が描かれた小さい額縁な

どが目が付く。

庭にも少しは気を配ってほしいものだ。ギャップを楽しむにしてはやりすぎだ。

こうして、玄関先の装飾品を鑑賞するのが、僕のささやかな趣味の一つだ。

味気のない仕事の中、すこしでも文化の香りを感じようとする人間性の発露だと思ってくれていい。

装飾品の数やその配置は、時々、その家に住む人について様々なことを教えてくれる。

代表的なものを挙げると家族写真や彫り物などがある。家族構成や住人の宗教観などをほんのちよつとだけ垣間見れたりするのだ。

今のところ、彫り物は見当たらないが、ぬいぐるみの隣には木製の額縁に入った家族写真があった。

電気がついていないためよくは見えないものの、写真に写る人々がどんな顔をしているのか、なんとか判別できた。

一人の男性や、気が強そうな中学生くらいの女の子が晴れやかな笑顔を浮かべている。

「あれ？」

いつもは他人の領域に土足で踏み込むような失礼を犯さないために、写真の事で邪推しないことにしているが、この写真からは妙な違和感が伝わってくる。

この写真……

「すみません。待たせてしまって」

黒い足が影から現われた。

抱えた大きいダンボール箱がすっぽり、顔を隠している。

彼の様子からして、そこまで重いものではないらしい。

台車は車に置いてくるべきだったかも知れない。

ん？

左手の人差し指に、金の指輪が見える。

いままでポケットに入っていたせいで気づかなかつたが、青年の格好とは遠くかけ離れた値打ちを持ってしている事位は僕にだって想像が付く。

精巧な蜂の浮き彫りだ。目はダイヤで出来ている。

「ありがとうございます。ではお預かり致し」

鈍い音とともにものすごい量の埃が舞った。

台車を持ってきたのはどうやら正解だったようだ。

見かけによらず、このボサボサの青年はかなりの腕力の持ち主らしい。

荷物運びが仕事の半分といっても過言じゃない僕が言うのだからお世辞でもなんでもない。

はっ！

突然、家の奥から何かの鳴き声の様な音が聞こえてきた。

「動物を飼っていらつしやるのですか？」

「はい。小鳥を一羽……。こんなに大きな一戸建てで男一人は寂しいものですから」

それにしても聞いた事のない妙な泣き声だ。

先ほど取り出した伝票を渡し、メジャーで荷物の大きさを測った。

伝票の記入漏れをチェックし、ポータブルポスでバーコードを読み取る。

「着払いでよろしいですか？」

青年は頷くと、大きく欠伸をしてみせた。

間違えようがない。「僕は眠い。早く帰ってくれ」といったニユアンスをはらんでいる。

宅急便を読んでおいてここまで露骨に嫌な顔をされるとなんだか気が滅入る上、非常に居心地が悪い。

しかし、サービス業に従事する人間として、こういう時に取るべき態度は一つしかない。

鏡を思わせる表情演技で欠伸を返してやるのさ。おまけに、欠伸の後「ダルい」と小さく呟くのが模範的、いや、期待以上のサービス

スだ。

狙い通り、奴は機嫌を損ねたらしく、高圧的な目で睨みを利かせて来た。

挑発に乗った方が馬鹿だ。そうだ。お前は馬鹿だ！

とびつきり下品な笑いを投げて玄関をくぐった。

「では、荷物預かり致します！」

さっきの泣き声が、閉じ掛けた扉の隙間から漏れ出した。

「珍しいペットでも飼っているのか？ 僕の知ったことではないけど」

セコい勝利感の余韻に浸り、軽やかな足取りでトラックに到着。

ダンボールには割れ物注意とか天地無用とか書いてあるけど、そんなの構うものか。

さつさと片付けて今夜は久々のイブニングティーを楽しもう。

しかし、疲れ気味の腰に手を当てた瞬間、異変に気づいた。

「あれ、ポータブルポスが……」

イブニングティーは九分だけ延期だ。

「お願いだから起きていてくれ」

万願をこめた中指が扉を叩いた。

当然ながら、ドアの奇襲に備えて、左足は後ろに長く伸ばしている。

………反応がない。

しばらく待つて見たが誰かが出て来る気配は感じられない。

寝ているのだろうか、さっきの男は。

しかし、面倒なことになってしまった。これでは仕事にならん。

時計を見ると次の集配まであと一時間と少ししか残っていないかった。

文京区までの距離を考えると、ぎりぎりのところだ。

右手が力なくドアノブの上に垂れた。

「あれ？」

ドアノブが少しだけ下に動いた。
近くには人の子一人見当たらない。

そうか。彼は開けたら閉めましようの不文律を逸脱したのだ。
不法侵入の罪を問われるかも知れないが、相手はおそらく寝ている。
3秒で十分だ。音を立てずに扉を開け、ポータブルポスを取るまで
は。

なんだか良心の呵責を感じなくもないが、僕は今、急いでいる。
チャンスは一回きり。

全神経を指先に集中し、良識も道德観も置き去りにするスピードで
ドアを開いた。

摩擦音すら聞こえることなく、ドアはスムーズに開き、中から空気
の奔流が押し寄せる。

「あつた！」

ポータブルポスは丁寧にも床の上に放り出しっぱなしになっていた。
まあ、変なところに置かれていても見つけれないが。

急いで腰をかがめて上半身を扉の向こう側へねじ込んだ。

これこそが、僕の良心に対する最大限の譲歩だった。

別に僕は家の中に「踏み込んだ」わけではない。不法侵入ではない
のだ。

まあ。屁理屈だが。

ここまでかかった時間はわずか2秒弱。あとは蒸らしすぎた紅茶の
香りの如く、すばやくこの場から立ち去る事のみ！

我ながら見事な判断、そして瞬発力であった。

しかし、僕は拾い上げたポータブルポスを再び落とすことになっ
てしまった。

視野の左奥に、さっきのうめき声をあげていたであろう、「小鳥」
とやらが映ったのだ。

目隠しをされ、四肢の自由を奪われた一人の少女がそこにいた。
顎を固定し、口を開いたままにさせる、今では映画の中でしか見れ
ない拷問器具の様なもの口にはめられている。茶色の目隠しは涙に

よってうつすらと濡れていた。

目隠しや固定器具のせいで顔はよく見えないけど、白いワンピースを着たその姿はおそらく僕より二つ下かそこらへんだろう。

少女の口をふさいでいたと思われる丸めたタオルが無造作に吐き出されている。

さっきまでうめき声を上げていたに違いない彼女の口の奥には銀光沢の金属でコーティングされた、おそらく虫歯であろうその奥歯は、この物憂げな空気の中で妙な光を放っていた。

顔に手を近づけたところ、まだ息をしていた。気絶しているのだ。

さっきここに来たときにはいなかったところから見て、僕が去った後、必死で脱出を試みていたのだ。

その証拠に、ワンピースの一部が黒く汚れている。床の埃と見て間違いないだろう。

この少女は体を捻りながらここまでたどり着いたのだ。

どうすればいい

さっきの男に気づかれる前にここから出ないといけない事は分かっている。

間違えようがない。監禁事件だ。このまま警察に通報するのが最も正しい選択なのは明らかだ。

だが、この女の子を警察が来るまでこの状態にして置くのは気の毒で仕方がない。

まず目隠しとその他のものを外してやらなければ。

靴を履いたまま中に入り、少女の、力なくうな垂れた頭を持ち上げた。

しかし、顔の下半分を覆う奇怪な形の固定器具は金属製で、壊せそうにない。

「どうやって外すんだ。これは………って、はっ？」

後頭部に硬い突起みたいなものがある。

押して見ると、カチッと、錠前が外れる様な音とともに難なく固定器具が外れた。

驚くほど白い、というより蒼白で血がまるで通っていない頬が現われた。

固く結ばれた目隠しを解くと目頭は潤んでいるままだった。目隠しだけでは涙を吸い取りきれなかったのだ。きっと。

長時間の拘束による疲労やストレスで衰弱してはいるものの、驚くほど凜とした顔立ちだ。

セミロングの髪やこの整った輪郭から察するに、先ほどの家族写真に写っている人物だと思って間違いなさそうだ。

厳密に言う写真の少女よりは少し大人びて見える。写真は数年前に撮影されたものなのだろう。

この家に入ったとき覚えた違和感は、家族写真にさっきの男が写っていないかったことから来ているのだろう。

とりあえずトラックまで連れて行けば安全は保障される。

ここから出て会社や警察に連絡を入れよう。

続けざまに四肢を縛っていたロープをほどき 結構な硬さだ そのまま持ち上げた。

少女は思ったより少し重かった。気を失っている人間は重いと聞いていたが、実際に持つて見ると想像以上だ。

両腕でがっしりと首とひざ関節の裏を持ち上げた。

運ぶものが人であるが故、何とか抱っこといわれても仕方がないが、今僕がしている事は疑う余地なくダンボール箱の運び方だ。

「わりい。人の運び方は教わっていないんだ」

しかしながら、なんとという土曜日だ。薄幸の佳人を凶悪犯の手から救出することになるとは。

いかん。こんなことを考えている場合じゃないな。

そのまま後ろに下がって、肘でドアノブを下げようとしたところで、なにかにぶつかった。

「なあ、好奇心が猫を殺したって言葉、知ってるか？」

背中当たるずっしりと重たい感触に抹消神経が戦慄を覚えた。

金属製の部品が噛み合う音が背中に当てられた物の正体を物語っ

ていた。

玄関の鏡の中に三人目の姿が映った。

「そして、好奇心が殺すのは猫だけじゃねえ」

さつきとは対照的な、恐ろしく冷たい笑みを浮かべたまま、彼は続けた。

「ホーネット&バレル社謹製、個人火器STM 12（シューティング・ザ・ムーン）。強力なマンストップピングパワーや装填の早さが売り。全長二三〇ミリ、重量二二〇〇グラム。有効射程五三メートル。定価約4500USD。お求めは全世界の銃器販売店で手慣れたセールスマンを思わせるハイトーンで早口の商品紹介が流麗に綴られた。

「……欲しくないね」

「誰も君に売ってやるとは言っていない。それに、俺としては君に我が社の商品の凄さが分かるとは思えない」

めちやくちや偉そうな上から目線で頭に来る。

はあ。しかし憂慮していた事態が起きてしまった。

少女を放って置いて、先に警察を呼ばなかったどこかのお人よしに万歳。

なるほど。つまり僕はストレスに耐え切れずサイコパスと化した銃器会社のセールスマンが商品を拝借して起こした拉致監禁事件に巻き込まれたわけだ。

なあ、冗談だろう？

「世間ではこういうのを運の尽きと言っらしいぜ」と、どこからともなく声がした。

よく考えるまでもなく発信源が特定できた。間違えようがない。僕の理性だ。

「女を降ろせ」

なんだか抱えている女の子が疫病神に見えてきた。

これが本当のお荷物。なーんちゃって。

……とうとう僕はおかしくなり始めたらしい。

今のところゆっくりと屈んで少女を元の場所に戻すほかないようだ。

「手を後ろに向ける」

短い命令文により僕の人生が着実にバッドエンドへ向けてラストパートをかけているのがよくわかる。

さっきまで少女を縛っていた縄が僕の手首に食い込んできた。

足も同様に縛られた後、彼は強烈な膝力ツクンをお見舞い、って膝が地面にぶつかって痛いこの野郎！

「声を上げたら殺す。まあ、こっちが終わったらどうせ殺すけど」どっちにしても死ぬのか僕は。

ならば声を出して隣近所の方に助けを求めた方が少女のためにもいいに決まっているが、

そんな事、僕には出来なかった。

矛盾するようだが、生に対する少しの執着と、それとは真逆の諦観がさるぐつつわの代わりに僕の口を固く締め付けた。

「……………」

もうすぐ銃声が聞こえて赤黒い肉片と血しぶきが顔に飛んでくるだろうと踏んで目を閉じていたが、そんな音は聞こえない。

そつと開けた片目に映る男の手が握っているのは歯科医が使う抜歯鉗だった。

少女の細い下顎は男の左手によって大きく下げられている。

抜歯鉗は少女の銀色の奥歯を握ると、上下左右に揺らし始めた。

いまさら「奥歯フェチの変態野郎でしたあ」ってオチはないだろうな。

「殺さないのか？」

素朴な疑問だった。

不思議な生物を見るような目でこっちを一瞥すると、奴はこう言った。

「ああ、私はフェミニストなので、女の子を殺すなんて野蛮な事はしない」

……局部麻酔もせず永久歯を抜くって事がどれほどの苦痛を伴うのが理解していないのか。
フェミニストの意味を「抜歯プレイを楽しむサディスト」だと勘違いしていないか？

こやつがフェミニストの定義を間違っていないことを祈る。

「そうか。女性は殺せないのか……何を隠そう、実は女なんだ。僕は」

「……」

何を思いついたのか、奴は一度手を止めた。

ふむ、意外だ。やはり言ってみるもんだな。何せ相手は狂人の様だし。

「今までになく不愉快だ。やっぱり君を先に片付けることにしよう」

いかんせん相手が相手だった。さすがに雌雄の区別はできるらしい。

これでめでたく助かる可能性は無量対数の彼方へ消えたわけだ。

「そうだな。隣の部屋で突っ伏している爺さんの様に素敵なピアスホールをあけてやろう」

こいつ、もう既に一人以上殺している。

写真の中の品が良さそうなお爺さんが上の階で血の池に沈んでいる様子が脳裏をよぎる。

さきほどの「シューティングほにゃらら」の銃口がこめかみにあてられ、頭の上から注がれる無色無臭の視線に全身の細胞が引き締まる。

必死に反抗したりはしなかった。ここまで来たらすでに諦念の段階に入っている。

「死ぬ。女性やフェミニストの敵」

意味が分らん。というかお前が言うなど、怒涛のツッコミを入れたいが、あいにく、生まれるべくして僕に定められた時間はもうすぐ終わってしまう。リアクションで終わらせるには今までの人生が

もつたいなさ過ぎる気がするな。

残りの僅かな時間の使い道は割りと早く見つかった。

そんなに悪いことをしていなかったとしても、神の御子とやらを信じていなければ天国に行けないとか、ジユペリ先生はよく言っていた。

あの時は、はい、そうですねかと頷いたけど本当に信じているわけではない。

でも、本当に天国と地獄があつて、ジユペリ先生の言葉が本当ならば、僕は間違いなく地獄行きだろう。

まあ、つまり、あれだ。試して損はないって事だ。

行くなら天国の方がいいに決まっている。

神様、僕は天国と地獄のどっちかといわれると、そりやあもちらん天国に行きたいんですけど……もし、もしもの話ですけど、天国に紅茶があつたらそれはそれは素晴らしいだろうなあ、って一度考えてみたんですよ。いや、なかったらしょうがないんですけどね。まあ、そんなことより、僕はあなたのお眼鏡に適うような人でない位はわかってますよ。

別に人より素直だとか知らないおじさんに電車賃を貸してやつたりしたことなんてありませんからね。あ、でも金に困っているからいくらか貸してくれと、裏路地で可哀想な十代の少年何人かにお金を恵んだ事がありますけど。

でも、もしも、こんな笑えないシチュエーションの中にいる僕を少しでもかわいそうだと思うならば、天国に連れて行ってくださいな。だめだったらそれはそれでいいんです。それならもうちょい生かしてチャンスを与えるなり、地獄に放り込むなりなんなりと好きにどうぞ。

僕にはいるのかどうかはつきり分からない絶対者に、それはもう、クリスチャンとかいう種族が聞いたら顔を引きつらせるであろう、

無駄に冗長で中途半端な祈りを捧げた。

でも、神って全知全能って言うしな。こんな気持ちのこもっていない微妙な祈りを聞いてくれるのだろうか。

そういえばまだラーメン奢ってもらってねえな。

紅茶の棚にもまだ飲んでいないものが山ほど残っているのに。名残惜しい。

人生の最期に思い出すのがラーメンと紅茶って、やっぱりどうにかしている。僕は。

普通、家族とか友達とか愛人の顔を思い出すはずだが。

ああ。短かったな。二十年。

ジユペリ先生はいつも食事前の祈りの最後になんて言ってたっけ。そう、思い出した。確かこんな感じだ。

「イエスの御名により（イン ジーザス ネーム）……………」

ラーメン！

三杯目

何の脈絡もない回想や祈りに終わりが訪れた。

そう。鼓膜を殴りつける轟音と共に。

うつすらと暗いこの家に、湿気や陽光と共にそれはやってきた。

青と黄色の大胆な配色で塗装された大型のバスが前方の壁をぶち破って家の中へなだれ込んできたのだ。

もしかしたら僕のふざけた祈りは神の怒りを買ってしまったのかも知れない。

近くを走行中のバスが突然民家に激突し三人が死傷、と。

これで明日の朝刊の一面はいただきますだ。

なーんて冷静に考えられる訳ないだろう！

今しかない！

呆気にと取られている偉そうな気遣いに捨て身の体当たりをかまして、体育の時間以外はやったことない前転もどきで少女の元へ馳せ参じ、バスの衝突予想地点から逃れた。

車体の重量は物理法則に則り、速度の二乗と共に莫大な運動エネルギーを生み出す！

奴は跳躍してかわそうとしたが、進路上に残っていた右肩に車体の端が触れた。

「うああああ！！」

弾かれた奴の半身がつま先を軸に大きく反れたとこまでしか見ることができなかった。

バスがすぐに僕の視野を埋め尽くしたからだ。

そして、明らかに人間の肉体から出たとは思えない音に覆いかぶさるようなブレーキ音が響いた。

車は衝突することなく、壁と接触するすれすれの所で計算されたように止まった。バスが、少女と僕、そして奴の間を隔てた。

いや、バスと言うには少し異質だ。

メタリックな車体には大きく白い字で「極討放送」と書かれている。

マラソンの実況などで度々目にする、放送局で使う大型移動中継車だ。

「助かった……のか」

いまの僕はきつとマヌケな顔をしているに違いない。

でも一つだけわかった。危機は去った……かも。

神は結構過激な性格をお持ちの様だ。

車高はゆうに二メートルを越えていて、壁に空けられた穴は巨大なものだったため、木端や微塵、それと砕けたコンクリートが散らかり、広い動線が演出された。

そして、劇的なビフォーアフターを生み出した中継車の側面の扉から人影が三つ舞い降りた。

僕は願った。

何処かの大掛かりなドッキリであってくれ。

瓦礫の中に半分ぐらい埋まって死んだ振りをしていたが、やっぱり好奇心とは不思議なもので、糸目を開いて全てを見届けずにはいられなかった。

最初に飛び降りたのは、体の半分以上を覆えるサイズの、白い布が張られた四角い金属板を持った線の長く、恐ろしく無感情な瞳を持つ男だった。

深く被った無地の茶色いキャップの影から男にしてはかなりの長髪が見える。後ろで一本に結んでいるおかげで、細い首筋が露わになっている。

いやみっいたらしいけど、かなり、高い鼻梁や鋭い目をそなえている。

認めたくはないけど、美男子だ。

片手で持っているあの金属板には見覚えがある。名前はわからないが、たしかドラマのロケなどで太陽光を反射して照明代わりにする

時に使う物だ。

レフ板と言うんだっけな。それにしちやかなり分厚いが。普通はフレームに布をかけるだけだが、金属板の上に直接布を貼っているようだ。

ジーンズにポケットの多い群青のベストを着たその姿は、腕章こそつけているものの、報道関係者というよりは軍人のような雰囲気 を漂わせている。

次に現われたのはこれまた腕章をつけた男で、さっきの男とは対照的なスポーツヘアに無精ひげとサングラスがエラく似合う、何処か胡散臭い中年だ。

日焼けした顔にアロハシャツや短パンと言うリゾートチックな出で立ちだが、馬鹿でかいビデオカメラを肩に担いでいるのにも関わらず軽やかに動いている。ハワイアンのカメラマンだと言ったら一番しっくりと来そうだ。

そして最後に、何の脈絡もなく小柄で金髪碧眼の外人のお姉さんが不器用な足取りでおろおろしながらぐちゃぐちゃのフローリングに軟着陸。

ハイヒールが床のひびにはまってしまったようではばらく踵をつかんで唸っていた。

スーツを着て、マイクを持っているけど、リポーターのつもりだろうか。

彼らの他は何一つ動いているものはなく、僕の両目にはまるで静止している時間の中で彼らだけが自由に動く様に映る。

自分の目の前で起きている出来事に関する詳細な説明やその訳が今すぐ聞きたい。

監禁事件を目撃した直後に中継車が突っ込んで来て、照明さん、カメラマン、それにリポーターが現われる……か。僕がとうとう狂ってしまったと説明するのが一番合理的かもしれない。

まるで困惑した様子は見えない。この場所に一定の目的を持って来ているような足取りだ。

「あーあ。烏熟君^{オウシ}、また気絶しちゃったね」

外見にそぐわない、流暢な日本語が顔をすっぽり覆うボブカットの中から発せられた。

「まったくだ。運転できるのはあいつしかいないというのにな。はあ、どうやって帰ればいい」

髭の中年男性はとてつもなく投げやりな事を言っている割に妙に楽しそうだ。どうやら中継車の運転手は気絶しているらしい。

「問題ない。帰る時になったら弾を何発かブチかましてやればいい。目が覚めるだろう」

キャップの男は物騒な事を顔色一つ変えずに口走ると、ベストのポケットに手を伸ばした。なにが入っているかは今の言葉で概ね想像がつく。

「そんな事言うなよ。お前だつての前ギアを根こそぎひっこ抜いちまったじゃねえか」

と、ハワイアンがフォロー。
「そうよ。ブレーキとアクセルの違いも分からないでしょう？」
和^{かず}は

続け様にスーツの女性。

「和と呼ぶな。それに、ギアは壊れてなんかいない。天寿を全うしただけだ」

「ああ、他殺されたようだけだな。それもハンドルを道連れに」

開き直った「和」は険悪な目つきで二人を一瞥すると、すたすたとこつちへ歩いてきた。

いかん。目が合ってしまった。

急いで目を逸らしたが、向こうは僕にあまり興味がないらしく、せつせと気絶したままの少女を抱えて車に戻った。

目を瞑って息を止めている自分が少しだけ馬鹿らしい。

「まさか自分の娘に持たせていたとは……」

普通の放送用ビデオカメラより一回りほど大きいそれが少女に向けられた。

アロハシャツの男はものありげな表情を浮かべたが、僕に気づいたららしく、おもむろに僕の顔にカメラを近づけてきた。

「ヘイ、少年。死んだ振りしても無駄だぜ。ここで何をしていたか詳しく聞かせてはくれないかい？」

気づかれたか。まあ、目を開けているんだ。ばれてもおかしくない。

「というかそれは死んだ振りじゃないな、もう。」

男の碎けた抑揚はアメリカかぶれなのか、ホームドラマの見すぎかわからんが、お陰で緊張がだいぶ和らいだ。

「ねえ、詳しい話を聞かせてよ。」

いつのまにかひよっこりとリポーターの女性がマイクを持って駆け寄ってきていた。

「いかん。好奇心で目が輝いている。断るには勇気が必要な。」

じーっと僕の目を見つめていた緑の大きな瞳がカメラに向けられた。

「じゃあ、突然ですがインタビュー行きます。」

「ええ?!」

カメラのレンズの奥でくるつと絞りが回るのが見えた。

「いや、待て。ちょっとタイム。心の準備が……」というか、何が起きたのか僕自身まだ整理できていないんですけど。

「3秒前、2秒前……」

「1を言わないあたりが妙にリアルだ！」

「なんなんだこの人たち！」

ドッキリ！ と書いてある板を持ったPDさんを探して見たが、現われてくれそうにない。

「僕はただ、宅急便の集荷で来ただけだっ……」

「待て」

埃を払いながら腰を上げようとしたところ、とんでもない鋭気が顎の下から発せられていることに気づいた。

ベストを着た男がリポーターと僕の間割り込んできた。

僕の喉に突きつけられた馬鹿でかいレフ板の一端は、それこそ日本刀の如く鋭利に研磨されていた。

「貴様はアレ（・・・）を狙ってこの家に侵入してきた。違うか？」
「なんですかアレって。何で僕は巨大な刃物を突きつけられなければならぬんですか。」

何か悪いことでもしたのか？ 僕は。

とりあえず出来るだけの説明をしなくては。

「い、いや。そいつならさつき貴方たちの中継車に轢かれて吹っ飛ばされたでしょうが……」

あまり大きな声を出して刺激を与えなくなかったために、自然と蚊の羽音位の音量に収まるのだった。

「信用ならん。お前もそいつの一味だろう。本当のことを話せ！」
「リポーターの女性が首を横に振っている。いま「やれやれ。またか」と言ったのが聞こえたぞ。」

「だから一味だか七味だか知らないと言っているだろうが！ 僕は被害者だ！」

「しらばっくれてんじゃねえ！ ペンギンが低空飛行するって話の方がまだ真実味がある」

「さて、おかしいだろう。そのたとえば。てか疑心暗鬼って言葉聞いた事ある？」

憤然として立ち上がり、胸ポケットから免許証と社員証を奴の顔面に叩き付けた。

さっきのやつには「フェミニスト」の、こいつには「疑心暗鬼」の正しい意味を教えてやらねばいけない気がした。

「ヒュー、やるね」とハワイアンが口笛を鳴らしながら茶化してやがる。

「ええい！ そんな事は知らん。とりあえず片腕を切り落としてくれるわ！」

「なんでだよ！」

そう吐き捨てる、奴は巨大な凶器を僕の頭上高々に持ち上げた。

それもずいぶんと軽そうに。

かなり短気だな！ おい！

「お願いだから人の話を聞けえ！！！」

サイコパスの後はコミュニケーション能力が欠如している適応障害か。

ツッコミの代価は片腕ですか。そうですか。

まったく。なんて土曜日だ。

……ああ、いつそう楽にさせてくれ。

レフ板が空気を裂く音と共に荒々しく振り下ろされる。

避けようにも体が動かない。

義手の相場つてどれくらいだっけな。帰ったらヤフーオークションで調べて見るか。

生きて帰れた場合の話だが。

切られるのが利き手じゃないことを祈る。

「いやあああ！！！」

リポーターの悲鳴で我に返った。

レフ板を盾の様に構えた奴の背中が見える。

切られた所はないかと確認したが、どうやら腕は無事らしい。

僕を縛っていたロープが切れていた。

「やっとお出ましか」

背中越しに見えるレフ板が、まるで音叉のように、微細な振動を続けながら低い唸りを上げている。

ポトリと、真ん中が割れた鉛の塊が床に転げ落ちた。

「あれは……」

怪訝な顔のハウイアの視線をたどった先、猛毒を孕んだ瞳が崩れた天井の影から不気味に光っていた。

こっちに向けられた銃口からは細い灰色の硝煙が風に靡いている。

じやりじやりと、砕けたコンクリートを踏みしめる音と共に、そいつは全貌を現した。「ベル。俺が合図したらこいつを連れて車に乗

れ」

金色のボブカットが頷く度に軽やかに揺れる。

ベルと呼ばれた小さな女性の左手は僕の手首をがしりと掴んで放さない。

手のひらから伝わる僅かな震えと鼓動が、彼女が極端の緊張の中にあることを示す。

ああ、認めたくはないが、僕は完全に巻き込まれてしまったようだ。「まさかマグナムを弾き返すとはな……」

ジャージは至るところが破れていて、その隙間から生々しい擦り傷が垣間見える。

「マグナム弾と言え貫通力の弱いホローポイント弾だ。無理に決まっている」

中継車に轢かれて吹き飛ばされたのにもかかわらず、確かにやつはそこに立っていた。

皮肉な笑みが張り付いた口元から何ともいえない不気味な強靭さが感じられる。

だが、僕が驚いたのはそこじゃない。

「ホーネット&バレル社謹製……軍用超高出力筋電義手、金剛従子。

ハイキュリアン・サーヴァント

オートマテックトルクチェンジシステムによる握力の調節や十四の関節によるスピーディーな駆動が特徴。仕様素材は高抗張力鋼及びマルチワールナノチューブ。お求めはホーネット&バレル社まで……」

銃を握る右手の皮膚が「ほころびた」断面から太い半透明の筋繊維や金属製の骨格が露呈していた。

まるで人間になりましたターミネーターの人工皮膚が剥がれたシーンの様な　　そうしか言いようがあるまい　　不気味さに軽い目眩を覚えた。

さつきサイコパスと言ったが、訂正しよう。猟奇的なほどサイボーグだ。

……もし僕の腕が吹き飛んでいたなら、あの義手の購入を検討してもいい。

「高性能の人工筋肉にホーネット&バレル……。なるほど、近頃の不安定な動きの黒幕はお前ら（・・・）か。こりゃ特大スクープだな」
ハワイアンは淡々とした声で……。ってなにのんびり傍観しているんだ、僕は。

脱出路を探して家中を見回したが、玄関は中継車によって塞がれ、唯一外に通じる道である壊された壁の前には機械の腕と銃を持ったセールスマンが待ち構えている。

うん。今なら見えるぞ。目の前に広がる茨道が。

「さっきの少女をよこせ。そしてすみやかにここから消えろ」

頼むからそうさせてくれ。誰でもいいからこの空間から僕を出してくれ。

悪いけど僕はリタイヤさせてもらおう。もたもたしていると人生をリタイヤさせられそうだ。

こんな奴ら放って置いて今すぐ警察署に駆け込もう。

「あの……。僕一般人なんで……」

こんな非日常なところに僕がいるのは場違いだ。

とつとと失せてしまう方が、世のため人のため僕のため！

「断る……と言ったら？」

「ここが血まみれのいわく付き物件になるだけだ。当分誰も住みたがらないだろう」

レフ板の裏側に映る僕は白タオルを投げ損ねたセコンドが狼狽した時の顔をしていた。

ああ。わかった。わかったから、僕がない所でゆっくりやっつけてくれ。

「そいつは愉快。せっかくの一等地が台無しだな」

アロハシャツのボタンが次々と外され、角ばった筋骨が現われた。

ベストの男もレフ板から布を剥ぎ取り斜めに構えた。

無色無臭の狂気が言葉と言葉の隙間を縫い付ける。

「ただし、ここで流れる血はたったの一人分だ」

キャップの下で骨ばった人差し指がリズムカルに揺れる。

ああ。どうしよう。お構いなしで始まつちやつたよ。

「言っておくが、先に弾をたっぷり込めておいた方がいいぜ」
神経、感覚、鼓動。

闘争の空気に飲み込まれた体はまともに機能を働かせない。

「私は敵の前で悠々とリロードを行うほど馬鹿じゃないのでな」

乾燥した言葉が交錯し終えた後の沈黙や拮抗に、時が壊れた様な錯覚を覚える。

「別に馬鹿にした訳じゃないんだな、これが」

不測の刹那、二つの影が前方へ撃ちだされた。靴がすれる音が二人の躡進を告げる。

それらを阻むべく、銃口から音速の凶器が次々と放たれるが、先頭に立つ照明器具の男は目にもとまらぬ速さで銃弾をさばき、なお目標から目を逸らさない。

「?!」

「人」という分類からはみださんばかりの動きで刃が迫る。

落ちた八つの葉莢が澄んだ響きをたてた時には、既に金属板の横薙ぎが奴の鼻の先まで到達していた。

「残りを撃ちきつてもリロードの時間はやらねえってこつたよ」

しかし、奴の不可思議な右手はレフ板を受け止めた。

五指が先端を万力のように挟んでいる。

レフ板の刃は、手のひらに少し食い込んであるものの、それ以上進むことも、退くこともなく、ぴたりとも動かない。

長い前髪に覆われた眉間に僅かに驚愕が走る。

が、その表情は一瞬のうちに残忍な嘲笑へと変貌を遂げた。

「ハイ、チーズ！」

無防備の左側からハワイアンが現われた。

カメラを地面に突き立てたまま支点とし、体を回転させる。

全体重を載せたドロップキックが脇腹に炸裂した。

「クッ……」

打撃点を中心に奴の全身がしなり、そして吹き飛ぶ。

体が宙を舞い、壁にかけられたマネの「草上の昼食」に激突。

埃を立てて力なく崩れた奴の頭上に、絵画は二回ほど頼りなく揺れると、角から落ちてきた。

「ベル！ 今だ！」

「はい！」

戸惑う僕を連れ、ベルと呼ばれたりポーターは中継車へ駆け込んだ。

あの中はきつと安全だと、自我に対する必死の説得の甲斐あって、動こうとしなかった両足をなんとか中継車に向けた。

でも、なんだろう。この不気味な静けさは。

「危ない！」

刹那の判断だった。

僕は彼女の手を振り払った。

「えっ？」

彼女の反応を気にする余裕はなかった。首筋に温かいものを感じる。

「痛え！」

大きめのガラスの破片がとんでもないはやさで首を掠めたのだ。

壁に寄りかかり、うつむいたままの奴の右手に数枚、ガラスの欠片が光を放っている。

もし手をほどかなかったなら、間違いなく僕の頸動脈は切られていた。

「伊達に軍用の二字がついているとでも？」

二度ある事はやはり三度ある。本日三度目の命の危機にはまだ続きがありそうだ。

いくつかはさっきのキャップの男がさばいてくれるが、防衛線を抜けたガラスが数枚飛んで来る。

「速くこっちへ！」

五感を総動員して次々と投げられる凶器の隙間を潜り抜け、中継

車の中へ身を投じた。

ドアが閉まり、ロックがかけられた。

「安心して。この車は完全防弾よ」

微弱なビブラートを帯びた声で言われても安心できない。

編集用のモニターやミキサーなどで埋め尽くされた車内、円いシートの上に脱力した全身が倒れこんだ。

「あなたは大切な目撃者よ。生き延びてもらわなければ困るわ」

この状況に最高に似合わない平坦な、落ち着いた声で彼女は語る。

彼女の目の奥に強い何かがちらついて、こっちは酷く落ち着かない。

「お願い。何を見たか話して」

僕にもまだ何が何だか分からない。

何故、僕に銃口が向けられたのか。

何故、中継車は壁を破り。

何故、報道関係者が撮影用品を駆使して殺陣を演じている。

何故、奥歯を欲しがるサイコパスの腕は生身でないのか。

疑問なら、疑問の数なら、僕にだって、いや僕の方が絶対圧倒しているはずなのに。

なのに

「ふざけるな！」

毒づいてやった。

考えられない。こんなの認めない。なにより理不尽すぎる。

「帰せ。僕を家に帰せ！」

飲み込めない。いや、分からない。こんなことは永遠に知りたくない！

出来ることなら今すぐここを抜け出して仕事に戻りたい。胃が痛むトラックの運転も今では言い表し難いほど愛しい。ああ、そうとも紅茶が飲みたくて時々ズル休みしていた月曜日は、独り用のポットと寂しく過ごす土曜日は最高に麗しい。狭くてじめじめするマンションの部屋で、乾燥機をつけて紅茶の缶を眺めたい。今すぐに！

「これはあなたとその娘だけの問題じゃないのよ」

聞き入れるものか。やすやすと従うものか。理由なんか知りたくない。

明確で非情な真実なんて茶越しに残った残りかすと一緒に捨てちまえ！

僕の日常に当たり前のように棲みついたほんの少しの不条理と矛盾を返せ！

「僕の知ったこつちやねえ！」
隣のシートに横たわっているさっきの少女の目が開いた。

僕の顔を見るなり、酷く怯えた様子でシートの奥へ、その小動物の様にまとまった体を押し込んだ。

なんなんだ。

怖がる理由は分からなくもないが、その恐怖の対象に僕が含まれているという事実が、少女に対する苛立ちを生み出した。

「よかった。目が醒めたわ」
ベルの顔に安堵の念が見える。

しかし、少女の方とても何が何だかわかったもんじゃないだろう。

あの様子じゃ、ずいぶんと酷い目に合わされたのだろう。
少女の自由を奪っていた様々な物が脳裏を横切る。

仕方がない……か

「……すまない。驚かせてしまつて」
少女は押し黙ったまま、僕に荒れた瞳を向ける。

読み取れる感情は一つではない。

恐怖、憎悪、恨み、疑問、そして不安。

そのどれもが、対象を見失い、混乱へと収束する。

恐慌状態にいるのだ。どれくらいの時間監禁されていたのだろうか。

爺さんの様に素敵なピアスホールを開けてやろう

写真の老人は身内か、もしくはそれに準ずる人物に違いない。

涙水か鼻水か分からないものが少女の紅潮した顔から落ちてきた。

そのまま、泣き崩れやがった。

「大丈夫。私はあなたに危害を加えない」

ベルが手を伸ばし、少女の元へ近づくが少女はそれを振り払う。

「っ！」

引っかけ傷が真つ白な手の甲に刻まれたが、それをものともせず
にベルは少女との距離を詰める。

「そう……怖かったのね」

そして、目を瞑って、取り乱した一人の女の子を正面から抱きかか
えた。

全身でベルを拒み、押しのけようとする。

それでもベルは少女に、その恐怖に、ゆっくりと、けど確実に近
づいてゆく。

少女はしばらくもだえたが、動くことを止めた。

よりいっそ強く抱きしめるベルの腕の中、少女はむせび泣き始めた。

「だれも傷ついたりしないから……だから、もう怖がらないで」

ベルも少女と一緒に泣いていた。

四つの赤く腫れた目で。

まるで痛みを共有しているように、二人は泣いている。

僕と、いや、僕と運転席で気絶しているはずの誰かさんだけが取
り残された。

誰かの痛みを知る事は出来ない。このベルとかいう女性も少女の
痛みを知らない。

彼女はこうして、何も聞いていなくせに、さも少女の痛みが見
えているかのように泣いている。

だが、それは計算が絡んだ演技でも何でもないので。

ただ、共感している。少女の壊れかけた心に触れている。

少女の感じる底知れぬ恐怖も、凄惨な消耗感や悲哀も、全てその
小さな身で真正面から受け止めているのだ。

反則だよな

結局、一瞬にして全てを奪われた一人の可憐な少女の前で、僕は日

常を返せなんて事は言えなくなってしまった。

「クソ、これじゃまるで僕が悪」

「やあ、ベル姉、何が起きてんだ？」

三人の視線が一斉に前方を向く。

運転席とこちら側を隔てるカーテンが勢いよく開き、眼鏡の男がこつちを覗いてきた。

「……………ああ。起きてたの」

恥ずかしそうに両目をこすって、ベルは少女の隣にちよいと座り込む。

「え？ 俺なんかまずいことした？」

初対面の僕に聞くな。なれなれしい。というかもう知らん！

しかも、まずいことをしたかと聞きながら「空気は読むもんじゃねえ」と言い出しそうなしたり顔をするのは光速でやめる！

我ながら子供じみてはいるが、そっぽを向いた。

なんて奴だ。羊飼いの少年が昼時に牧歌を歌う様な趣を全身からかもし出していやがる。

アルプスで異常に紐の長いブランコを押しそうなの、そばかすだらけの牧童を彷彿させる運転手は少女と僕に興味を持ったようで、じろじろと視線を注ぐ。

「その女の子が例の……………」

少女が再び警戒をあらわにした。

「烏^{オウ}熟^レ君！！」

「いや、わりいわりい。それで、その宅急便の服着ているお兄さんは？」

この人、外の状況は全くのお構いなしだ。ついでにそばかすほどの大きさの緊張感も見当たらない。

「あのね、そんな事より、外で和と仙石さんが……………」
また一発、銃声が鳴った。

いい加減地域の住民たちから通報があってもいい頃だと思うが。

野次馬が来たらすすがにブツ放しまくる事は出来なくなるだろう

な。

いや、常識で考えられるような問題じゃないな。これは。目撃者を全員射殺しかねない。奴なら。

あのおぞましい程の狂気の前では民間人だろうが警察だろうが無関係なのだ。

「はあ。こりゃそろそろ切り上げた方が良さそうだね」

そんな事より、非常識なことの流れの中で見逃していた至極真つ当で普通の疑問を解決する必要があると、僕は感じた。

そう、答えてもらおう。

「あんたたち、一体何者?!」

四杯目

「所属を明かせ。なぜ邪魔をする！」

獲物を逃した怒りが脊髄の中を流れ、男のこめかみに血管が浮き出る。

この状況はまずい、と直感が囁く。さっきの一撃の所為で深刻な漏電が起きている。右の人工筋肉の駆動時間は残り僅か。

男は激しい焦燥感に神経が磨り減るような感覚を覚えた。

「さあてねえ。その交番にでも行つて聞いてごらんよ。あ、でもそのなりじゃあいきなり発砲されるかもな。腕に包帯を巻いていくことを強くオススメするよ」

ハワイアンの軽口は男にとってかなり耳に障るものであったらしく、もう一撃、銃弾が飛ぶ。

それを読んでいたように縦に構えられたカメラが銃弾を弾いた。

「馬鹿な！」

レフ板同様、弾は貫通しない。それどころか、酷く変形し、地面に落ちる。

「このカメラ、特注なんだぜ。凄いだろう？」

目の前に立ちはだかる二人は呼吸が少々乱れているものの、余裕が感じられる。

未だ三人とも致命的な傷は負っていない。

「手前は馬鹿か。その中継車にちゃんと書いてあるだろう？ 極討放送つて」

続けて細身の男。

膠着状態に持ち込まれる事だけは避けたいと呟きながら、男は腕時計を見下ろした。

あと三分五十秒

中継車が派手に突っ込んで来たお陰で、野次馬が集まるのが容易に想像できる。

時間稼ぎが必要だ。手垢の付いた手口ではあるが、駆動時間が終わるまでは何とかなるだろうと、予想した。

しかし、残りの銃弾は僅かなもので、あの二人の実力を考えると、覚悟して取り掛かる必要がある。

「報道関係者がなんの用だ」

運に身をゆだねることにした。

報道関係者というのはカモフラージュに思える。

ホローポイント弾をもともしない、人間離れた度胸や身のこなしは決してそこらへんのカメラマンや照明担当が持つものじゃない。

「いや、とある爺さんの番組へのリクエストでね。しかも、最初に発砲して来たのはあんたの方なのに凄いい草だな。ホーネットのデイルーラーさんよ」

「知っているなら話は早い。これは我が社の問題だ。手を出すな」

「裏切り者はもう死んだだろう？ 少女は関係ないはずだ」

ハワイアンが大げさに肩をすくめる。

「それは……」

奴らはもう知っているのだ。男は秘密を守らなかったヘルメスを何度も刺し通したい気分だった。

あのジジイ。くたばった後もしつこく……。

「目撃者だ。生かして置く事は出来ない」

「ほう。やってみる。でも、目撃者はもうかよわい女の子一人じゃないようだぜ？」

一步、手前に出てきたレフ板の男が挑発じみた言葉で返す。

「もう回りくどいっただらありゃしないな。ファイアーシャッターの回収のついでに殺したただけだろう？ 爺さんは」

「チツ……」

ファイアーシャッターのことも既に悟られていた。

全てを分かりきったような笑みは根拠のない物ではなかったのだ。

あと二分半

まだ時間が必要だ。

悩んでいたところ、幸いなことに、ハワイアンが男に興味を持たようた。

「そうだ。折角だからお前の名を聞いて置こう。最低限の個人情報
は守ってやるから。ああ、ちなみに、まだ名前はないとかふざけた
回答の仕方をしたら、敬愛する夏目先生の墓前で猫耳をつけたまま
頭から地面に突っ込んでやる。あれ？ 待てよ。それだと猫耳の意
味がないか」

目の前の男がどこまで本気でどこまで痛い奴なのか、想像すらつ
かない。

それに、いつの間にかカメラまで回してやがる。

先ほどの無茶な使い方にもかかわらず、カメラには傷一つ見えな
い。

「カメラを止めろ」

取捨選択は迅速だった。拳銃を取り出し、アロハシャツのど真ん
中に狙いを定める。

「無駄だ。素直に名乗れ。小学生の照れ隠しにしては、銃はやりす
ぎだ」

いつの間にか、ベストの男から小型のピストルで頭を狙われてい
た。

見事なまでに、^{チェック}王手だ。

「長谷園、お前の気遣いには本当に感心されるよ。五十メートル先
のマグロ漁船も当てられない奴が。まあ、よくも俺のために」

「黙れ。これは非常用だ。それに、あの時俺はマグロ漁船を狙った
訳じゃない！ あれは威嚇だ！」

それに、この距離なら外す事はまずない、と長谷園は付け加える。
「さあ。お名前をどうぞ。ミスター」

どこまでも癪に触る奴だと、ハワイアンに向け呟く。

「ホーネット&バレル社、執行役員営業統括部門・海外営業部門担
当補佐海外営業第二部長兼営業管理部長」

どうせ名乗っても問題はない。彼には二人が名前だけで何かが出るとは到底思えなかった。

彼にとつては、ホーネット&バレルにとつては、これもただの気まぐれに過ぎない。

最後に息をたっぷりと吸い込み、一度間置いて。

「死軍鶏ししやせ。以上だ」

死軍鶏の顎が二人を指す。

残り一分弱

「極討放送専属カメラマン、仙石敬文せんしゅくたかみ。覚えておけ」

「同じく極討放送の照明担当、長谷園和哉はせそのかずやだ。ナガタニエンと読んだら殺す」

「覚えた。後できつちりケリをつけるとしよう」

できるかな、とやはり仙石の茶化しが入るも、死軍鶏の表情は硬いままだ。

「じゃあ、死軍鶏部長。早速で悪いが、色々教えて頂こうか。まずはホーネットの狙いから。まあ、半分くらい分かっているけど」

仙石が勝ち誇ったように、にいと白い歯を剥ける。色素の濃い顔なので、やけに映える。

それと同時に死軍鶏の右腕が音もなくだらりとぶら下がった。

「人工筋肉もちょうどバッテリー切れか。これで反抗の手段はなくなった訳だ。ついでに銃も落としたらどうだ？」

長谷園が後ろ手に近づく。

死軍鶏は拳銃を落とすほかなかった。

「手を挙げる」

「……」

死軍鶏は左手で右手をつまんで持ち上げる。

「分かった……左手だけでいい」

俺たちが悪党みたいで凄くシニールな画だな、とアロハシャツのボタンを閉めながら仙石。

「私が機密事項を口にするだけでも？ この会話は全て傍受されてい

る。それに、私の部下がもうじきここに駆けつけるだろう。貴様らはもうここから逃れる事はできやしない」

「知ったことか。その前に自分の立場をわきまえる。いま捕まっているのはお前だ」

五秒前

修羅の獰猛な嗤いが再び死軍鶏に降りてきた。

「さあ、それはどうかな?!」

停止したと思われた右腕が意表をついて動き出した。

長谷園の拳銃を弾き飛ばしたと思うと、死軍鶏は中継車が開けた穴に向けて撃ちだされたようなスピードで駆ける。

やがて電子音が短く二回鳴り、それに気づいた二人が地面に伏せる。

死軍鶏が数えていた数字は右腕の残りの駆動時間なんかではなかった。

「伏せろ、和哉！ 爆弾だ！」

次の瞬間、異様なまでの崩壊が仙石と長谷園、そして中継車を襲った。

「ひいひい！」

轟く爆音に、烏熟が情けない悲鳴を上げた。

激しい振動と時を一緒にして、中継車の天井が瞬く間にポコポコと歪み、潰されていく。

床にうずくまるベルと少女に覆いかぶさる様に、壁を掴んで必死にバランスを取ったまではよかったが、そのまま反対側の壁に背中を激しく打ち付けられてしまった。

しばらくして、揺れが収まり、車内に静けさが帰ってきた。

「もう大丈夫みたいだ……って」

未だ少女を抱きかかえたまま小さい声で聞きなれない抑揚の言葉をよごによごによと口ずさむベルがそこにいた。

いつの間にか泣き止んでいた少女は、それをはたも迷惑そうな目

つきでにらみ、僕を見上げた。

冷めた面だな、おい。

少なくとも強がりとか、悲しさを押し殺した、などという感じには見受けられない。

そう。ニユートラルというか、シニカルだ。

割り切れないものを割り切ってしまった人の表情だ。

人間はよく理性を、感情を抑えつけるための枷にたとえるが、その逆もきつとありえる。

絶対零度の彫刻の様なその眉間は、消失感から始まった感情の本流が去った後、少女の全てが理性へ帰結してしまったことを物語っていた。

これ以上崩れないように、自分を自分のままに保つために、自らの心の半身を寸前の悪夢とともに削ぎ落とさんとしているのだ。

彼女の内側に何が起こっているのかは、完全に理解できない。

ただ。僕は彼女の二つの冷たい淵から目を逸らしたいと、そう感じた。

忘却が、なぜ僕たちには忘却が、誕生日のクリスマスのプレゼントとして届かないのだろう。

仕方がない、それは事実だという言葉を白にして、その記憶の毒が消え去るまで細かく挽いて粉々にして、流せるならどんなにいい事か。

もう開く事はないだろうと思っていた少女の唇が不意に動いた。

「この人 失礼 ベルさん、というんだっけ。よかつたら私から引き離してくれる？ すぐく息が苦しいの」

何かに憑かれたように空に十字を切るベルの姿は、ジュペリ先生に少し似ていた。

……慰める方がパニックになってどうする。

そういえば昔、喧嘩したあと泣いていた僕からもらい泣きして、僕が泣き止んだあともずっと泣いていたな。ジュペリ先生は。

脇の下から手を入れてベルを少女から引き剥がした。

「あれれ？ 地震は？」

後ろ首をつかまれて宙ぶらりんになった小動物の様に、キヨロキヨロ左右を見回す仕草がやはりジユペリ先生似だ。

底無しの人好しや天然さ加減なんかも。

そつと彼女を下におろして、深呼吸。

「飴沢颯一だ。好きなように呼んでくれ」

「誰もあなたの名前を聞いてはいないわ」

体感温度が強制的に二度程下向調整させるその声に体温はまるで感じ取れない。

「羽生佐鶴よ。佐鶴でいいわ」

短い言葉を交わしたところで、耳障りな音に気がついた。

運転席から烏熟がこちら側に転げ落ちていた。

不自然な方向に曲がった足首を掴んで唸っている。

「折れた……」

目尻が潤っていた。

放って置きたいのは山々だが、体の半分が優しさで出来た僕は生ける冷却装置と向き合う必要性をさほど感じなかった所為で余った時間を活用して、中学校の国語の教科書に載っていた「国境なきなるとか」の真似事をして見ることにした。

確か、国境なき石田、だった気がする。

懸命にアイスブレイキングを仕掛けるベルと、それを聞き流す佐鶴をうしろに、応急処置に急ぐ。

しかし、運転席のカーテンを千切ろうとしたところ、とんでもない視覚情報に視野が暗転しそうになった。

「埋もれた?!」

ひびが入ったフロントガラスいっぱい、それこそどこぞの連鎖系落ちゲーの画面の様に、鉄筋やコンクリートの破片がくまなく積み上げられている。

うん。埋没されたことに嫌でも気づかされる。非常に分かりやすいディスプレイの仕方だ。

そういえば、さつき外でドンチャンしていた二人はどうなっているのだろうか。

「まさか瓦礫と一緒に……」

「ねえ……君、そこから足をどけてくれないかな」

いかん。死にそんな顔だな。

いつの間にか骨折箇所を思い切り踏みつけていた。

決して悪意があったのではない。加虐嗜好の素質なんか一ミリグラムも持ち合わせていない。

「ごめん。手当てをしようとしたのが、つい……」

「いや、そいつは助かる……」

僕と同じくらいの年齢か、それより若干下に見える。

童顔って奴か。もしくは、そばかすの所為で幼く見えるって事もありえるな。

ブカブカのTシャツにこれまたゆとりのある作業ズボン。極めつけはチョッキ。

これといった統一性のないファッションだ。

「傘、借りるよ」

助手席のシートに置いてあった小さな折り畳み傘を添え木代わりにし、力任せに破ったカーテンを巻きつけた。

ボーイスカウトで習った応急処置が役に立つのは、おそらくこれが初めてだろう。

「これでよし、と……」

「ちなみに、さつきの二人なら大丈夫だよ」

「えっ?!」

烏熟が指差す先には取り外し可能になっている床板があった。

当然ながら、車底に通じている奴だ。

昔の映画のクライマックスで、あの人一人通れるかどうか分からない面積を利用し、主人公たちが暴走したバスから脱出するシーンはかなりのインパクトを持つものであった。

その床板が数度動き、押し上げられた。

「コホ……派手にやってくれたな。爆弾とは」

全身灰色に模様替えしたハワイアンの姿がそこにあった。

一張羅が台無しだぜといわんばかりにへの字に曲がった口がなんともおかしい。

「まったくだ。キャップが爆風でどっかに飛んじまったじゃねえか。仙石、お前の所為だ」

続けてさっきの眉目秀麗な彼、キャップがないのに硬派なイメージがこれといってなくならないのは、やはり内面の問題か。

さすがにあの常識外なレフ板は引っかかってしまいうらしく、何度かぐいぐい引っ張っては、持ち上げることが諦めたようだ。

うつすら青がかかった髪が汗と埃にまみれて顔にへばりついている。何に愛されているのかは分からないが、それはそれで様になっているのが結構悔しい。

まあ、そうかつかさすなどと、ハワイアンがなだめて、二人とも全身の埃を振り払う。

あっちこっちでくしゃみの音が発せられることには構わずに。

「さあ、急いでここから出るぞ。ぐずぐずしていると奴らに殺されちまう。早く運転席に戻れ。烏熟……って、お前、なんで足にそんなもん巻きつけてんだ？ え？ 何？ 骨折?!」

五杯目

「申し訳ございません」

電話越しの剣幕に死軍鶏は思わず肩をすくませた。

サラリーマン体質になってしまったようだ、自嘲混じりのため息。

崩壊した羽生邸の裏に広がる藪に身を隠し、状況を伺う。

想定外の変数であった。爆弾を仕掛けていなかったら、死軍鶏は確実にやられていただろう。

まだ試用段階の兵器であるとはいえ、あの二人はハーキュリアン・サーヴァント金剛従子を圧倒する実力を持っていた。

しかし、崩落した建物の中で奴らが生き残る可能性は僅か。

死軍鶏は例え様のない安堵を覚えた。

近くの住民達が呼んだレスキュー隊がすぐそこまで来ている。

少女や極討放送とやらも、病院に運ばれてしまえば寝首を掻くのはたやすい。

死軍鶏はもはや原型を留めていない洋館を見つめ、いかにターゲットを回収すべきか思考にふけた。

それに、見つけたのはターゲットだけではない。

死軍鶏は期待で目を見開き、笑い声を漏らした。

そのときだった、背後からの気配に気づいたのは。

「あれれー、失敗しちゃったの？」

藪と大して変わらない背丈の白人の男の子が二人、手を握ってそこに立っていた。

ただ、どちらが今の言葉を発したのか、死軍鶏には分からない。

同じ格好で、同じ顔。一卵性双子だ。

真ん中に鏡でも挟んでいるような左右対称だ。

年は数えて七つとところだろう。白いシャツの首元で映える蝶ネクタイの上に見える癖のない茶色い髪が見事な七三に分けられて、

どこか高貴さを感じさせる。

縦縞のシャツの上を通るサスペンダーにつけられた奇妙な形の飾りの位置の他に、どちらがどちらなのか識別する手がかりは存在しない。

「なんだ、お前たちも来ていたのか」

無邪気さだけが凝縮されたような四つの眼光に、死軍鶏は殺意をもって対抗する。

「そうだよ。パパに鶏の世話頼まれちゃったからね」……

右に分け目を持つ方の少年が悪戯っぽく顔をくしゃりとさせる。

「だめだよ、ランシー。意地悪しちゃ。チキンだから怯えちゃうよ」もう一方がたしなめるが、やはり笑っている。

くどい言い回しをしゃがるなど、死軍鶏は呟いた。

つまり監視役つてところだろう。

おそらく本社の人間は例の物を死軍鶏が横取りすることを心配しているに違いない。

死軍鶏の目の前に個性のない理事会の面々が通り過ぎた。

しかし、なぜこの二人をよこしたのかがいまいち理解できない。

ただの監視役にしちややりすぎだ。よりによってこの二人が来るとは、いくらなんでも予想の他なのである。

「まかりなりにも兵役不適格者なんだ、俺の監視なんかしに来てもいいのか？ それとも、あの化物に見限られたか」

「ッ！」

とつさに後ろに跳躍した。

手袋の先が少し焦げていた。いや、溶けている。

それだけではない。双子を囲む半円内の全てが消し炭になっている。

義手の方じゃなかったら完全に体全体持っていかれたらとうと、死軍鶏はかすかに冷や汗を流した。

「今パパを化物と呼んだな！」

「この場で燃やしてもいいよね？ リバル」
「まったく、おっかねえ餓鬼だぜ。金剛従子の予備はもう少ないの
よお」
ハーキュリアン・サーヴァント

この双子がただの子供ではないことなど、死軍鶏もよく分かっている。

狼煙の童……

すでに世界中の兵器商人の注目の的と化している彼らが持つ二つ名だ

誰かの意図か、それとも偶然なのか。

この数年の間、彼らが現われた国家は必ずと言っていいほど戦争に巻き込まれている。

アメリカが関わっている、というのが世間一般の認識だが、実際にその数々の戦争を裏で操っているのがホーネット&バレル社で、裏工作を任されているのが各地に散らばったディーラーと兵役不適格者だと言つ事はあまり知られていない。

「落ち着こう、ランシー。パパの命令は死軍鶏の監視だよ。こんな奴いつでも殺せるから、任務が終わったらすぐなぶりころせばいい。きつとパパもそれを許してくれる。うん、絶対そうだ」

「そうだね、リバル。じゃあ、僕は任務が終わるまでいい子にして待つよ。後でゆっくりなぶりころそうね」

「ランシーえらい！ お預けが出来るようになったんだね」
「もつとほめてえ！」

本人の目の前で平気で鬨るとか殺すとか、幼児らしい世間体をなかがしろにした言葉遣いがいささか気に入らないと思つた死軍鶏は拳銃を取り出したい衝動を必死で抑えこんだ。

いまここで拳銃を放つても死ぬのは間違いなく自分自身だということが分かっているからだ。

「お前なんか後で灰にして畑のこやしにするもんねー！！ ベーだ！」

幼稚園児の語彙力水準は年々上昇していると聞かすが、ここまでとは。

啞然とする死軍鶏だったが、その目は洋館の周りに佇む住宅街を捉えた。

大型の中継車が衝突したのだ。野次馬が群がらないほうが可笑しい。

週末のため大半の家族が出かけているのだろう。幸いにも野次馬の数は少ないほうだった。

「そんなことより、証拠隠滅が必要になりそうだ」

このままではレスキュー隊やら警察やらが家を掘り返して銃殺された老人の死体を見つけてしまうに違いない。

そうなたら一大事だ。

詮索好きのマスコミが羽生家のことを色々と調べまわし、事の核心に迫る可能性だって考えられる。

人々の記憶から消えた新素材に、再び世界が目を留めることになるだろう。

「しよーこいんめつつてなーに？」

「誰にもばれないようにすることだよ、ランシー」

双子はにやりと顔を見合わせると、死軍鶏に向きなおす。

「ふーん、そうなんだ。で？」

死軍鶏は呆れたという顔でため息をつく。

第一関節から先がなくなつた義手の人差し指を撫でては離すことを繰り返すことにより苛立ちが露になつていた。

「手伝え」

「やなこつた。チツキーがジャパニーズ・ドゲザしてくれるなら考えてあげてもいいけど」

ランシーが七歳のそれとは思えない狡猾な眼光を募らせる。

うつすら蒼い瞳の奥に余りにも純粋な悪意が覗いている。

死軍鶏が痺れを切らして拳銃を取り出すも、口角は変わらず悪戯な角度に釣り上がったままだ。

「セクシヨン・エイトに接する時の態度って知らない？ クビ（リストラ）になつちゃよ？ 両方の意味で」

「こまった餓鬼への接し方はこれしか知らないのな」

「自分のミスは自分で責任を取りなさいと、いつもパパが言ったよ」

「俺のミスじゃない。思わぬ邪魔が入っただけだ」

双方一步も動かない。銃を向けられているリバルもランシーも身構えてなどいないが、死軍鶏は今にも殺しにかかりそうな気配を見せている。

緩衝状態が少しばかり続くと、死軍鶏は銃を下ろして静かに説得を試みた。

「ファイアーシャッターがまだ存在していることが何処かの国の情報機関にばれたら、ボスはさぞかし困ってしまうだろうからな」

「パパが？」

双子の顔が僅かに曇った。

「なんでこうなるんだ……」

大型の免許なんて持ってないし、ましてや運転したこともない。

運転席からの見え方、四角、距離感覚、内輪差のどれも、今まで運転してきた中型のトラックとは大きく違う。

「返すぜ、これ」

と、先ほど投げつけた免許書を、嫌な笑みを浮かべたまま手渡された。

長谷園とかいう名前のそいつは何を思いついたのか、僕を運転席に追いやり、ハンドルを握らせた。

「あの、僕の免許をよくみてくれ。ほら、中型免……わかったから落ちついてその物騒な物を降ろせ！」

「鳥熟が骨折しちまった以上、運転できるのは君しかいないんだ」

申し訳なさそうな事を言っているわりに表情が追いついていないぞ、ハワイアン。

「急に運転しろなんて言われても……」

「問題ない。カーナビは最新型だ」

そこじゃねえよ。

「ごめん。僕が足首さえ折っていなければ運転できるのに。でも、大型の運転って結構面倒なんだよねー。無免許の僕としてはいつも心身が削られる思いでさあ。つうか運転はどっちかというと嫌いだし、そもそも……」

お前楽しそうだな！　なあ。一気に表情明るくなってるとよな！　てか運転に対する自分の考えを延々と語るのは止める！　そばかすを一個ずつ潰してやるうか？！　って、それ本人にとってかなり嬉しい事だな。

「そうよ。颯一。この中継車なら首都高の夜を彩る事だつて夢じゃないわ」

トラツク野郎ですか、僕は。それにいつから呼び捨てにしていると言った？！

ベルは子供染みた浮かれ様だ。両手で握り拳を作ってガッツポーズのように構えるのは応援の旨なのか？

「免許がないからつてブツブツブツ。あんたちっちゃい男なのね。さつきは私にあんなことやこんなことをした癖に」

さて、いつの間に立ち直っているんだ、お前は。さらつとアブナイ事言いのけてやがる。

そもそもあんなことやこんなことつてなんなんだ。否定したくても思い当たる節があるから出来ないじゃないか。その前に、起きていたのか、さつき。

しかもちよつと頬をあからめるんじゃねえ！

正気か？　この女。それとも俺を嵌める気か？

残り四人の視線が限りなく痛い。

「……」

ああ。わかったよ。やればいいんだろつ？

こつなつてしまったらもう自棄だ。とことんやつてやる。

「こいつの馬力なら、このくらいの瓦礫は難なく押しつけられる。全速で行け」

そんな事はもはや何の慰めにもならない。
アクセルに乗った右足に体重をかけた。

凄まじい音と共に家屋の残骸から中継車が飛び出した。

なんて言ったらまるで傍観者みたいだけど、運転しているのは間違いない僕だ。

フロントガラス越しに赤く染まった曇空と並木、それに加えて行く手を阻む足軽宅急便トラックと乗用車二台が見える。

バックミラーにさっきの片腕化物が映っては、だんだん小さくなっていく。

ついに逃げ延びたぞ。僕は……って、いまなんか車の後ろで爆発したな。勘違いかな？

「ふう。すつきりした。最低限の武装しか持ち合わせていない所為でこれが精一杯だが」

「バズーカのどこが最低限だ!!!」

「違うな。こいつは八十四mm無反動砲、通称カールグスタフだ」

「そんな事知りたくない上に永久に知りたくねえ!」

「パンツァーシュレックもあるが、あれはロケットの燃えカス対策にガスマスクと手袋が必要になるからな」

もう一度言うが、僕はとんでもない連中に巻き込まれたみたいだ。
「危ない!」

後ろに気を取られていた隙に、BMWが目の前に迫っていた。

だめだ。よけきれない。道路が狭すぎる!

「掴まれ!」

並木の下、二台のBMWの上を中継車が走り抜けた。

下からまんざらでもない音が聞こえる。

やはりおかしい。この状況でカタルシスを感じるようになるとは……
やみつきになりそうだ。

さっき止めておいた宅急便トラックのすれすれに、大通りを目指した。

もう、しばらくは戻れないのだろうな。

宅急便の仕事には。

ティーポットと、紅茶が欲しい。

「私、外の景色が見えないと車酔いする体質だから」

突然、佐鶴が助手席へ乗り込んだ。

身内を殺されたとは考えられない落ち着き振りだ。

「なんだかそれを見てみると、胸の奥が締め付けられるように痛い。平静を装っているのか、ただ、悲しみを押し殺しているのかは、見分けがつかない。」

だが、そんな僕にも、こんなときに「大丈夫」と聞くのはあまりにも残酷だということ位はわかる。

このままでは埒が明かれないと思ったので、話を始めることにした。

「なあ」

「何？」

「あんなことやこんなことって、一体なんの話だ？俺はそんな事をした憶えはまったくくないが」

しばらく沈黙した。どうせただの失言だったのだろう。気絶していた訳だし。

しかし、奴は僕の想像の斜め上を行っていた。

「あ、あんた……それでも男？ さっき私に、えっと、その……お、おひめさ」

「ああ、なんて素晴らしい空模様だ！ アッサム茶にミルクを入れてもこんな色にはならないだろうな。あはははは！」

それ以上言うな。僕はなんて事を聞いたのだろう。

起きていやがった。さっきうつすらとこいつの目が開いているのを見たのは錯覚じゃなかった。

畜生。自分の事が嫌いになりそうだ。

「でも、繊細さが全く感じられなかったわ。扱い方がまるでなっていないというか……」

この春最大級のお世話だ！ 繊細さが感じられないのはそれがお

姫様抱っこじゃなくてダンボールの持ち方だったからだ！

奴の一言で残り僅か三分の一の純情な感情も土に帰ってしまった。
「何が、人の運び方は教わっていない、よ。全く、格好つけてんじやないわよ！」

どうしよう。このまま運転席の扉を開いて外に飛び立とうかな。

「おやおや、盛り上がっているね」

その目線と発言を今すぐ取り消せ！ 眼鏡のレンズを曇りガラスにすりかえてやろうか？！

後ろからの八本の視線が突き刺さるのがよくわかる。

一人の力でこの雰囲気を打破する事は至難だ。

そうだ。ここはひとまず音楽の力を借りるとしよう。

誰かに許可されたわけでもないが、運転席に備え付けられたCDプレイヤーの電源を入れた。

ん？ このイントロの特徴的なハーブの音色はまさか……

あなたは誰と〜契りい〜ますかあ〜

「……」

五木ひろしの「契り」だ。しかもフルオーケストラバージョン。

誰のチョイスだ。これは。CDを取り出して全力で粉碎したくなつた。

もう駄目だ。車内の空気に耐えられない。

「緑はあ〜今もあ〜みずみずう〜しいかあ〜」

冷めきつた佐鶴とその他の面々から目を逸らし、僕は一人歌い始めていた。

すさまじいプレッシャーに精神が屈服してしまったのだ。

「人は〜いつでも〜桜のよおうに〜微笑むだろうかあ〜」

そんな訳ない。そんな暖かな世界じゃないんだ。ここは。

ただただ、あるがままを否定し、服従することを求めるのが、今の世界だ。

僕も、隣に座る佐鶴も。願ってなどいない状況を無理に受け入れざるを得ないのだ。

孤児院も、この仕事も、今日の出来事も。

願ってなどいない。

春が来たら桜が咲くように、冬が来たら花は散る。

花も冬もそれを望んでなんかいないのに。

「あ、それは二番の歌詞。一番は、人の心は鷗のように真白だろうか、よ」

真つ青だよ、僕は。

後ろから約三人分の失笑が聞こえる。

ベル。お願いだからもう僕に構わないでくれ。これ以上は惨めになるだけだ。

退屈そうに欠伸をする佐鶴は「つまんない、最低」と吐き捨てる
とそっぽを向いた。

「ったく……べつに歌いたくて歌った訳じゃ」

閉じた彼女のまぶたがまだ少し潤っていたことに気づいた僕は、
もう一度無口に戻るしかなかった。

「次の信号を右に回ってください。コンビニが目印です」

一番のサビが流れる中、カーナビの合成音声が聞こえた。

愛する人よ。美しく。

愛する人よ。すこやかに

演歌なんて、大嫌いだ。

「いい腕してるね。明日から運転よろしく」
でも、アロハシャツはそれより嫌いだ。

六杯目

中継車がたどり着いたのは、とあるビルの駐車場。

目の前に都庁が見えるビルの3階全てが、彼らの隠れ家であった。その一室で、僕は仙石と名乗ったカメラマンの言葉を傾聴していた。

「まだわからないところは？」

「かなり。でも、自分がとんでもない目に遭っている事は理解できましたよ」

いや、この事務室の中を見たとき、改めて実感させられたと言った方が理に適うかも。

部屋の中には見たこともない火器や爆弾を始め、メンテナンス中のスナイパーライフルなど、「おっかなびつくり」がいたるところに散らばっている。

カメラや撮影用品だけならスタジオにも見えなくはないが、明らかに銃刀法違反の品物の数がそれらを凌いでいる所為で、軍事施設だとは思えない。

極討放送。

それがこの連中の名前だった。

「まあ、簡単に説明すると、イギリスのタブロイド紙がやっていることを、媒介を新聞から映像に変えていると言えるかな」

「タブロイド紙って……」

タブロイドとは、もともと小さめのサイズの新聞を指す言葉だが、このサイズで発行される大衆紙の大半が誤報に特大スクープと、検閲ぎりぎりの報道を始めたことから、イギリス国内では大衆紙の代名詞とされる。

しかし、その常識破りのスタイルから、一般紙には到底載らないような情報 所謂タブーって物 もお構いなしに活字化するところが、特徴の一つと数えられる。

身分を偽って王室に潜入して居座つたり、議会で爆弾の材料を持ち込む実験をやつたりと、政府からも目の敵にされてることもしばしば。

はたまた、政府の腐敗をあらわにしたり、証拠不十分で無罪になった殺人犯を名指して紙面に上げたり、結果的に法改正につながるような報道も多数やりのけている。

日本の週刊誌なんかと比べ物にならない程の過激さ、痛快さ、そして歴史を備えているのだ。

「ゆりかごから墓場まで」を謳うイギリスの福祉制度の樹立にも深く関わったことなど、イギリスという国を大きく変える歴史的事件を引き起こしたこともある。

まあ、偽写真や誤報などの数もかなりのものだが。

さらに、裏世界に精通する覆面記者など危ない連中を抱えて、潜入、おとり、告発路線を走ることさえ躊躇しないってところは、一般的なイギリス人のイメージとは全く異なるものであるから驚きだ。あらゆる枷を振りほどき、己の道を突き進むタブロイドは労働者階級を虜にし、その売り上げは一般紙を遙かに凌いでいる。

まあ、全部ジュペリ先生に吹き込まれたイギリス蒞蓄の一つだが。「礼儀も恩義も仁義もないタブロイド魂で世界を駆け回るのが俺たちの仕事だ」

タブロイドなんかよりずっと命知らずだ。

隠れて動く巨悪を暴こうなんて。

世界中で隠蔽された秘密スクープを余すところなく、その手で直に掘り出して公開する。

そんなむちゃくちゃな稼業を続けているのだと。

「ゲリラ化したマスコミ」という常套句を言葉一つ一つの意味どおり再現したらこうなるのだろうか。

「どうしてそんな馬鹿げたことを……」

「さあな。内緒だね」

口封じを試みる勢力やスクープを力づくで隠し通そうとする政治家

等を相手にするために、実力を行使する。

国家権力も何も、全て蹴散らして真実をカメラに収めることこそが自分の大義だと、仙石は誇らしげに断言した。

つまり、最低の阿呆だ。こいつらは。

くだらねえマスコミのヒロイズムを三倍くらい拡大解釈していやる。

「世界を相手によくも生き残れましたね」

「ただ、僕は素直に感心せざるを得なかった。」

「パワーバランスを崩さない程度に立ち回っていりやなんとかなるさ。それに、スクープを買ってくれるのは国だからな。アメリカとかを敵に回さない限りは安全だ」

降りかかる火の粉ははらわないといけないけどな、と、仙石は白い歯を見せて微笑む。

「しかし、いいんですか？ 僕にこんな重大な事を話しても」

「かまわん。もうお前がどっかの厄介な連中とつるんでいないことは判明したわけだし、別に重要な事は教えた覚えはないね」

そいつはどうも。

「それに、自分が今どんな状況に処しているのかが判らないままじゃ、すつきりしないだろう？」

それはそうだ。せめて自分のスタンスを知るだけで幾分か救われる気がする。

でも、それだけじゃ足りないのだ。僕にはそれ以上に知りたいことがある。

「僕は、僕は普通の生活に戻れるんですか？」

いつの間にか前のめりになって、彼と僕の間を激しく揺さぶっていた。

顔に冷や汗が流れる。

「そうだな」

少しだけ、彼の視線が下を向いた。

「その、普通の生活、がどんなものだったかによるな」

考えるまでもない馬鹿馬鹿しい答えだったが、それはなぜだか重たい響きを持っていた。

「俺にとつての普通は、さっきまでお前が見ていたものなんだけど、あまり好きになれないようだな？」

「……………」

「戻れないだろう。おそらく」

祈るように、両手の指を組んだ。

戻ってこない。喪失した。欠落して永遠に帰って来ない。いや、僕はもうそこへ帰れない。

あたりまえだ。世界最大手の軍需会社の裏の顔を知ってしまったのだ。

新たなテクノロジの所有権を得るために一人の老人を殺め、少女をまさに危めようとした刹那を目撃してしまったのだ。

僕の口を封じるためには手段を選ばないだろう。

「ホーネット&バレルは世界中のテクノロジを、強盗まがいの武力行使や豊かな資金で使用权を得、それを軍事技術へ昇華させる」中継車の中で響いていた仙石の声が頭をよぎる。

「その軍事技術を以って造られた兵器のテスト、及び各国との取り引きや工作活動などの後ろ暗い仕事まで全てこなす敏腕の者が、デューラーと呼ばれる。さっきの奴も、おそらくそのデューラーの一人だろう」

今まで敵を作らないように、人に恨まれないように憎まれないように。

薄氷の上を歩むが如く最大限の注意を払って生きてきた二十年が虚しく思える。

「わかるか？ ああいうのが他にも大勢いるってことだよ」

結局、一度巨大な陰謀の片鱗を目撃しただけで、あまりにも巨大な世界の歯車に触れた所為で、僕の歯車は押し潰され、二度と動かなくなってしまうのだ。

敵はいま、窓の外から僕の頭に照準を合わせているかも知れない。

ミサイルを搭載した武装ヘリがこっちを覗く様がありありと目の前に浮かぶ。

「軍事衛星とか、持っているんじゃないですか？　そんで今も監視しているとか」

「映画の世界じゃあるまいし、それはありえない。東京はシャッターコントロールで守られているからな」

「シャッターコントロール？」

聞いた覚えがない。

「米国によって衛星写真の輸出が統制されている。いくらホーネット&バレルでもそれを潜り抜ける事は出来ないだろう」

僕から見えない遠くから監視されている可能性はないという仙石の返事は、気休め程度だが幾分か安心できた。

「だからといって、いつまでもみつからない訳じゃないけどな。お前がそのまま逃げ切れる確立は……」

「茶柱が立って二足歩行する確立くらいな」

「緑茶はあまり飲まないの、茶柱の動きはわかりません」

仙石の椅子が大きく後ろに傾いた。

頭を背中の方に投げ出し、特大の嘲笑を始めていた。

「これは愉快！」

とことん頭にくる中年だ。蒸らし過ぎて渋みやエグ味がたっぷり抽出されたキームン茶にラベンダーを過度に入れて煮込んだ、苦い苦い紅茶をストレートで飲ませてやりたい。

もちろん鼻から。

「何が可笑しい！」

「いやあ。ヒイヒイ。あ、ごめん。気道に唾が……ケエツケエツ」

どこでツボったのか全くわからない。常人の感性とは一味違うと見た。

しばらく咳き込んで、奴が最後にのたまった言葉はこうだった。

「心配するな。茶柱の二足歩行はかなりの高確率で行われる。俺の実家の茶柱は三回淹れる内、一回は必ず中断跳び回し蹴りを成功さ

せる。二足歩行なんて造作もない」

「何を言っているのかさっぱり理解できません」

この鬱陶しいおっさんの出身地は、どうやらディズニーと魔界のどつちか、らしい。

「世界中のディズニー愛好家様、本当に申し訳ございません」

「ん？ お前こそ何訳の分からんことを……」

もうこの場にいる事を体が拒んでいる。一刻も早くこの男のいない場所へ去ってしまいたい。

「それで、どうするんだ？ さっきの話は」

ああ。すっかり忘れていた。

……いや、やっぱり憶えなくなっただけだ。

どこに逃げても無駄だ。ホーネット&バレルに日本の警察が敵うはずがねえ。何せ、日本の政治家とも癒着しているからな。俺たちと一緒にいるなら当面の安全は保障してやる。ちったあばかり働いてもらうけどな。

ちったあばかり、ねえ。

仙石によると、もう東京中に捜索網が張り巡らされているという。そこまでして少女を探すとは、佐鶴にはいったい何が隠されているんだ。

「僕に、弾除けや爆弾を体に巻き付けた自爆テロ特攻隊になれと言うんですか？」

奴は一瞬、驚きを表したが、すぐに基本形のそこ抜けて図々しい顔に戻した。

「どうしてそれがわかった」

「あのな……」

たちの悪い冗談だ。紅茶が韓国起源だというブラックジョークより酷い。

紅茶と言えば、全部家の中に置きっぱなしになっている。

僕が行方不明になったことを、会社が警察に届け出ているだろう。携帯電話を家に置いてきたのは間違いだったようだ。

「冷静になれ。あせらずに選ぶんだ。最良の選択肢を」

事の流れが速すぎて思考機能が丸ごと飲み込まれそうになっているところを除くと、僕は至って冷静だ。

だが、今の僕には決められない。何一つ状況を整理できていないのだ。

落ち着く場所で一人になってじっくり考えたい。

「もう少しだけ……考えさせてください」

そう。誰もいないところで、紅茶でも飲みながら。

今僕に必要なものは時間と茶葉とお湯と睡眠と孤独。たったそれだけだ。

「……いいだろう」

複雑だ。

「明日の朝まで決めてもらう」

椅子を引く音が妙に長い余韻を残し、仙石が押し黙った僕を見下ろした。

「この部屋はもとも尋問部屋だったから、ベッドも何もないけどゆっくりしてくれ。何かあったら隣の部屋に行け。ベルがいるから」

「……………」

居心地が悪くて当然、という意味で受け取っていいのだな。

「もう知っているかもしれないが」

そう。僕はそれをもうわかっているかも知れない。

「何かをあきらめないと次に進めない事もある」

彼は僕の肩を数回軽く叩くと、廊下に消えていった。

「明日の朝までには帰ってきます、か……」

仙石の目が机の上に置かれた紙切れに留まった。

時刻は明け方の2時。

寝付けず目が醒めた仙石が半分ほどボタンが開いているストライプのパジャマをなびかせ、颯一がいる元尋問部屋の扉を開いたとこ

るだった。

「はあ、やっぱりやりやがったな。ここまでバカだとは……正直驚きだ」

部屋にいるはずの颯一の姿がどこにも見えない。

殴り書きにされた二行の意味から考えられることは限られている。「思春期の中学生じゃあるまいし、多感な時期はもう過ぎた年頃だと思っていたが」

窓のないこの部屋から外に出ることは考えられないうえ、エレベーター側の扉は仙石が直接鍵をかけているため、脱出は不可能だ。

「颯一ならもう出て行ったわ」

振り向いた仙石の前に佐鶴がいた。

「まだ寝てねえのか……ああ。そうか。お前が逃がしてやったのか」少女に割り当てられた部屋には大きい窓に、カーテンやベッドだつてついている。

ベッドのシートとカーテンを繋ぎ合わせれば難なく下へ降りられるはずだ。

剣呑な表情が、ほぼ空っぽの部屋に響く声と同じくらい強張っている。

少女の両手の爪がほんのり赤くなっていることが、仙石にとってはどうしようもなく切なく感じられた。

自らの体を引っ掻き回していたのだ。

視線から滲み出た虚脱の極みが仙石自身を責めているように感じとれる。

「あなたに教えてほしいことがあるの」

「異性交際の話や地球温暖化と家出の話以外ならなんでもござれ」「ふざけないで」

本当に面倒なやつだ、と仙石が毒づく。

搾り出したような声と小さく震える肩が、残り少ない気力を消耗させ続けていることを示しているのに、少女は強気であった。

「爺さんはそれが人にものを頼むときの態度だと教えていたのか？

教育の不在を感じるぜ。まったく」

少女の焦点が疑いに曇った。

白い肌もあいまって、仙石の目には、少女が精巧に作られた蠟人形のように見えた。

「俺はまわりくどいことが大っ嫌いなんだ。お前がここにいる理由は大体わかっているつもりだ。爺さんのことだろう?」

「そうか……あなた、爺の事を知っているのね」

「ああ、知っているとも。三年前まで、よく一緒に長野に行つてスキーを楽しんだ後、急性アルコール中毒で病院に運ばれてたよ」

でたらめは仙石の十八番だ。

「嘘ね。爺は酒を飲めない体質だもの」

佐鶴は何一つ崩さずに、動じていない。

「ただ、教えてやるわけにはいかないのだ。」

もうこの世にはいない彼の名誉を、彼との約束を守らないといけないのだ。

なによりも、その真実は十八の女の子には残酷すぎる。

「しかし、あんなチビがよくこんな令嬢に育つたもの……」

「はい?」

「すまん。なんでもない。口が滑つただけだ」

物心つく前の佐鶴を抱えた老人の姿が仙石の脳裏をよぎった。

どもる仙石を睨んで、少女は質問を続けた。

「さっきの殺し屋はまるで爺を知っているかのように話していたわ。爺には私の知らない何かがあるのよ。そうなんでしょう?!」

「さあな。俺が知る爺さんはただの、ロマンスグレイに燕尾服の似合う最高の執事だけだ」

お嬢さまにこの事を内緒にしてはくれぬか?

仙石が彼に二度目に会つたときに言われた言葉だ。

そして、これは老人が息絶える前に発した最後の言葉でもあった。

結局、彼は軍需会社の手下としてではなく、一人の少女に誠心を尽くして使えた一人の執事としてその生を終わらせたのだ。

その最後の願いを聞き届けることが、老人に対するせめてもの礼儀であると、そして、受話器越しで震えていた彼の声を二度と忘れられないだろうと、そう確信した。

「わかった……」

思いのほか、少女は利口だった様だ。

仙石の言葉から強い拒絶を感じ取ったのか、口をつぐんだまま下を向いて下唇を噛み潰していた。

お願いだからこのまま黙って部屋に帰ってくれ。

隙間風に、紙切れがひらりと浮かび上がる。

仙石自身も、言いようもないもどかしさにまいりそうになっていた。

「でも一つだけ教えて」

「……」

「爺は……爺は本当に」

「ああ。あんな奴らと関わるような人じゃない。誓ってもいい」
誓うほど、彼のことを理解してなんていないのに。

鋭い罪意識が仙石の胸中をかき回す。

仙石の中につずめられた数々の秘密がどよめいている。

だけど、あの言葉だけは決して口に出来ないのだ。

それを告げることは赦されない。

老人の本当の姿や、少女の父親の死にまつわる真実だけは。

「……」

「わりい。俺はベルみたいに優しくねえんだ」

ベルみたいに器用じゃない。口蓋を突く言葉を必死に飲み込んで、
哀れむ気持ちを押し隠した。

少女がこれ以上悲惨にならないように。

少女が前に進めるように。

何かをあきらめないと次に進めない事もある

同じように何かを忘れないと次のことを考えられない事だってある。

「そつだ。お前、歯磨きをするときには奥歯までちゃんと磨けよ」
仙石の意味深長な言葉に、少女はドアを割れそうな勢いで閉める
ことで答えた。

「ジジイの図々しい願いごとのついでに、大出血サービスといこう
か」

少女が見えなくなったころ、仙石は静かにつぶやいた。

「もうこんな時間か。寝ないと教会に行けなくなるな」

何があっても毎週欠かさず向かう礼拝こそが、仙石にとってほぼ唯
一の憩いの時間なのだ。

そして、長い欠伸だけが、暗い部屋に残った。

七杯目

「どこに行く気？」

音を立てないようにしていたはずだが、どうやら、正面の部屋には筒抜けになっていたらしい。

ドアの真ん前に佐鶴が立っていた。

思わず声を上げそうになったが、迫った彼女の手のひらが、先に口をふさいでしまった。

「ウツ……」

「正面玄関はもうしまっていたわ。今のところ逃げ道はないわね」
こんな奴だったのか。こいつは。

中継車の中で泣き喚いていたときはまるで別人だ。

しかも、僕の脱出計画がなぜか気づかれていた

「夜中に泥棒猫みたいに部屋から抜け出す人の心理は大体同じよ」
そうか。やはりこいつも逃亡を図っているのだ。

僕の場合、一夜限りって条件付きだが。

外には僕の命を狙う軍需会社の手先がわんさかいるとか。

死地に何も考えずに身を投げる僕はバカじゃない。

ただ、いまから僕は「考え」に行くのだ。

考えなきや何も始まらない。紅茶を飲まないと何も考えられない。
「ちよつと夜の散歩に出かけるだけだけど」

しょうもない言い訳だが奴は当たり前のように返してきやがった。

「私も連れて行って」

「それは駄目だ」

「じゃあ、人を呼ぶわ」

「それはもつと駄目！！」

奴の小さく結んだ口に勝ち誇った笑みが宿った。

まるで、僕の生死与奪権を手のひらの上で転がしているとも言っているような。

「あら、反抗する気？」

いつの間にか握りこぶしを作っていた。

「違う。僕はただ、家に忘れ物を取りに行くだけだ。明日の朝まで戻る予定だからな。嘘じゃない」

少なくとも半分以上は本当だ。

「随分と饒舌ね。少し言葉数を減らすといいわ」

「ヴィジュアルはまるつきり深窓の令嬢なのに、本当は世話好きらしい。」

「冗談よ。別に止める気なんてないし。勝手に行くといいわ。ここから出られたときの話だけだ」

確かにそうだ。玄関が閉められていては、外に出る事はできない。なんとかならないものかと理性に相談して見るも、相変わらず対応が悪い。

どこかでもう少し性能がいいやつがあれば、買い換えることも出来なくはなさそうだけど。

「で、羽生家の麗しきお嬢様はなんで僕にそんな事を教えてくれるんだ？」

「大変よろしい。理由を教えてやろう」とことんむかつく奴だ。

向かい側の部屋の扉が開いた先、夜の街が見えていた。

大きな窓に、千切ったベッドのシートやカーテンを結び合わせたロープがかけられている。

ベッドの足に固定されたロープの先の結び方が少し緩いことを除くと、一人が捕まっても問題なさそうだ。

「器用だな」

素直に感心するしかなかった。

いわゆる「じゃじゃ馬」とやらなのだろう。

「よくこんな感じで家から抜け出していたのよね。夜遊びに」
「なるほど。でも、なんでここから逃げないんだ？」

少女の顔がこちらを向く速度が速すぎて、思わず目を逸らした

「はあ？ あなた馬鹿？ 私の部屋は一階で、ここは三階なのよ」
お前ん家の間取りなんか知ったこつちやない。というか

「部屋が一階ならロープは要らないだろうが」

「私の部屋の窓は位置が高いのよ。ほら、こんくらい」と、鎖骨あたりに手を添える。

「椅子を踏み台にしたら何とか窓辺に上れるけど、そこから降りるのが怖いからロープを使っていたの。でも、中々スリルがあつて楽しかったわ」

普通に飛び降りるよ。今すぐここから。

スリルって言葉の意味を取り違えてないか？ 日常的、平凡なつて意味に。

駄目だ。価値観が噛み合わなさ過ぎる。

「はあ……そんで、そんな危険を冒してまでやりたい夜遊びはいいななんだったんだ？」

ああ、いくらなんでも馬鹿にし過ぎたかな。

佐鶴が怒って騒ぎ出したら元も子もない。

「よくぞ聞いてくれたわ」

僕の負けだ。思いつきり奴の機嫌を軌道に乗せてしまった。

ギラギラと輝く誇らしい眼差しで、奴はこう言いのけた。

「驚くなかれ……夜のコンビニに週間少年ジャンプを立ち読みに行つたついでに、たけのこの里を買って帰っていたわ！」

一瞬、こつちが馬鹿にされたかと思つた。

しかし、奴は得意げな顔で反応を待っていやがる。

本気だ。本気の馬鹿だ。こいつは。

不良が悪自慢してから周りのリアクションを期待しているときの表情だ。

普遍的な世界観を一から叩き込むのは面倒くさいので、適当にあしらつてやることにした。

「あ……ああ。そいつはやべえな。警察に見つかったら一発で少年院行きだ」

「ええ?!」

氣道をやられた。激しい咳きで笑いをごまかすのはやはり困難だ。完全にびびっているな。

なんだか、楽しくなってしまったのだが。

「おいおい。冷や汗出ているけど大丈夫か? 具合でも悪いのか」

「いや、問題ないわ! これは紫外線と乾燥対策よ。ほら、冷や汗はおでこの保湿にもってこいだと、昨日の夕刊に……」

「今すぐその夕刊を持って来い。焚書してやる」

どこの一党独裁全体主義国家の党機関紙だ、それは。労働の必要性を強調しているだけじゃないか。

旧ソ連の国营農場新聞に載っていきそうな記事である。国营農場新聞というのがあるかどうか分からないけど。

まったく、そんなもん読んでるからこうなるんだ。

ちなみに汗でUVカットをしているのは多分地球広しと言えど、力バぐらいいだ。

「夜のコンビニは強盗が出没するから危ないって、爺が……それにジャンプはこの世の猥雑で下品なことしか載せてない、下流民のために作られたとしても危険で墮落した書物だって言っていたから、ついつい……」

国民的漫画雑誌にして永遠のロングセラーになんて修飾語を使っているんだ! 今すぐ集英社に謝れ!

どんな過保護の元で育ったんだ。こいつは。

「本当は興味半分だったんだわ。一回しかやってないの。お願い、信じて」

さっきよくやってたって言ってたじゃねえか。

見た目は花の精なのに、中身が完全にゆとり世代の最終兵器だ。教育って本当に怖い。

「ああ。信じるよ」

もう我慢できん。生まれてこのかた経験したことのない顔面筋肉痛が、いままさに起こらんとしている。

「警察には通報しないで！」

「ぶっ！」

半ベソでしがみついていた佐鶴の姿があまりにも可笑しかったせいで、笑い声を上げてしまった。

「何が可笑しいの！ 私にとっては死活問題なのよ！」

「それで死ぬほど人間はヤワじゃありません」

あと、上目遣いはやめる。

「……そうするよ」

「本当に？ 約束する？」

「誓うよ」

「じゃあ……」

やっと、僕の服から手を離れた。

結構伸びてしまったな。足軽宅急便のマスコットの足が長くなっている。

どうせ当分は着ることもないだろうけど。

「もし約束を破ったら、あなたの肉一ポンドを頂戴。ちなみにポンドは血を含めた重さよ」

「シャイロックですか、あなたは」

自分が痛い立ち位置にいることに気づけ。

しかも血を出すなという詭弁の対策もちゃんと立てている分、数段たちが悪い。

別にこいつから金を借りた覚えはないのだが。まあ、いいや。

……でも、佐鶴があとで本当のことを知ったらどうなるんだろうか、僕は。

「わかった。その話はもういい」

そんなことより今はここから抜け出すのが先だ。

家でゆっくり紅茶が飲みたい。

「これを僕に教えるってことは、脱出を手伝ってくれるんだな？」

「そうよ。でも条件があるの」

どうせそんな事だろうと思っていたよ。

ややこしい、ろくでもねえ事言い出すんだろうな。

早めに聞いておいて交渉に持ち込んだ方が良さそうだ。

「なんだ。言ってみろ」

家の残骸から爺さんの体を運んで来いとか自殺を手伝ってくれとか以外なら何とかかなりそうだ。

佐鶴は恥らうように身じろぐと、やっとのこと勇気を搾り出したように言い放った。

「知らない殿方にあまりこういう頼みはするなって、爺がよく言っていたけど……」

唾を飲む音が奴に聞こえないように喉を押さえた。

何を言い出すかと思えばこいつ、まさか……

「財布持ってる？」

「は？」

「どうせここに帰ってくるんだったら、たけのこの里と今週のジャンプ買ってきてもらえないかしら」

図々しいな。というかそんな頼みをするなって言われているんだろ？ それパシリっていうの知っているのか？

「でも私が頼めば大抵の男性は聞いてくれるだろうって爺が……」
「どんな帝王学を教え込まれているんだ！

その歪んだプライドと自信を今すぐ窓から放り投げてくれ。

「わたくし、寝る前にベッドの上でたけのこの里を食べながらジャンプを読まないで熟睡できない体質なのよ」

自分がさつき軽く見下した下流民体質だぞ、それ。

自覚症状がないことはやはり恐ろしい。

「時々、それを見つけた爺にジャンプを没収されて、代わりにベルサイユの薔薇を渡されていたわ」

ワンピースやこち亀はだめでも、ベルサイユの薔薇はオーケーらしい。

「そして、紅茶を淹れてくれるの。夜更かしは体によくありませんよ、っていつも言っているくせに……」

優しかったんだな。爺さん。

というか、紅茶飲んだらカフェインの所為で逆に目が醒めるだろうに。

そういえば、佐鶴はさつきから殆どその爺さんとやらについてしか話してないような気がする。

それもそうだ。まだあのことから数時間しか経っていない。

それにも関わらず、ここまで人と会話が出来る佐鶴の神経は、僕が思ったよりもずっと丈夫なのかもしれない。

「そうか……」

腕時計の針は既に午前二時を指していた。

幸い、ここは代々木だ。家がある大久保までは徒歩一時間弱でつけるはずだ。

あまり時間がないので、ここはひとつ、御免被ることにしよう。

「そろそろ僕は失礼するよ」

ロープの先を外に放り出し、身を乗り出して見ると、やはり長さは足りていた。

お粗末なロープを握り、窓を跨ぐ。

しかし、この高さだ。肌寒い夜風もあいまって全身の震えが止まらない。

「行かないの？」

……この人でなしめ。

ニヤニヤしている奴を見てもいいことなさそうなので、全速で三階分降りることにした。

「ふうっ……よいしょ」

二階辺りにさしかかったところ、上からの視線に気がついた。

部屋の照明を背に受け、佐鶴が天真爛漫な微笑みを投げかけていた。

なぜか、僕にはそれが不吉に思えて仕方がなかった。

「本当に、たけのこの里とジャンプを買ってきてくれるのよね」

ああ。そういえばさっきそんな事を話していたっけ。

「そのことなんだけど、実は今財布持ってないんだ。それに、今週の奴は多分もう売り切れてて、月曜日まで待たないといけないし……」

月曜日からのくだりは全部嘘だった。

今週のジャンプは家にある上、来週のジャンプも新宿の成城学園高校近くのコンビニならもう置いてある。

財布は本当に家に置いてあるが。

あれっ、ロープがちよっとずつ下がっているような……

「買ってきて……くれないの？」

ゆっくり、奴は視線を落とした。

しかもしゃっくり混じりの嘔泣きつきで。

「なんだか、ベッドの足に引っ掛けたロープの結び目が緩んでいるみたいだけど……ま、いつか」

「わわわわかったから！家で財布とってくるから！」

「そういえば今週、シルバーチャリオツツのフル稼働フィギュア発売されたんだったわ」

こいつ、ジヨジヨオタか！

「買ってくるから！！買ってやるからロープを結びなおせ！」

「ああ、七体くらい揃えて気分だけでもいいから残像のシーンを再現出来たらどんなにいいかしら」

もとい。こいつは重度のジヨジヨオタだ。

足元を見やがって。

しかし、こんな高さから落ちたらかなりの大怪我につながりかねん。早く降りなければ。

「きゃあ！足が！」

いてえ！

「WRYYYYYYYY？」

「そんな叫び声あげるか！！」

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」のワンシーンの様に、それこそ派手に背中から落ち、地面に叩きつけられた。

何とか転がって衝撃を吸収したものの、明日の朝にはきつと酷い打ち身になつてゐるのだらう。

「こ、これはわたしの所為じゃないくてよ！ 万有引力が悪いわ！」
語尾変えても無駄だ！ 僕の知るお前は既に下流民体質のジヨジヨオタクだ！

「ああん？！ もう一回言つてみる！」

ニュートン先生の所為にするなんて、けしからん奴だ。

「ロープに……ボタンと……メメタアつてなつて、足の小指がドグチアつて……」

擬音ばつかじゃ何を言つてゐるのかわかつたもんじゃない。

特に後半の二つがなんの音なのか物凄く気になる。

脚がどんなことになつてゐるのか想像がつかない。

まあ、つまり、ロープに引つかかつてこけたのだ。

そもでもつて足の小指がすごいことになつたのだらう。

お嬢様らしいつちゃ、らしいが。

「やっぱりたけのこの里とジャンプだけでいいわ！」

自分なりに反省はしているようだな。

誠意の有無は関係なく。

「何で第一声が、大丈夫？ じゃないんだよ」

「じゃあ改めて、大丈夫？」

改めないで欲しいね。

「ああ、大丈夫。軽い打撲だ」

「本当に？」

これだけは全くの嘘だった。

股関節包内骨運動に深刻な支障が生じたなんて言つてもどうにもならないのは明白だ。

「うーん、でもシルバーチャリオツツ欲しいかも……」

訂正。反省も誠意もあつたもんじゃない。

今夜こっそり忍び込んで枕を思いつきり高反発の奴に変えるついでに北枕にしてやる。

「なあ、ジャンプ連載中の漫画で一番好きなのはなんだ？」

「なによ。いきなり。そんなもん銀魂に決まっているじゃない」

あたかもそれが普遍的な回答のような言い方だな。

今週の銀魂が手元に届くか届かないかは僕次第だと言うのに。

佐鶴には見えないようにこっそり中指を立てて街灯の影へ駆けた。

八杯目

やっぱりいつ見ても妙に仰々しい名前だ。

メゾン・ド・フィフティーストームの四〇五号室に、僕は住んでいる。

大家の苗字の五十嵐がそのまま使われているところを、なんとなく愚かしく感じる今日この頃。

「はあ。やっとなつた……」

時刻は午前三時。世間体が気になる時間だ。足音を立てないよう最大限の注意を払い、階段をのぼる。

突然降り出した雨に、全身びしょびしょになったうえ、心身共に力を費やしきつているので、酷い消耗感しか、今は感じられない。部屋の中は朝家を出たときとさほど変わった様子もなく、いつもの机にいつものテレビと鏡がのっている。

紅茶は無事だろうか。

さっそく紅茶の部屋へ足を進めた。

「よし。全部あるな」

おぼろげな記憶を頼りに棚の紅茶やティーセットを確認したが、特に目立った事は見当たらない。

どうやら、誰かがここに入った訳ではなさそうだ。

ひとまず安心して紅茶が飲める。そう思っていると、無理やり言い聞かせた。

シャワールームで軽く汗を流し、先ほどのガラスの破片に切られた手首に絆創膏を貼り付ける。

「死んじゃうのかな……」

あの殺意の中を切り傷一つだけでなんとかやり過ごせたことが不思議で仕方がない。

これからもこんな修羅場を通過していくのかと思うと、さすがにやるせなくなってしまう。

さっきの打ち身の箇所がヒリヒリする。

だけど両手両足がついているだけ、まだまだ。

背もたれのない椅子に腰を据えるのはよしておきたいので、ベッドの上に倒れこみ、枕に顔をうずめた。

まぶたの裏が熱い。

みつともないけど、僕は泣いていた。

静かに、一人で。

疲労と焦燥と恐怖。

誰もいなくなったところで、内側の負なるものが全てこみ上げてきた。

ここなら銃を持った殺し屋も、武装した報道集団も、身内を殺された少女もいない。

ここなら、弱った僕が泣いても、誰もそれを男らしくないなどと責めたてたりはしない。

ただ、昔みたいに、当たり前のように僕の隣にいてくれるジュペリ先生も、もうここにはいない。

これからはソウイチ自身が決めていかないといけないのよ……

孤児院から出るときに言われた言葉だ。

確かにそうだ。生は孤独なものかも知れない。

孤児院を出てここ数年、一人で生きてこれたはずなのに。

大人はそうあるべきだと、度々自分に聞かせていたのに。

なぜか、この切迫した状況の中、僕はもう一度誰かにすがろうとしている。

「はあ……」

銃弾が転げ落ちる音が両耳の間で反復再生される。

これからどうするべきかと言う問いに最も相応しい答えは、僕の持つ選択肢の中にはないのかも知れない。

世界の違う姿を認めてしまったら、それを受け入れてしまったら、僕は今までのように生きてはいけないのだ。

僕はひよんなことから事件に巻き込まれ、それを受け止めて状況を

変える、いわゆる物語の主人公の力は持ち合わせていない。

だからといって誰かの保護すら求めずに、そのままじつくり死を待つほど生に対する望みを捨てきった訳でもない。

自分の所有する生を。今の姿をあきらめるべきか。それとも固執するべきか。

この家に残り続けるか、極討放送の面々が待ち構えるあの場所へ帰るか。

選択は僕にゆだねられている。

そう。

少女の目隠しをほどいた時から。

気絶したその体を持ち上げた時から。

もしかして僕は選択を間違えたのかも知れない。

あの時、僕は一人で逃げ出すべきだったのかも知れない。

構わず中継車が開けた穴から外に飛び出すべきだったのかも知れない。

なぜ、一体何故僕はその時逃げなかったのだろうか。

「……」

しばらく結論は出せそうにない。

床の上に開いたままのジャンプを閉じて立ち上がった。

人とは思議なものだ。涙を流すとすぐに空腹を覚える。

何か温かいものはないだろうか。

冷蔵庫の中を漁り、昨日作った麻婆ナスの残り物を取り出した。

茶碗一杯のご飯ごと電子レンジに入れて、二分弱。

照射されるマイクロ波の中で回る安物の茶碗が、なぜかとても大切なものと思えた。

茶碗だけじゃない。壁掛け時計を始め、ほこりを被った様々な家具や調度品がこの場所に僕をとどめようとするような気がした。

さすがに掃除機をかける訳にはいかないけど、雑巾で軽く拭いてやる分には問題あるまい。

「おい、起きろ」

なにやら冷たい布のようなものに視界が遮られている。それにしても酷い匂いだ。

安眠妨害の最たる形であるそれを顔から取り除けた瞬間、ドライアイスの上で寝そべったような錯覚を覚えた。

濡れた雑巾だった。

そして、それを僕の顔にたたきつけたのは他ならぬ……。

どうしてここが……

そう。たしか長谷園とか言う名前だ。

あの物々しい金属板は持っていないが、その不吉な双眸は依然として、僕が戦慄を覚えるには十分だった。

奴は舌打ちをしながら近くに放り投げられた足軽宅急便のユニフォームを指差して見せた。

襟首に光るものがあった。

昨夜、仙石が僕の肩を軽く叩いて行ったのは、きっとこのためだったのだろう。

「発信機には気づかなかった様だな」

抜け目のないおやじだ。僕が抜け出すことまで読んでいたとは。

ドアは閉めたはずなのに一体どこから入ってきたんだ、こいつは。

あれ……

その問いは奴の肩越しに見えるオートロックに開いた穴を視認することで解決した。

銃弾か。

「いきなり顔面に雑巾を投げつけなくてもいいだろう！」

「じゃあ、首を飛ばしてやろうか？」

ペナルティのレベルが三段飛ばしで急上昇したのは何故だ。

「誰が勝手に抜け出していると言った？！ 答えろ！」

なにも答えられなかった。

考える時間が欲しかったなどと返事しても、結果は目に見えてい

「もしも貴様がホーネット&バレルに見つかったらどうする！ 貴様の安全はともかく、奴らの犯罪を証明する手立てが一つ減ってしまふ。ことさらに貴様は俺たちの居場所を知っているのだ」
確かにそうだ。

他人を危険に晒すことも考えずに、僕は外へ出た。

無理やり連れて来た奴に言われる筋合いもあつたもんじゃないけど。

「というか僕の安全はやはりどうでもいいのか。」

「……………」

「……………」

素直に謝って済む問題ではないな。

放たれた強い殺気に、体表面が粟立つ。

「しかし、中国の格言に、人を許すはよし、忘れるは更によし……
というそうだな」

ほんの少し、注意深く目を凝らさないと気づけないくらい、奴の目が緩んだ。

それと同時に、僕の中にも安心が小さく芽生えた。

強制的に僕をあの建物に閉じ込めた自分たちにも落ち度があると認めているのかも知れない。

「だから今この場でお前を葬り、忘却の彼方へ消し去ってやる」

待て。あの格言は存在を忘れるって意味じゃない！

都合よく解釈しすぎだ！

過大評価が命取りになるとは。

「歯を食いしばれ！！」

蒼い声が耳を刺し通した。

凄まじい速さで奴の拳が迫り、風圧で両目が閉まる。

「……………っ！」

「ほっぺをつねってやる」

いかにも無害そうなのその言葉とは裏腹に、顔の細胞が壊死しそうだ。

どんな握力してやがるんだ。

「こうすると緊張が解けるだろうと、仙石が話していたが」

「男同士の場合、それは赤を通り越して最早黒いウソだ」

「フツ、なるほど。ブラックジョークか」

僕にそんな上手いことが言えるわけがない。

というか、そろそろ僕の頬をつまんだままの手を放してくれ。

まったく……たちの悪い冗談だ。

昨日からこんなやりとりばっかだな。

紅茶を飲みながらじっくり考えるために一時帰宅したら、拳銃の弾をもものもしない化物どもの巣窟に強制送還されるはめになるとは。

「理解しきれない事態に無理やり思考を追いつかせるとは言わん」
不意に、長谷園から言葉が漏れ出した。

「あれだ……三人集えば文殊の知恵と言っただろう？」

「はあ？」

「貴様一人で悩んでいてもどうしようもないって事だ」

湿ったカーテンをしつかりと握ったまま、奴は続けた。

「ちなみに、俺に貴様のくだらない悩み事を聞いてやる義務はない」
カーテンの隙間から眩しい光が零れて来た。

「ただ、目前の事象に向き合うリスクを負うべきか否かを考えるよりは、リスクも何も全部忘れてしまう方が頭は痛くない」

と、コウモリ傘のたたみ方を説明するような口調で僕に投げかけたその一言は、ジュペリ先生の言葉とどこか似ていた。

出来ないことをいかに簡単そうにいう。

人の気は知らずに、どこまでも自分だけの理屈突き詰めて、最終的には数行の簡単な結論にまとめてしまうのだ。

しかし、なぜだろう。

あの頃はいつも、その度し難い、繊細さに欠ける物言いに不快感を抱くと共に、心のどこか安心を覚えていた。

ジュペリ先生の言葉は。

長谷園の言葉は。

僕にとつて、様々な根拠や事例を元に紡がれ、全ての条件を充足させる「完全解」ではないものの、答えを見つけるまでの暫定的な近似値として、抵抗なく染み込んで来るものだった。

「帰るぞ」

どうしても答えがわからない問題はしばらく保留して、わかる物から取り組めばいい。

忘れて、後からもう一度振り返って見ても、まだ問題はそこで待っている。

だから、今は小さな選択を積み重ねて、完全な回答を見つけ出すべきなのだ。

必ず順番どおりに解けるとは限らないのだから。

「待つて」

例の石膏像のような眉間に光が反射し、まるでそこに温もりが宿っているような気がした。

「荷物をまとめさせてくれ」

一度も使ったことがないまま収納されていた旅行鞆で、紅茶のシミがついた少年ジャンプやら服やら茶葉やらポットやらティーカップやらを、割れたりしないように丁寧に運び出すには時間が必要。

「あと、そのまえに」

冷めたやかんをもう一度火にかける。

長谷園がなぜか呆れ顔をしているけど構わないことにしておく。

「僕は家に来た客にお茶の一杯も出せないほど礼の欠けた人間じゃない」

「もしも、この答えが間違っているとしても。」

その時はもう一度ここまで、五月九日の日曜日まで引き返そう。

困ったように頭を掻いていた長谷園は僕が何度か咳き込むと仕方がないという風にテーブルに腰を落ち着けた。

「俺は不器用な上、あまり茶を嗜まない人種だが」

「大丈夫。飲みやすいつて観点から見ると結構いい茶葉がそろっ

「ているから」

軍人も、運転手も関係ない。

紅茶慣れしているとか、そんな事は何の問題にもならない。

大事なのは飲むことだ。

飲むのが人間だ。さあ飲もう。

「ティーカップを割らなければなんら問題はないよ」

雨は、いつの間にか止んでいた。

九杯目

薄暗い照明の下、地図と図面で埋め尽くされた壁に数倍に増幅された声が奔る。

闇の中に紛れた、数え切れない狂気の眼光が壇上の上に立つ、リーダーと思われる黒い迷彩服の男を見上げていた。

アジア系と見えるその面々は、一人も欠かさずその手に銃器を握っている。

直立不動のまま銃床を地面につけているその姿から浮かび上がる莊重たる覚悟が、彼らが歴戦の手練れである事を表していた。

そして、何よりもこの集団を特徴付けるものとして、集った全ての男の首に大きく刻まれた「スズメバチ」の刺青があった。

死軍鶏は隅に寄りかかり、その隊列を眺める。

「ハイヴ・キャンプ……」

軍事力の劣る国家にホーネット&バレルが協力し、強靱な軍人を育て上げるシステムだ。

もちろん装備は全てホーネットのものを使用し、ハイヴ・キャンプ出身者が軍の上層部に行くことにより、政治の中枢と更に太いパイプでつながる。

それを世界規模で進めることによって、戦争をコントロール出来るようにするのが、ホーネット&バレルの狙いであった。

ハイヴは英語で「蜂の巣」を意味する。

世界中に巣をつくり、膨大な数の働き蜂を生み出す。

「結局は冬に死を迎える使い捨てだけだな」

兵士は、蜂の社会と同じく、更なる繁殖のための消耗品に過ぎないのだ。

国家にとっても、ホーネットにとっても。

さらに大きなビジネスチャンスを獲得するために、操るだけだ。

マーケットプレイス
究極の戦争。

その扉を開くために、死軍鶏はここに来ているのだ。

国家間の衝突を招くきっかけ（トリガー）を作るのは簡単だ。

飛行機がビルに突っ込むだけで、戦争は起こる。

正規軍を欲しがる日本の脳なし共をそそのかして、計画に参加させるのは簡単だった。

他国の軍人が、日本国内でテロを起こして国民の警戒レベルを上げ、正規軍発足における最大の障害物である憲法九条を改憲させる。そして、正規軍発足の暁には、ホーネット&バレルが日本の軍需市場を独占する。

「割りのいい仕事だ」

それだけではない。今回の出張にはとんでもないおまけがついている。

むしろ、価値と将来性だけはそのおまけの方が断然上だ。

ドサクサに紛れてファイアーシャッターのサンプルを本社に提出できるなら 支社を通して手柄を横取りされるだけだ あわよくば昇進が望めるかも知れないのだ。

「まさかあんな場所でお目にかかるとはな」

一つ、秘めた思いを噛みしめる死軍鶏は、一人の男が静かに部屋から抜け出すことに気が付かなかった。

「遅い」

礼拝も終わり、誰もいなくなった教会の中、仙石はただ待っていた。

いつもなら仙石が到着するよりも先に八坂がここで待っているはずだが、なにか妙だ。

引き返したほうがいいのかもれない。一抹の不安が浮かび上がった。では弾ける。

「待たせたな」

黒いコートを羽織った八坂が長いその後ろに立っていた。

風と光を遮るその巨軀はどこか不思議な安定感を漂わせていた。

この男なら、どんなに人が溢れる場所においても、二足歩行さえしていれば、すぐに見つけられるだろうと、仙石は常々思っている。極討放送における「特派員」の役目とは、「取材先」に入り込み、情報を獲得することだ。

もちろん目立たない人相や体格を持つに越した事はないが、それを鼻で笑うような強面と190センチに肉迫する体を持つこの男は、諜報活動を難くこなしているのだ。

仙石ですら、後ろに立たれているのに、全く存在を感知できなかったくらいだ。

地味な奴

恵まれた体格を隠すために、もつとも頼りになる性質。

地味で目立たない。体格が大きかろうが小さかろうが、どんな集団に紛れても何の違和感もなく溶け込む上、誰にも警戒されず、どこにでも受け入れられる。

疑り深いキタキツネ 恐らくはそキタキツネ以上に疑り深い長谷園まで も、八坂にはなつくであろうと仙石は想像した。

無害そうな脱力感満タンの男なのだ。

しかし、今日は何だか様子がおかしい。目の奥に焦りが見える。

「どうした。寝不足か」

「いや、背中にニキビが二つほどできたのでな。かゆくて仕方がない」

やはり尾行がついていた。

八坂の肩越しに目を凝らして見ると、礼拝堂の扉の隙間から人影がこつちを覗いていた。

二人組だ。

連絡方法に問題はなかったはずなのに、どうして気づかれたのか、仙石には見当すらつかない。

「シャワーは浴びたか？」

「いや、それが……背中まで手が届かなかった」

証拠隠滅に必要な時間が足りなかったか。

何らかの原因によって、奴らの活動が活気を帯び始めた事は前回の密会で聞いていた。

行動を起こすのは恐らく一ヶ月後位になるだろうと踏んでいた仙石に今すぐ会いたいと、八坂が連絡をよこして来た事から、連中の動きに変化が起きた事は察していたが。

「医者に診てもらえ」

調査記録を要求する暗号だった。

「急いだ方がいいと言っていた」

八坂が懐から一枚の写真を取り出した。

「これは……」

見覚えのある顔だった。

それもごく最近。

間違えようがない。あの毒々しい眼は。

そう。ホーネット&バレル社のディーラー、死軍鶏だった。

「秘密裏に建設されたハイヴ・キャンプ・東京に奴が来ていた。それと東南アジアのキャンプ所属の奴らもだ」

「何を企んでいる……」

八坂が写真を裏返しにした。

黒いマジックで「この男を知っているか」と書いてあった。

重々しく、仙石は首を上下させる。

「確かに、早く何とかしないと化膿してしまうだろう」

ホーネットが東南アジアのクーデター政権に接触していた事は知っていたが、何故日本にきているかは、依然不明なままだった。

続けざまに、二枚の写真が仙石に差し出される。

それぞれ、船の設計図面のようなものや、死軍鶏が中年男性と同じテーブルに座っている写真だった。

それらが何を意味しているのかは、はっきりしない。

「チツ……」

八坂を尾行していた男たちがこっちに向って歩いてきていた。

「ニキビは潰して置くべきじゃないか？」

神経を研ぎ澄ませ、いつでも前方へ飛び出せる様に構えを取った。真っ直ぐ伸びた体幹から、下半身が常人のそれと比べものにならないほど鍛え上げられていることがわかる。二人ともかなりの使い手だ。

「やめて置こう。まだ大丈夫だ」

あの二人をどうにかしない限り、無事に帰れそうにない。

急いで三枚の写真を、持っていた聖書の中に挟んだ。

八坂がそれを隠すように、左へ一歩動く。

「こつなつたら仕方ねえ……」

仙石が懐に右手を入れた。

八坂を尾行していた二人組はすぐそこまで来ている。

「デク、てめえ。今そいつとなにしてたんだ」

頬骨の出た方の男が八坂の腕を強く引っ張った。

八坂の体が大きく振り向く。

交錯する視線を背に、背の低いもう片方の男が仙石の退路を断つ様に構える。

逃げ道は残されていない。

「何者だ。答え次第ではただじゃあ帰さん」

少し訛っているものの、その言葉が持つ険悪なニュアンスが損なわれる事はなかった。

ジャンパーの懐が異様に膨らんでいる。拳銃だ。

「待て、ファム。こいつはただの知り合いだ」

「黙ってる。お前には何も聞いちゃいねえ」

八坂が拳銃を持った男を制止しようとしたが、腕を掴まれた所為で動けない。

しかし、当の仙石は特に当惑した様子もなく、両手ともポケットに突っ込んだままだ。

「なめてんのか？」

ポケットの中から拳銃のグリップをちらつかせても、ちくわを見てる様な目つきでそれを眺めるだけだった。

「いつまでも悠長に待つと思つなよ！」

シビレを切らしたファムが仙石の頬に平手打ちを放った。

歯を食いしばれ

誰一人、仙石の手がそれを止める瞬間を捉えることが出来なかった。

気づいたときには、黒く焼けた人差し指にはめられた金の指輪に刻まれた見事なスズメバチの浮き彫りが四方に光を散乱させていた。

それだけではない。左手の人差し指と親指が男の頬をきりきりと音がしそうなくらい、強くつまんでいる。

「ほっぺをつねってやる」

「あ、あがな……」

拳銃が、無機質な音をたてて床に転げ落ちた。

男たちの瞳孔が、一回り大きく広がっていく。

「失礼いたしました！ デイラーの方でいらしたとは……」

「わかればよろしい」

八坂も剣呑な顔を緩め、息を瞬きを、再開した。

「ファム君と言ったかね。私はデクと話があるんだ。君たちには悪いが、少し他のところにも聞いてもらってもいいかね？」

「しかし……」

頬骨の出た男の言葉は、差し出された仙石の手により止められ、結果、彼らは退席を強いられた。

「指輪は使わないことにしていたんじゃないやなかったのか」

呼吸を荒げた八坂が去る二人を後ろ目に問うた。

「しょうがないだろう。それに、あいつらはハイヴ・キャンプ出身者だ。ホーネット&バレルの社員でもない奴に、俺がもうホーネット&バレルで働いていないことなんぞ、わからないに決まっている」

「確かにもう二度とはめたくはなかったけど、と仙石が小さくぼやく。それなら捨てちまえばいいのに、どうしてまだ持っているんだ」

僅かな間、空気が淀んだ。

「昨日の昼頃まではそう思っていたさ」

「……………」

八坂が、静かに目を瞑った。

「それ以上は聞かないことにする。昔話は俺も嫌いだ」

「恩に着るよ」

聖書を鞆にしまい、歩き出す。

「ああ。あまり無理はするな」

「十年前にそれを言ってくれたら、もう少し穏やかに暮らしていたかもな」

仙石の目から垣間見える八テナの数は一向に増えるばかりだと、

八坂は感じていた。

「燃費の悪い奴だ。飲み込んだ秘密スクープの内、百分の一も吐き出さねえ」

人一人には納まり切れない程巨大な秘密が仙石の中にとぐるを巻いていることが、八坂にはよくわかっていた。

「見つけた！」

モニターに吸い込まれるように屈んだ死軍鶏の目が獰猛な色彩を宿らせる。

東京中に散らばった小型偵察機、饕餮トウテンの性能を以って極討放送の根城を見つげる事はたやすいことであった。

数十数百に分割された広大な画面のうち、二つだけが明るさを増していた。

一つは中継車、そしてもう一つは一台のタクシーを映している。

乗っているのは長谷園と名乗った男と、殺し損ねた宅急便ドライバー。

「こいつは好都合だ……………」

敵の勢力は二分している。襲撃するなら今しかない。

口が裂けたような嗤いを浮かべて、なお画面に見入っている。

死軍鶏は、睡眠不足によって深く堀が出来た目元をこすり、コーヒーが入ったマグカップを口に運んだ。が、そのカップはあっけなく砕け散ってしまう。

黒い飛沫が部屋中に飛び散り、画面をも塗りつぶす。

破片が薄くて白い綿製の手袋を突き破り、左手を刻んでいるが、そんな事はもうどうでもよかった。

彼はこのままじっとしてられないのだ。

不覚を取ったとはいえ、自分に対して銃口を向けた長谷園が許せない。

異形の殺意と衝動が疼いている。

長谷園を構成する全てを解析し、分解し、破壊し尽くして尚止まないであろう、凄まじい暴力の片鱗がモニターに注がれ、液晶が弾ける。

花火を残して、光源は全て消えなくなってしまった。

不可視の領域と化した部屋の中、はらわたを切り裂く様な眼差しだけが遊泳する。

「しかし、残念なことに私の体は一つしかない」

そう。今の死軍鶏に、多くの人員を動員する事は不可能だ。

本当の計画をホーネットの上層部に知られるのは後にのつぴきならない状況を招く恐れがある。

長谷園を片付けるより先に極討放送の根城に踏み込んだ方がいいに決まっている。

今は従順を装い、ファイアーシャッターの奪取を優先すべきだ。

「残念だが、あいつは後だ」

昨日、二度と会えないと思っていた自らの血肉を見つけたことで、失いかけていた生の目的を取り戻せた。

間違えるはずがない。

母と同じ声、同じ目をしている彼女を。その名を間違えるはずがない。

「さあ。久々の再会と行こうか。姉貴殿」

死軍鶏の耳には己の気道に空気が擦れる音さえ鮮明に聞こえていた。

既にアドレナリンが血中を走り始めているのだ。

手探りでテーブルの上に置かれた饕餮統制用の端末を握り、命じた。

「S75以外の全機はC24の元に終結し」

一条の光が瞳と瞳を通り抜けた。

そして、曇りなき言葉は奇襲の刃と化す。

「追跡中のターゲットを抹殺せよ！」

十杯目

クーラーがついているにも関わらず、タクシーの中はむし暑かった。それには僕の格好が幾分か影響しているのだが。そう。僕は今膝の上に旅行鞆を抱え込んでいる。

旅行鞆をトランクに入れなかったのはひよっとしたらかなりのミスチヨイスだったのかも知れない。

茶器類は割れ物なので発泡スチロール容器に入れてから旅行鞆に詰め込んだが、それでも安心ならずこの様な訳だが。

影になつている左側に座った僕でさえこうなのに、可視光線紫外線赤外線がことばかり差し込んでいる右側にいる。しかも新品の和柄のキャップを被り、ベストを着たまま。長谷園はどれだけ熱いだろう、と考えてみたが、奴は常識の当てはまらない体の構造をしているらしく、涼しげな顔をしていた。

神は人間を土から創ったと聖書に記されているが、こいつの場合、金属酸化物の焼結体、つまりセラミックスを材料に使っているのではないかと、凡俗な想像力を働かせてみる。

確かに陶磁ならこの造形美は納得できるな。

どうせ目の肥やしにしかならないだろうが。いや、可愛いそうだから目の保養と言って置こうか。

脆く砕けてしまえばいいものを。

言い忘れていたが、これは嫉妬なんかではない。陶磁が嫌いなだけだ。

あれ、そういうえば紅茶を飲むときに使っているティーカップとポットなんかも全部陶磁だったな。

失礼。やっぱり長谷園が嫌いなだけだ。

話は変わるが、運転手すらシートベルトを外してシャツのボタンを二つも外しているところが、さすが個人タクシーならではの言えるだろう。

シートベルトを締めた方がよいのではないかと勧告して見るも、
「勘弁してください。どうせこの辺に警察なんていやしませんが」と
爽やかな笑顔を返されてしまっても何も言えない。

「これでよし、っと」

例のものはちゃんと途中で寄ったセブンイレブンで入手してある。

タクシーの中で待っていた長谷園が何を買ったのか聞いてきたけど、
コーヒー味のガムをやって黙らせた。

佐鶴のためにたけのこの里を買っていたなんて言っても笑われるだけだ。

ここまで聞いたら僕を底抜けに優しい人だと思いかもしれないが、
実はジャンプから丁寧に銀魂のところだけ取り除いて、代わりに燃
えるごみの日に出し忘れたビックコミックの中から切り取ったゴル
ゴ13を同じ枚数分糊で貼り付けておいたので、佐鶴の手元に今週
の銀魂が届く事は絶対でない。

さいとうたかを先生の劇画は佐鶴にとって刺激が強すぎるのかな？
戻ったら、佐鶴の呆け面を眺めながら一杯飲むとしよう。

割と秀逸なお茶請けになるかもしれない。

運転手は三十の半ばといったところで、それなりに老練な方である
と見た。

線路沿い、人のいない細道を難なくすると抜けては、いつの
間にか目的地の手前まで着いてしまっている。

丁度、ステレオから流れる「オルフェのサンバ」が終わり、「デ
サフィナード」の中盤ぐらいに差し掛かったところだった。

「当たり前だが、金はお前が出せ」

「ちっ……」

確かに、僕が外に出ていなければこのような余計な手間も省けた
だろう。

お陰で気は晴れたが。

だが、この程度なら問題はないだろう。

当分は外へ出歩くこともないと踏んでATMからありったけの現金

をおろしてきた訳だし、千円程度ならあまり影響はない。

しかしながら、さつきからなんなんだ。この運転手は。

「今日はお二人でお出かけですか？」

僕の 基本的に博愛主義者だが 嫌いな人は主に二種類あって、まずはコンビニのリプトンをしか飲んだことのないのに紅茶をわかった気になっている人で、二番目に来るのはやたらと話をふっかけてくるタクシードライバーだ。

さつきからこの調子で、あまり答えたくない厄介な質問ばかりしてくる。

長谷園と僕を友達だと思っているところに、嫌気がさす。

「ん？」

バッグミラーに付いたクリップに一枚の写真が挟んであった。

目の大きい赤子だ。

格好の話題じゃないか。

余り好ましくない質問に答え続けるよりは子供の話でも聞いて和むほうがまだましだと見た。

「息子さんですか？」

にやけた顔が更に晴れやかになった。

「はい。まだ生まれて4ヶ月しか経ってないんで、まだ小さいですよ？」

「可愛いですね」

「ここだけの話、実は嫁より私に似ているんですよ」

悪戯っぽく声を殺しているが、誇らしさがちらほらと。

確かにそうかも知れない。目鼻たちが僅かながら重なる気がした。

四ヶ月

僕が生まれて四ヶ月経ったとき、両親は僕を孤児院の犬小屋の中に置いて、去った。

第一発見者が不細工なパグだったのはいささか不満に思えるが、ジユペリ先生の話聞く限り、そんなに悲惨なものでもなかったらしい。

苗字はないものの、一緒に置いてあった手紙には「颯一」と、かっこいい名前が書いてあったのだからと、またまた人の心の機敏に無頓着なのかどうか判断しがたい話を延々と続けていたものだ。

暫定的回答にしても適當すぎるほどの。

「今日は早めに帰って家族写真をとりに行くつもりです。最近忙しかつたもので……」

「そうなんですか……」

素直に喜べない自分がそこにいた。

いかにも幸せそうな笑みを零す彼の姿が、なんだか僕とは少し違う生き物であるかのように、そう思えた。

黙りこくっている長谷園の横顔が少しだけ強張っている。

この手の会話は苦手なのかもしれない。

あとでこの話題を振ってやろう。

「お客さん。今日はなんか妙ですね」

僕の反応があまりよろしくないことを察してか、彼は他の話への乗り換えを試みた。

「どうしたんですか？」

「ほら、あれですよ。あれ」

送電線の上に黒い影がびっしりと並んでいる。

お天道様が張り切って真上から照り付けている所為で眩しくてよく見えたもんじゃないが、カラスの大群とみて相違ないだろう。

「こんなもの、めったにお目にかかれないでしょうね」

都心に棲む鴉の数も、今ではすっかり増えてしまったもので、ごみを漁る姿を見つけるのはいかにもたやすい。

そういえばジュペリ先生が毎朝窓からパンくずをなげてやっていたっけな。

こつして電柱に座っている姿も風景の一つとしてなんの違和感もなくすつと目の奥へ浸透してくる。

凜々しいとは到底言えないが。

「おい」

長谷園が肩を突いて後ろを見るよう合図をする。

バックウィンドーガラスに並んだ熱線の間から見える送電線も同じく黒で塗り潰されていた。

前言撤回。こいつはたまげた。

風景の一つに鴉がいるのではない。

さも、鴉だけで風景が構成されたようにも感じる。

なんと数だ。生まれてこのかた、こんな数の鴉を目にした事は一度もない。

どこから湧き出たものか、薄気味悪い。

四方から更なる大群が飛来しては送電線に端座している。

一瞬、タクシーがその数百の嘴に穿てられる光景が目前を走り抜けたが、そんな超自然的現象がことが起こりうるはずもないとたかをくくって、静かにタクシーの扉に寄りかかった。

「……………」

ふと、宙に鎮座した「それら」は鴉などではないかもしれないと、そんな気がした、

「わりい。おっさん。目的地変更だ。出来るだけ遠くへ！」

は？！

得体の知れない緊張を含んだ長谷園の言葉に僕も運転手も戸惑ったが、ほどなくその真意を理解することが出来た。

またもや頭上を突っ切る黒い雲が太陽を覆い隠し、鴉だとばかり思っていたものが昼の影からその正体を現した。

全て同じ大きさで。

全て同じ形をしている。

先ほど感じた不気味さはここから由来していた。

生けるものには決して備わらないであろう、あらゆる個体の同一性。

窓に寄りかかった僕の目前で飛び交う黒い物体の姿が、まるでスローモーションのように脳裏に焼きついてゆく。

楕円形の体突起の如き鱗が包み、皮膜の翼の下に六本、細枝の

様な足が生えている。

その「頭部」に当たるところに目鼻は存在せず、ただ一眼カメラのレンズを彷彿させる分不相応に大きい、黒く透き通った眼球と金属光沢を放つ牙があるだけだった。

「ホーネット……か！」

長谷園が嘆かわしい叫びを上げる。

異変に気づいた運転手がタクシーの首尾を返そうとしたときには、もう手遅れだった。

巨大な蛇のように、一丸となった「それら」が車体を強打したのだ。

「ッ！！」

歪みに耐え切れず細かく砕けたガラスの破片が突風と共に顔に吹き付ける。

設計上、細かく割れる様に出来ているおかげで致命傷には至らなかったが、相当な威力を持っていた。

視界が急激に傾き、体重が窓際に反れる。

旅行鞆が車内を激しく転げまわっては、開いた窓から外へ転げ落ちた。

転覆を止めるために反対側へよじ登っても、車は傾き続ける。

「踏ん張れ！ 飴沢！！」

「んな事言われたって！」

浮いた方に必死に登って、手すりを捕まえる。

尽力の甲斐あって、間もなく、衝撃で浮いた車体の右端が重力に従って地に着いた。

それと共に、激震が下から上へ突き上げる。

フレームが歪曲し、シートのバネが弾けた。

長谷園と僕は何とか座席に爪を立てて激突を免れたが、シートベルトの保護を受けていない運転手はそのまま天井に打ち上げられてしまった。

天井にへこみを作った彼がシートに落ちて来たときには、首が既

に鋭角に折れていた。

膨らんだエアバッグが揺れる度に頸椎が脱力感一杯に左へ右へ力なく垂れ下がる。

嘘だろっ……

「バカ野郎！ なにもたまたしてる！」

顔に電流が走った。

長谷園の平手が僕を虚ろな空白から引きずり出したのだ。

後ろを見ると、黒い兇刃と化したコウモリ似の化物共が空中で方向を変え、こっちへ詰め寄っていた。

「間に合わねえ」

軋むタクシーのドアは開きそうにない。

長谷園が何度も繰り返し返して蹴ってもビクともしない。

それをあざ笑うかの様に黒い奔流は詰め寄せる。

醜く曲がった窓のフレームの中で、だんだんと大きくなっていく。

「このド畜生目が……！」

奴らの牙がまさに頭部を抉ろうとした一歩手前、ドアが吹き飛び、僕は背を地面に向けたままに投げられた。

僕を片手で投げた長谷園が車から飛び降りるのが、視界の端に映る。

間髪入れずに、車の天井が耳をつんざくような音をがなりたてて両断された。

貪る爪牙が仰向けになった僕の頭上を通り越し、火花を散らす。

そして、何か赤くて丸みを帯びたものがタクシーの中から空高く舞い上がり、やがて目の前に落ちて来た。

「ひ、ひいいいい……！」

千切れた運転手の頭部だった。

家族写真をとりに行くつもりです

ゆっくりと、運転手の声が頭の中で旋回しては何処かへ消えてゆく。

「なぜ…………」

世界が瞬時に躍動感を失い、沈黙した。
むき出しになった顎の骨の下のアスファルトに水溜りが広がる。
ぼつりと、空を仰ぐその瞳に小さな雲が浮かんだ。

「こんな事って……」
不思議な浮遊感だ。まるで遠くから自分やこの場所を観察している
ような気分だ。

にじり寄って拾い上げると、それはとてもとても軽かった。
僕の手はもう赤く濡れていた。

実は嫁より私に似ているんですよ

三十秒前まで確かに微笑んでいた。

三十秒前までハンドルを握っていた。

これから家族の元に帰って小さな幸せに浸るはずだった。
なのに。

「ねえ、聞こえますか？」

首から下が寂しい彼の頭を膝に乗せ、語りかけた。

答えてくれないとわかっていながらも、それを止めたくはな
かった。

「」

長谷園の口が何かを叫んでいるが、聞こえない。

鼓動の音だけが存在する場所に一人取り残された僕には届かない。

沈黙した世界は言葉を返してくれない。

「今日は早く帰るんじゃないかなかったですか？」

三時間の空白を抜けて、涙腺が再び動き出した。

時の歩みは緩やかで、進んでいるのかどうかさえ知覚できないく
らいまで、失速していた。

場違いのそよ風が、血にまみれて固まりついた運転手の髪に絡め
た指の隙間を縫うように通り抜ける。

「なんであんなに死ななきゃいけないんだ!!」

後ろからの鈍重な打撃を受け、僕は地面に這いつくばった。

長谷園の腕が僕の首を押さえつけていた。

そして、全ての音が返ってきた。

僕の頭があつた場所を通り抜ける無数の凶器の音が、はっきりとした悪意を持って全身の細胞を揺さぶる。

「効かないだろ？」

長谷園が拳銃を取り出して応戦するも、一匹が隊列から墜ちただけで全く歯が立たない。

再度襲ってくるその牙を辛くもかわすが、ベストがはたけ、背中がみるみる内に赤く染まっていく。

立ち上がるうとしたが、上手く腰が持ち上がらない。

昨夜打った箇所につきの衝撃が加わったせいで、体が言うことを聞かないのだ。

それとも、腰が抜けたのだろうか。

重心を崩した長谷園が地面に肩膝をついて息を荒げる。

それに乗じ一陣の刃の嵐が長谷園に真正面から迫る。

「危ない!!」

波紋が、水溜りに広がった。

十一杯目

「やれやれ」

マグカップの中の顔が揺れる。

コーヒーはいつの間にかすっかり冷めていた。

夜通しでビデオミキサーと向き合った所為で一滴も口にしていな
い。

飲み物の存在自体、頭になかったのだ。

「折角ベル姉が淹れてくれたのに……」

しばらくコーヒーの水面を見つめて、前髪を整える。

「まあ、冷めた市販のインスタントでも、大事なのは気持ちだ」

烏熟は画面に流れる死軍鶏の姿を眺めていた。

極討放送のメンバーは殆どが機械類に疎い。

自分の得物だけは体の一部の如く扱う彼らだからこそ、そうなの
かもしれないと、ため息混じりに諦念するしかないのが烏熟の現状
である。

もしエンジニアとして働く彼がいなければ、カメラのメンテナンス
を始め、映像編集に至る全てが機能不全に陥ってしまうだろう。

今も、編集室に一人こもりきりで、昨日の映像を黙々と繋ぎ合わせ
ていた。

編集の実力で、その映像の説得力は大幅に変わる。

今回は非道なホーネット&バレル社の実像を如何にリアルに伝えら
れるかが鍵となる。

極討放送がこの数年間世界の目を欺いて集めてきたホーネットの
内部情報、犯罪行為の証拠はまだ微々たるもので、もし告発しても
その証拠はホーネットが操作できる範囲内にあった。

「だけど、今度はかりはそうは行かない」

奴らは賭けに出た。

引き返せないところまで来ている。

戦場ではないところで、白昼堂々と殺人を行ったのだ。

それだけではない。その凶行がファイアーシャッターに関わるものだと知り渡るなら、日本を含め、世界の情報機関が殺人者の行方を追うはずなのだから。

デスクトップコンピューターの電源を入れた烏熟は、考えをまとめた。

ホーネットを目の敵にしている組織は数え切れないほどある。

代表的な例が競合相手である米国の軍産複合体だ。

ホーネットを貶めるための証拠を探すことにかけては、極討放送に劣らぬ労力を費やしている。

彼らとコンタクトできるならば、少なからず優位に立てるはずだ。

「いや、仙石さんはそれに反対するに違いない」

基本的に、仙石は企業の手を借りようとしない。

自らの手で敵を追い詰めようとするのだ。

「まずは情報ありき、か……」

ホーネットに不利な情報を流すなら、ほぼ確実に打撃を与えることが出来るだろう。

「だが、決定打にはならない」

再起不能に陥れない限り、奴らは神話に登場する九つの首を持つ蛇の如く再び蘇ってしまうだろう。

米国での旅客機テロにも、ホーネットが関わっていた。

その説を打ち立てたフランス人のジャーナリストによって、株式市場は著しい変化を見せた。

独自の調査によって発表したレポートは、六枚の写真と簡潔に綴られた文書のみで構成されていた。

そのレポートがもたらした物こそ、急激なホーネットの株価の下落。

テロによって焦土と化した株式市場に追い討ちをかけるように。

しかし、その翌月、アメリカはテロとの戦争を宣告し、大量の在庫を処分したホーネットは再び莫大な利益を得ることになる。

ホーネットを批判したフランスの若きジャーナリストは三ヶ月後に不慮の死を遂げることとなるが、その記事は地方新聞に五行ほど割かれただけで、まったく言っていないほど知られていない。

二の舞を避けるためにも、焦らず証拠を集めるべきだと烏熟は結論を下した。

「死軍鶏との接触により、向こうもこっちの思惑に気づいただろう」
ファイアーシャッターがもたらす利益を独り占めにせんとする計画のリスクが、ホーネットの上に重くのしかかっている。

もしも他国の情報機関が気づくなら、黙っちゃいないだろう。

「だからこそ、これ以上迂闊な行動は出来ないはずだ」

日本国内でこれ以上法律に触れる行為を続けるつもりならば、日本政府との癒着が必要不可欠になる。これだけの短期間でパイプを開通するのはいくらなんでも無理がある。

それに、正規軍を持たない日本に軍需会社であるホーネットが計れる便宜は限られている。

今までの経過を見ても、ハイヴ・キャンプの建設を防衛庁が極秘裏に許可した以外、何の動きもない。

「おそらく、ファイアーシャッターの奪取計画はホーネットが単独で進めているのだろう」

昨夜、空港のコンピュータに侵入して発着情報を覗いたが、予想通り、ホーネットの小型専用機があった。

恐らく死軍鶏が乗ってきたものだろう。

火曜日の午後に到着していて、出発の予定はまだ定まっていない。

「でも、あんまりのんきできそうにもないな」

奴が日本から出る前に証拠を押さえなければ勝ち目はない。

烏熟は奴が昨日の事件までどこで何をしていたかが、実は大切なのではないかと推測した。

「はっ……！」

画面の中から、禍々しい目をした死軍鶏が烏熟を睨んでいた。

コーヒーを持った手が凍りつき、肩がすぼむ。

「いや、まったく。長谷園に生まれてよかったぜ」

巻き戻しを押しして死軍鶏のイメージを頭の中から消去した。

現われたのは、マイクを前にしてどもりっぱなしの颯一だった。慌てる様子がなんとも愉快と、最初はそう構えていた。

「気の毒な奴だ」

日常から引きずり出されて、何も出来ないまま、ただそこに立っているだけ。

烏熟の脳裏に仙石との出会いが蘇った。

「あのおっさんに一つだけ天賦の才があるとするならば、それは人を巻き込む事だ」

颯一の姿が、初めて仙石と出会った時の自分と重なると、烏熟はふとそんな風に思えた。

最年少研究員にして、落ちこぼれという自己矛盾を抱えたままホーネット&バレルの技術開発局にいた自分を、今まで知らなかった世界へ連れ出したのは他ならぬ仙石なのだ。

「烏熟君、コーヒー飲む？」

勢い良く扉を開けて、コーヒーポット片手にTシャツ姿のベルが編集室に入ってきた。

烏熟がいまだ満杯のままのマグカップを持ち上げて申し訳なさそうに目を細めると、ベルもまだ飲んでいないの、と驚いて見せた。

そこで、いつもと違う何かに烏熟の神経が反応した。

「あれ？ 髪どうしたの？」

烏熟はちよつとした違和感の正体にすぐに気づいた。

ポブカットの髪を後ろに流して一本にまとめている。

ベルはあまり人前で耳を出したからないはずなのだが。

「今日は結構暑いから」

烏熟はあつさりと答えるベルに戸惑いを隠せなかった。

ベルの耳の裏には、その清楚な外見からは想像も出来ないであろう、子供の拳一つ位の大きさの刺青がある。

手術で少しは薄くしたものの、いまだその全貌は確認できる。

ハイヴ・キャンプ

スズメバチの刺青だ。羽に訓練所がモロツコであること現すMORの三文字が記されている。

どんな心情の変化があったのか、すました顔で忌々しい記憶を呼び起こすその刺青をあらわにしていた。

深く追究しても何にもならないだろうと踏んで、烏熟は他の話題を探した。

「佐鶴は？」

「一人にしてつて言われちゃった」

ベルが寂しげに首を振る。

髪が揺れ動くたびに光を撒き散らす。

「そうか」

一日で立ち直れと言うほうが無理だと、烏熟もそれに頷いた。

慣れることには、変わることには時間が必要で、痛みもそれに伴う。

二人ともそれを分かっていた。

仙石がホーネット&バレルから抜き出したのは烏熟を含めた三人

ベルと長谷園がそうだった。

「仙石さんは？」

「いつもどおり教会よ」

三回も続いた即答短答に、言葉の流れが完全に止まってしまった。

ベルの悪い癖は答えが短い所だと、烏熟はつくづく思う。その所為で話が広がらない。

欧米人らしく表情豊かなのだが、いざ会話になると話が短い。

必要なことしか語らないところがとこか男の会話を思わせる。

まあ、あんな環境で育っちゃ誰だってああなるな

だが、むしろここまで変わったことをほめてあげたいくらいだ。

五年前のベルを知っている烏熟だからこそ、その触れ幅の大きさが分かる。

ところが、偉そうにそんな事を考えている自分とは振り返ったと

ころ、まだ会話の流れを読めないと言う、コミュニケーションにおける致命的な弱点をやはり抱えている。

完璧に直すにはまだまだ時間がかかりそうだ。

ベルの劇的な変化を考えると、はたして自分は昔と比べて変わったのだろうか、烏熟の中に疑問が芽生えた。

「ベル姉」

烏熟だって自分の悪いところは自覚している。

ベルと自分では会話がかみ合わないことも知っていた。

だけど、こっぴड़ाかしいけど、聞かずにはいられないと、そう感じていた。

「俺、変わったのかな」

「……」

相手が長い答えを必要とする質問を苦手としてしていると承知の上で。

ベルは首をたれ、そのまましばらく考えにふける。

心臓が締め付けられる感覚がどこかもどかしい。

「そうね」

軽いため息をつくその姿に、烏熟は不安を覚えた。

そして、硬直していたベルの白い頬が動き始めた。

「昔は私に何かを聞くことすらなかったわ」

しつとりと、優雅に微笑んでいた。

「よかつ」

「妙にプライド高くて、和ともよく喧嘩していたし、喧嘩っ早い癖して逃げ腰だったし」

安心した瞬間スタスタにされる。これだから女は油断できないと、烏熟は嘆息する。

「口喧嘩で刃物取り出す奴の前で逃げ腰にならない人は少数派だよマイノリティ」
冷静ぶつた言い訳には構わず、水門を開けたダム如く、ベルは言葉を連ねる。

「私から見れば二人とも弟みたいなもんだから、面倒見ないといけないのにな。私の立場はどうなのって、いつも思っていたわ」

烏熟が当時は鉄拳制裁しか解決策を思いつかなかったくせにと、小さく呟く。

「でも」

ベルの視線が床に落ちた。

嘘のように、二人ともピクリとも動かなくなってしまった。

「前よりはずっとずっと笑えるようになったんじゃないのかな」

烏熟がかすかに赤面した。

「変わったんだよ。私も、烏熟君も」

ベルにしては珍しく、烏熟が期待していたよりもずっと長い答えだった。

どっちが先か、二人ともくしゃつと、目じりのしわを寄せて笑って見せた。

和は昔のままだけどねと、ベルが短く付け加える。

「あいつが十年後もあのままつてのにコーヒー豆七キ口賭けるよ」

「コール。私はそのうち変わるに賭けるわ」

ベルの短答癖は結構直っているのかも知れない。

「どこの豆がいい？」

「ブラジル」

そういえば

彼女が持ってきたコーヒーはたった一杯分だけだった。

スウェーデンと日本の HALF である彼女はいつも「コーヒーはスウェーデンのガソリンなのよ」と言いながら水代わりに飲んでいるのに。

この色白で小柄なスウェーデン人がコーヒーを断つのはいつも、なんらか悩みを抱えているときだった。

表情には決して出さないが、長い付き合いだ。気づかないほうがおかしい。

昔、短かった髪を伸ばすかそのままにしておくべきか悩んでいた時も、同じくコーヒーを断っていた。

「それじゃ、編集頑張つてね。私は部屋に戻るから」

ベルが席から立ち上がった。

「待って」

持ち上がった踵が廊下から部屋に差し込む僅かな光に当たって長い影を垂らした。

「なにかあつたら、俺にも話してくれよな」

「……………」

烏熟はベルから視線を逸らし、もう一度モニターと向き合った。

コーヒーポットの湯気が冷たい画面に当たり、結露する。

隠し事するのは仙石一人で足りると、烏熟はベルに聞こえない位小さく、だけどからりとそれを告げた。

一歩、ベルの足が扉を跨いだ。

そして、そのまま立ち止まった。

「実はね」

ベルは振り向かなかった。

ただ、烏熟でもベル自身でもない誰かへ語りかけるような神妙な声で言の葉を並べる。

「この間、知っている人を見かけた気がして……。向こうは私だと気づいてないみたいだけど」

背もたれ越しに、烏熟が固まった。

「ううん。でもそんな訳ない。その人が日本にいる訳がない。だって、その人はもう……………」

「それって……………」

訪れた重苦しい静寂に押しつぶされないように、声を繋ぎとめようとするが、静寂が圧倒的に勝る。

「もしも……………彼が本当にそうならば、次あつた時私だと気づいて欲しくて、私を見つけて欲しくて」

足早に、ベルが部屋から去って行った。

たった一人残された烏熟が再びヘッドホンを被り、画面から照射される光に目を注いだ。

その残り香がスモーキーなコーヒーの香りと交じり合って、烏熟を

惑わせる。

烏熟を驚かせたのはベルの黒い髪留めに込められた祈りではない。

画面に映る男の、破れた服の中から露になった首の下に、見つめてしまったのだ。

それを拡大し、見極める。

男の胸に巣食うスズメバチの羽に、MORの三文字が、確かに刻まれていた。

「ベル姉……」

十二杯目

「何で烏熟君にあんなことまで言ったんだろう、私」

薄いスリッパ越しのリノリウム床の感触は決して心地よいものではなかったが、今のベルにそんな事はあまり重要じゃなかった。

コーヒーを断ってから既に二日が経過した。

カフェインが不足する所為で萎れた手足が重い。

壁にもたれることで何とかバランスを保っているが、今にも倒れそうに足元がおぼつかないままだ。

「紀伊……」

これからも深い意識の水面下に沈んだまま眠り続けるはずである。うその名は、亡霊のように突然現われた。

失った腕の代わりに鋼の兵器を据えて。

ベルの知っていた紀伊とはまるで違う人になって。

ベルの知っていた紀伊と同じ顔をして。

「あれは本当に紀伊だったのかな」

紀伊と同じところにスズメバチの刺青があった。

否定するには共通点がありすぎる。

だが、彼には紀伊と決定的に違う物が一つだけあった。

死神が取り付いたような肌寒さを感じさせるその瞳。

限りなく倦怠感をまとった眼窩の中で、光を失わずにいた。

もう少し近づいて見ないとわからない、ベルは自分にそう言い聞かせた。

彼が紀伊であって欲しいと願う心と、紀伊が彼でないことを願う心のどちらに主導権を渡すべきなのか、彼女自身にも判断がつかず。にこの二日間を過ごしてきたのだ。

?!

ちやうど尋問部屋の前を通り過ぎようとしたところだった。扉が少し開いていた。

「鉛沢君が逃げてから確かに閉めたはずなのに……」

鍵を管理するのはベルの仕事で、外にしか鍵が付いていない尋問部屋は、普段は閉めて置くことにしている。

ポケットから重たい鍵束を取り出しては尋問部屋の鍵を探り当てた。

「っ！」

落ちた大量の鍵が軽い摩擦音を立てて床を滑る。

扉の隙間から出てきた手に口と右手を封じられた。

ベルの手を掴んだ指には見覚えのある指輪がはめられていた。

そして。

瞳だ。あの男の瞳だ。

声もあげられず、あっという間に尋問部屋の中へ引きずりこまれた。

伸ばした男のつま先に、ドアが音もなくするりと閉じた。

廊下の方を向くように回され、首元に冷たい感触。

「見いつけた」

ベルの耳の後ろで男の指が這った。

「声をだすな。俺はフェミニストだ。女性を殺したくはない。わかったら二回頷け」

ベルの頭が小さく上下した。

「じゃあ、まずは……」

銃口から火薬の匂いと共に万国旗が飛び出した。

「会いたかったよ！ 姉貴！」

突然、目の前に回りこんで、ベルの首筋に両腕を回して飛びついた。

ベルは面食らった表情で立ちすくんでいる。

「まさか苗字が違うとは言え、実の姉に銃を向けるわけないでしょう？？」

死軍鶏がびよこびよここと床を跳ねる。

ベルの目が暗適応を始めて暫く。

「紀伊?!」

自分より頭二つほど大きい死軍鶏の、悪戯っぽい顔がそこにあった。確信が持てず、視線が酷く定まっていなかった。

何かの間違いではあるまいか。戸惑いを隠せなかった。

「この間はあるな形に終わったけど、今度こそ感動の再会が出来て俺は嬉しいよ」

畏怖にも似た驚きが、ベルを揺さぶった。

何者かが脈拍を早くするスイッチを押した様に、急激な血液の廻りが全身を圧倒する。

目眩が天井から降ってきた。

「本当に……紀伊なの?」

死軍鶏の顔に手を添え、その輪郭に触れる。

不思議……

ベルは、自分が弟に抱いた異質感の、本当の原因を知ることが出来た。

八年の歳月が過ぎているにも関わらず、あまり顔立ちに変化が見られない。

昔から少し顔が大人びていた所為で気がつかなかったが、こうして近づいて見るとはつきりわかる。

十八やそこらにしか見えない。

ベルと同じく、二十四歳であるべきなのに。

「なんで……」

「うん? どうしたの?」

そして、何よりも。

彼がこの場所に立って、ベルに抱きつくはずがないのだ。いや、そんなことは不可能だ(……………)

ベルは死軍鶏を手のひらで押し返した。

だって……

「植物状態だった(……………)のよ……」

目を開くことさえ出来ないはずなのだから。

眠りについてから二年間、ずっと起きるのを待っていた。

その弟が、今、笑っている。

どうしたらいいか、それを判断するために必要なものを、ベルは何一つ持ち合わせていない。

それどころか、まるで脳が爆ぜてしまったかのように、思考力の片鱗すら残されていない。

「……そうだね」

昨日見せていた表情とは全く異なる、柔らかさを内包した死軍鶏の顔がベルを見下ろす。

紫外線に当たらず、規則正しく栄養を摂取し、顔色一つ変えることなく　眠り続ける。

醒めるのをただただ待つしかない人の気も知れずに。

植物状態に陥った人々に老いは訪れないと、誰かが言っていた。

止まった時間の中に生きているからだとか、そんな悠長な理由を添えながら。

傍に立つ人はただ見ているしかないというのに。

言葉を交わすことも出来ず、代わりに不気味な沈黙だけが物語る事実を受け入れる以外、何も許されないとこのに。

「でも、姉貴は待つてくれたんだらう？」

ベルの肩が僅かに動いた。

まるでその反応を見て楽しんでるかのようには、死軍鶏こと紀伊は続ける。

「たったの二年だけ（……………）」

変わっていた。昨日見せた軽薄な横顔に。

「目が醒めた時には、誰もいなかった」

ベルの瞼が大きく開いた。

黒目がおぼろげに震えている。

嘲笑う様な死軍鶏の言動全てが、直視に絶えられず、両手で顔を

覆い隠した。

「最初は眠っていたこともわからなかった。だから、忽然と姉貴が消えたようにしか思えなかった。まるで最初からそばにいなかったように」

「……………」

「姉貴は俺を捨てたんだ」

何も言い返すことが出来ない自分自身に、ベルは嫌悪を覚えた。否定することは許されない。そうなのだから。

大袈裟に思わせぶりなため息を吐いた死軍鶏は何の前ぶりもなく、ベルの顎にその手を伸ばした。

「随分と女の子らしくなっちゃったね。髪も伸ばした様だし」

黒い髪留めへ、その手を滑るように運ぶ。

避けようとするが、壁に阻まれてしまった。

「昔の姉貴は俺なんかよりずっと強くて、かつこよかったのにな」

「ためらわずに家族連れの父親の頭をモシンナガンで撃ち抜いていたのにな」

「やめて！」

死軍鶏の顔が左を向いた。

しなつたベルの平手が斜めに上がっている。

肺の底からこみ上がったような荒い呼吸音がベルの気道からこぼれ出した。

「本当のことだろうか？ あの日だって、俺が眠りについた日だって、姉さんは刈り上げたかみにスコープの付いてない狙撃ライフルを添えていた」

すぐ怒鳴ったりもしなかったし、言葉遣いももっと男らしかったと、短く付け加える。

動じることなく、淡々と、その声はベルを責めたてる。

「姉さんは特別だった」

違つと、もうその姿は残っていないとベルは反論しようとするが、さも過呼吸になったみたいに嗚咽が止まらず、ままならない。

「でもこれじゃ、そこらへんに転がっている奴等と何も変わらないじゃないか！」

死軍鶏の袖から飛び出した何かが、髪留めを切断した。髪留めごと、結んだ髪まで切断した。

「だめ……………！」

アーミーナイフによって頭の輪郭がわかるほどの短さに整えられてしまった。

死軍鶏の手をすり抜けた金色の瀑布がその香りで部屋の闇を彩る。床の上で立て向きに広がる髪が、風圧で浮き上がった髪がベルの目からこぼれた大粒の涙滴に触れ、止まった。

「裏切り者」

ベルは下唇を噛んで忍び音を押し留めた。

塩気の効いた鉄の匂いが口の中に広がる。

変貌していた。ベルの知らないどこかで、ベルの知らない誰かに強く、あざとく、残酷になっていた。

虚無に服した紀伊を呼び覚まし、ここまで変えてしまったものを、ベルは心底憎いと感じた。

ベルを、紀伊に対して恐れを抱くようにさせたそれを。

ホーネット&バレル

スズメバチの毒だ。

人間としての姿が徐々に毒されて、やがて消えてしまう。

紀伊の胸に刻まれた、釘を打たれた様な痛みから、背信の傷口から、毒が流れ込んだのだ。

変わったんだよ。私も、烏熟君も

そして、紀伊も。

紀伊と言う存在は違う色に塗り替えてしまったのだ。

ベルが劇的な変化を体験したことを裏返したように、彼もまた、豹変した

「ただ俺はフェミニストだ」

死軍鶏の人差し指と親指の間に何かが挟まっていた。

小豆ほどの大きさを持つ、碧く光る丸いもの。

「償うチャンスをあげるよ」

細い触手がその小さな物体から伸びた。

いや、伸びたのではない。表面から糸のように剥がれたのだ。

死軍鶏はそれをベルの耳殻の中へそつと、小指を使って押し込んだ。耳の綿毛が逆立ち、背筋が棒を当てられたように伸びる。

「きや」

中耳へ潜り、鼓膜の一步手前まで迫ってくる。

やがてそれは生き物の如く、その細い足を耳の壁に突き立て、根を下ろした。

内側に侵入した痛み能耐え切れず悲鳴をあげようとするがそれより先に死軍鶏が口を塞いだ。

「しばらくすると慣れるさ。無理やり引っこ抜こうなんて考えないほうがいい」

白目を剥いて反抗を試みても、手を噛もうとしても、いかんせん、死軍鶏の左手が疼痛を感じる事はない。

全身を駆け巡る痙攣によって手足が激しく鞭打つ。

「痛み分けだよ」

自らの耳を指差しながら、囁いた。

「これで姉さんがどこにいるか、何をして何を話しているかが手に取るようにわかる」

空いた右手でネクタイピンの場所を直している死軍鶏は、まるで蛙に花火を詰め込んだ子供のような顔をしていた。

「双子って訳じゃないけど、兄弟なんだから、テレパシーくらいあってもいいと思うけどなあ」

その顔が少し苦みばしっていたことに気づいた。

そのままばかりと力なく膝をついたベルに会釈して、すっかり短くなった髪を撫で下ろした。

「誤解しないでくれよ。これも姉貴のためなんだぜ」

気を失おうとするベルの前に腰を下ろして、寂しげな顔を浮かべ

ながら。

また連絡するよと、言い残しては立ち上がり。

紀伊……………

振り向くことなく、煙のようにそのまま去ってしまった。

「俺は……………」

「植物状態だった……………んじゃない。いまも植物状態なんだ……………」よ

「ウソつき……………」

一人、薄明るさが漂う部屋で佐鶴は朝まで帰ってくるはずの颯一を待っていた。

「やっぱり先に肉を一ポンドもらって置くべきだったかも。爺が担保が大事だって良く言っていたのに」

素数を数えながら待つには、時間はあまりにも長すぎた。

2587まで到達してから、考えるのを止めてしまった。

妙な緊張感の所為で眠れない。

きっとあの秘密主義者の中年と話したからであると、自分にそう言い聞かせた。

本当に知りたい事は教えてくれない。

ベッドの上で足を組んで、枕をいつものぬいぐるみ代わりに抱きしめる佐鶴だった。

時計は既に七時を指している。

漫画を読んでいても、こんな時間まで起きていた事はいままでもありません。足りなかったらう。

「爺、私だらしのない女になってしまったわ」

ジャンプやたけのこの里がないと眠れないというのは本当のことだった。

だが、この状況下では、もしそれらが備えられているとしても眠れないに違いない。

本当は、ジャンプを読みながらお菓子をかじる佐鶴をたしなめた

執事が入れてくれる一杯の紅茶がここにないことの方が、佐鶴にとつては寂しかった。
亡くした影が、佐鶴の中で消えかけたろうそくの炎の様に淡く揺れた。

十三杯目

なだれ込む生ける脅威　生物かどうかすら判別が出来ないが
と長谷園の間に、影が一つ差し込んだ。

「あれは！」

その人影と黒い塊がぶつかると手前、羽音を立てて奴らは四方へ散
ってしまった。

警戒するかの様に送電線の上に戻り、乱入した者にその大きなレン
ズのような目を向ける。

ビビッドピンクとターコイズブルーのアロハシャツ。

海を背景に沖縄の花サンタンカが描かれている。

後ろには例の馬鹿でかいビデオカメラを背負って。

「お待たせ」

仙石敬文だった。

前方に振りかざした右手に、何か光るものがあった。

手の甲に見覚えのある指輪がはめられている。

「指輪の認証コードは使わないんじゃないのか？」

「どうせ一回切りだから別にいいだろう？」

そういつて、指輪を外し、胸ポケットの中に落とした。

「ホーネット&バレルの人工知能兵器のAIは自社の重要人物を発
見すると、そいつの安全を優先するようにプログラミングされてい
るからな」

AI？　ホーネット&バレルの重要人物？

「こんがらがって上手く考えることが出来ない。」

ホーネットの重要人物って、仙石たちの敵がホーネット&バレルな
んじゃないのか。

仙石に向けられた深緑のレンズが収束や拡大を繰り返して、目まぐる
しく姿を変える文字列がその中を流れる。

「こいつらは一体……」

「第四世代多機能小型偵察ユニット、通称饕餮だ。群れの殺傷力は偵察機のそれじゃねえけどよ」

仙石はそのまま動かずに話を続けた。

「動くんじゃねえぞ。こいつらがばらけると処置に困る」

「たったいま攻撃しないだろうと」

「俺が本当にホーネットの人間かどうか社員データと照合する間だけの話だ」

長谷園が嘆息を漏らす。

「時間稼ぎって訳か。この後どうするつもりだ？　へりでもない限り逃げきれねえぞ」

望みなし。

このまま食いちぎられ空白の美を誇る肉体に早代わりして天国へホップステップジャンプって訳か。

いや、違うな。

ホップジャンプフライの方が正しい。

心臓が有給を欲しがっている。

「まあ、二人ともそんなアラブ人の軽業師みたいな顔をすんな」

「待て、文脈だけ見るとすごいことになっちゃうな！　僕の顔が！　僕も長谷園もそんな顔をしていない。

見たことないから知ったような事言えないけど反論しないと僕の中の何かが終わってしまいそうで怖い。

「六問銭が必要になりそうだ」

「んなこたねえよ。あんなグロテスクな逝き方してたまるかつつ」

の。それに「

別に逃げなくても済むしな、と仙石。

肩に乗せたカメラの後部が機械音と共に開いた。

普通なら電子機器が姿をのぞかせるはずだが、中は空洞になっている。

?!

戦慄が走った。

箱のように開いたカメラの中に、それは蠢いていた。

蟲が、虚の中に数え切れないほどの蟲がいた。

小さな体を捻っては絡み合い、尾を伸ばして振るわせるその姿に、僕は惨殺された馬の死体を見た様な恐怖を覚えた。

亡骸に群がる蛆虫に類似する姿をしている。

皺の少ない黒い体には数本の赤い線が頭から尾の先まで　どっちが頭か区別がつかないが　伸びていて、幼虫の体が擦れる度に一緒に動いていた。

「気持ち悪っ……」

数時間前に食したマーボナスと配色が近似しているため、吐き気が止まらない。

もしも転がっている生首が同じ視野に入るなら、仙石と長谷園に朝ごはんのメニューを言葉通りカミングアウトする事になるだろう。

「初めて見る奴だ。烏熟の最新作か？　奴らしくもない酷いデザインだな。吐き気がする」

牧歌的な雰囲気漂うそばかす青年の顔が頭をよぎる。

こんなもの作るのか？！　ただの阿呆だと思っていたのに。

仙石は短く揃えた顎鬚を撫でて、不敵な笑みを浮かべる。おく

「会社辞めるときに退職金代わりに持ち出した奴だ。お陰で長らく追われているけどな」

「大丈夫なのか？　ホーネットからの追跡が厳しくなるんじゃない？」

「……それに、その蛆虫みたいなものでこいつらに太刀打ちできるのか？」

緊張を微塵も含んでいないその言葉に長谷園が顔を歪ませた。

たしかに、この蟲共になにかが可能とは到底思えない。

「関係ない。宣戦ならもうこの前に済んでいる。それにこいつはなになんだ？」

いぶかしげに長谷園が聞き返す。

僕はどうしていいかわからず、ずっと二人の会話から生存へつながる可能性を探るばかりだ。

「セクション・エイトの一部だ」

仙石は振り向くことなく、ただ静かにそう告げた。

それを聞くと長谷園は何も言わずにそのまま頷くだけだった。

重圧を帯びた空気のせいか、首から上が動かない。

「これからは全面戦だ。今までとは違う。奴らの本質に迫る以上、逃げも隠れもできねえさ」

蛆虫の先端から鋭い針が飛び出した。体の二倍はありそうな長さだ。

そして、胴体の中程からこれまた細長い二枚の羽が 体の一部が粘土のように伸びて 生えた。

揮発性の液体独特の匂いや骨の疼くような奇怪な音を発して、それらは成体へ変異した。

蟲の震えが高潮に至り、カメラ全体がガタガタと音を立てる。

おぞましさに全身の肌が鱗よろしく固まりついた。

「時間稼ぎはおしまいみたいだぜ」
動きがあった。

不審な動きを察知したのか、もしくは仙石が敵であると判断したのか、全ての饜饉が再び羽ばたいた。

死が、僕らに向けて飛来する。

飛び立ったと思いきや、そのまま隊列を成して急降下してくる。

反撃のチャンスは、この最短距離上には存在しない。

逃げることをそのままならない。

「ホーネット&バレル社謹製……」

なんの法則にも則らずにただ無秩序に這い回っていた蟲が、突然ピタリとも動かなくなった。

碁盤の目、首を揃えて、昆虫の複眼のように。

整然と並んでいる。

碁盤に隙間なく配列されたLEDの如く、カメラの後部に開いた穴を埋め尽くしていた。

「アンチ・シグナル対電脳兵器、ネジレバネ（マゴット）」

まだ言い終えない内に、精神衛生上好ましくない光景が目の前に広がった。

日本語では、七割程描写が不足するだろう。

カメラの中から一斉に吐き出された羽の付いた幼虫達は饕餮の群れ目掛けて飛翔し始めた。

いや、飛翔と言う言葉を用いるなんて、駄目だ。

この蟲は余りにも醜すぎる。

「あれは……」

黒い霧が饕餮と重なり 何も起きなかった。

正確に表現すると、すり抜けた。

衝突なんて起きなかった。そのまま幽霊のように通り過ぎてしまった。

饕餮の勢いは全くもって減じていないままだ。

このまま、全てがなくなってしまうのだ。

僕は五歩後ろに転がるタクシー運転手の首と同じ道をたどるのだ。この前のように祈る時間も、もう残されてはいない。

逃げないと。足が一人で後ろに下がろうとした。

「そこを動くんじゃねえ！ 流れ弾が飛ぶぜ！」

ただ、数多の赤い糸が空に見え

ただ、豪速の凶器が地面へ軌道修正しただけだった

結末は僕の考えとは全く異なったものだった。

マシンガンの掃射を思わせる轟音と共に、一つ残らず外にカーブした牙がアスファルトに深々と突き刺さっていた。

地面に食い込んだ牙を軸に振動する姿が、映画で見かける、壁に投げられた投擲ナイフを彷彿させる。

「どうということだ」

長谷園がおもむろに嫌悪感を表した

確かに、幾多の饗饗が弦楽器みたいに共鳴し合う姿はお世辞に面白いなどとは　もちろんご愛嬌でエキセントリックなどとも　口
に出来るはずもない。

「秘密さ」

仙石は、その髭面とは平行線を走って永久に交わらないであろう、
汗すら香りそうな爽やかな笑顔でそれを眺める。

不幸中の幸い、旅行鞆に入れたポットの内二つ、割れずに原型を
留めているものがあった。

いつも使っている一人用のブルーイタリヤとマイセンの二人用だ。
袋詰めの茶葉がクツシヨンの役割を果たしたお陰で傷一つ負って
いない。

缶入り、もしくは箱入りをポットの横に置いていたなら確実に二
つともアウトになっていたところだ。

シルバーニードルズの箱もなんとか無事だ。

アスファルトに座り込んだまま旅行鞆を広げて薄笑いを浮かべる
僕は不審人物に誤解されかねなかっただろう。

水溜りに映っているものが自分自身だと判るまでしばらくかかった
が、断言できる。

通りすがりの親子にその無様な姿を見られることを恐れた仙石た
ちが無理やり極討論放送のスタジオまで「搬送」してくれたお陰でな
んとかなくなったものの、あのままじゃ完全に職質もんだった。

昨夜出たときと大した変化は見られない……………つて当然か。

正面入り口の前に捨てられた吸殻を乱暴に踏みつけ、長谷園が鉄
製の扉を開く。

「あれほど廊下で吸うなと言ったはずだが」

仙石はまたもやどこ吹く風で、口笛を吹いている。

メロディーは……………五木ひろしの「契り」だ。

この前のCDは仙石の私物だったらしい。

……………何を聞こうが個人の自由なので触れずに置こう。

「ん？」

ソファの上で朝刊を顔に被っている男が一人。開いた右足が地面に垂れ下がっている。

あまり筋肉質ではない中性的な体型に不釣り合いなほど大きないびきをたてて情眠を貪ってやがる。

理由はわからないが、とりあえず鼻の穴をティースプーンで攪拌してやりたい。

「……………」

この感覚って、近頃経験している気がする。

確か中継車の中で。

タイミングが悪い、にやけ顔の男。

僕が知る限りでは、恐らく唯一無二の、「理由なく虐めなくなる奴」だ。

「人様は外で死にそうになっていたのになにクーラーつけて昼寝ぶっこいてんだコラア！」

そのまま長谷園のダッシュミドルが炸裂。

被撃部位はどっちかというトハイだけど。

「ひでぶ！」

奴の口から世紀末な悲鳴及びアミラーゼとペプシンが飛んだ。

「ああ。お帰り」

目元のダークサークルがなんとも気味の悪いこと。

どうせまた徹夜でギャルゲーなんかやっていたんだろう。根拠はないけど。

牧跡まきあと 烏熟くろじゆ。

別に嫌う理由はないけど、なんだかウザイ。

「わりい。天気が良くてつい……………」

謝っている顔もこれまたチェシヤ猫からウザさのエキスを抽出してガムシロップと一緒に煮詰めたような半笑いである。

そんな事を考えていると、佐鶴がまるでウサギの穴に落ちたアリスみたいだな。それで僕がティーポットに詰められるヤマネ、もし

くは芋虫か、それともお茶会の帽子屋つてところだろう。

ああ。我ながらなんて惨い扱いだ。

佐鶴と言えば……そうだ！ 手土産！

旅行鞆を開けると、たけのこの里が入った紙箱の角が丸くなっていた。

それに加えて、週間少年ジャンプの角が吸血鬼にトドメを刺す最後の杭の様に「の」と「こ」の間に刺さっている。

灰は灰へ、塵は塵へ

肉一ポンドの誓いは果たせそうにない。

「佐鶴は？」

「部屋から出てこないみたいよ」

まだ寝ているのか。それとも未だ「爺」のことが忘れられないのだろうか。

「まあ、気にするな。そのうち出てくるさ。俺は少し寝させてもらおう」

仙石がテーブルの上にあるプラスチック製のピッチャーから麦茶を注いで渡した。

長谷園と僕はそれを無言で飲み干して、それぞれさっきまで烏熟が寝ていたロングソファやパイプ椅子に深く腰掛けた。

緊張から開放されて、心地の良い疲労感が迫る。

このまま寝てしまうのも手だが、とりあえず佐鶴との一件をなんとかしないとけないといけないと気付いた。

でも、その前にこの大量の荷物をどうにかせねば。

「ベルがコーヒーを断った」とか、至極どうでもいい話題で仙石と長谷園を困った顔にさせている烏熟を後ろに、元・尋問部屋とかいう物々しい名前のついた部屋に戻ることにした。

鍵は開いている。

意味は特にないけど、手を手刀の形にして平らなドアノブの真上から叩きつけた。

案の定下に下がるだけで何も起きない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

部屋の中の様子がおかしいと言えはいいのだろうか。
髪の毛らしき物体が散乱している中、壁にもたれかかる形でベルが座っていた。

昨日よりもずっとずっと髪が短くなっている。
後ろの襟足がバツサリと斜めに切りそろえてある。
なんというか、中性的な感じだ。

「そっいえばベルはどこ」
後ろから長谷園の声がしたかと思うと、いつの間にか僕は胸倉をつかまれていた。

「てめえ！ ベルに何をした！！」

「違う！ 僕じゃない！」

肩越しに惨状を目撃して気が動転していた。

「落ち着け！ 和！」

烏熟が止めに入ったが、敵わず投げ飛ばされた。
全く、何の役にも立たない奴だ。

怪訝な表情の仙石が遠くからこっちを見ている。

何とかしてくれる気配は感じられない。

「うつ・・・・・・・・」

ベルが小さく唸り、床に倒れこんだ。

焦点の定まらない蒼い瞳が僕を見上げていた。「

「大丈夫か！」

手を放した長谷園が、そばに駆けつける。

その首に腕を回して支える長谷園の視野に僕はもういなかった。
これだから勘違いの激しい奴は・・・・・・・・

それにしても、ここで一体なにがあったんだろう。

床一面に広がる金糸が昼の光で眩しい。

「髪、どうしたんだ」

ボブカットだった髪は更に短く ショートヘアに なって
いた。

そのおとなしい顔立ちからは考えられない様なものが、耳の後ろに見える。

刺青だ。

腰のくびれた胴体に二枚の羽を生やした、スズメバチだ。

針が首筋まで伸びていて、今にもか細い頸椎の内側へ致死の毒を送り込みそうだ。

髪に紛れた二本の触角がさも動いているかのように思える。

「ちよつと、ねえ……」

ベルが目を伏せて下を向く。

寝起きである所為か、酷く舌足らずな発音だ。

酷く血の気の引いた顔で健気を装うが表情筋が冷え固まっているため、えくぼはできたものの、笑顔もどきしか作れていない。

「ベル姉……」

座り込んだ烏熟が錯雑な目でベルを見つめる。

「何があつたのか教えてくれないか」

長谷園の声はどこか切実さを感じさせるところがあつた。

髪が短くなって、この部屋に転がっていただけなのに。

なぜここまで煮詰まつた空気が漂うのか、僕にはわからない。

ヒステリーで発作的に髪をそぎ落としただけじゃないのか？

それとも長さを整えようとして手が滑つたのでは。

よくあることだ。若気の至り　ベルの正確な年齢なんて知つた

こつちやないが　と言えなくもない。

ただ、長谷園や烏熟の深刻な面構えの前でそんな疑問を投げかけるのは極討放送のデリケートな事情に触れてしまう気がするのよ
しておこう。

「このあほんだから。そのぐらい察してやれなくてどうする」

騒ぎをみかねた仙石が例の酷くいい加減な口調で罵声を浴びせる。

「イメチェンだよ！　イメチェン！」。

「……」

一同は啞然だ。当人のベルさえ吹っ切れた表情をしている。

佐鶴風に言うと、「時よ止まれ」ってどこか。

まさか仙石の口からこの言葉が聞けるとは。

「大袈裟に騒ぎやがって。たまには髪型とか服装とか触れ幅マツクスに変えてみたいと思うのが乙女心ってもんだろうが。そこは軽く似合うねえって言ってやるのがスマートな対応だと気付かないのか？」

「でも、気絶」

「却下。これ以上ベルに恥ずかしい思いをさせる気なのか？」

「いや、そもそもこの部屋」

「反論は認めん。とっとと部屋に帰れ」

「うっ……」

長谷園にも苦手なものはあるらしい。

というか、このおっさんこんなに饒舌だったっけな。

「本当……なのか？」

長谷園が恐る恐るベルと向き合う

「心配させてごめんね。ちょっと気分を変えたかったただけだから。今度はちゃんと笑顔になっていた。

「ベル姉の言う事は本当だ。昨夜、三人が出かけている間も違う髪型にしていた。今までこんなこと一度もなかったから、和哉が過敏反応するのもわかるけど」

いつの間にか箒を持って床を掃いている烏熟の証言に、長谷園も納得せざるを得なくなったらしく、含みのある顔をしてみせた。

「ならいいが」

今更だけど、なんか僕だけ完全に部外者扱いだ。

何か発言しないと自分の存在がこのまま消え去りそうな危機感すら覚える。

ただでさえ影が薄いというのに。

「ねえ、和」

「どうした？」

ベルが妙に紅潮している。

ああ、なるほど。そういうことか。

「私、もう一人で立てるよ」

「違う！ これは」

長谷園が片膝を床につけたまま最大速度で後ろに跳んだ。

佐鶴がもしこの場所にいるなら間違いなく「膝だけでなんて跳躍力だ」と言うに違いない。

チークでも塗ったのか、頬がベルに負けず劣らずの見事な深紅色だ。

いつか長谷園が困る場面を見て見たいと願っていたが、今は少し違う気がする。

これじゃ奴の美味しいところ取りにしかならない。

ちよっとだけ悔しい。

話は変わるが、僕にはいけない所がいくつかあって

「ベルさん、とても似合っていてお綺麗ですよ」

そのうち一つが、沈黙に耐えられないとこさ。

こんな見え見えなお世辞だって普通に言っちゃうもんな。

まあ、あの髪は実のところかなりベルにフィットしている。

いわゆるボーイツシュって奴だ。

「ありがとう。似合うかどうか自分ではよく判らなかったから・・・

・・・」

素直でよろしい。

につこりと。秋の麦穂のようなベルの笑顔が。

そして、背後から秋雨の様な寒気が。

長谷園だった。

どうやら今の台詞があまり御気に召さなかったらしい、

挨拶に困るぜと言わんばかりに、その形の良い眉を歪ませている。

文句あんのかよ。

「そ、そうだな。ベルは至って堅牢、いや健康だな。それじゃ俺は部屋に戻るとしよう・・・」

「大丈夫か？ 赤面しちゃって　ぐはっ！」

効果は抜群だ。

長谷園に動揺と言う行為が出来るとは考えもしなかったな。

どんな事象に対しても冷静に逆切れする様に、条件反射を刷り込まれているとばかり思っていたのに。

さあ帰った帰ったと、仙石が僕らを追い出したところでやっと騒ぎが収まり、ノックダウンした烏熟を部屋に放置したまま、僕と長谷園は追い出された。

僕に当てられた部屋の筈なのに。

気分が乗らないので廊下に立てかけたままの旅行鞆を入り口付近のソファまで運び、少し休むことにした。

人の首が吹き飛ぶ場面を見せられた直後なので、さすがにすぐ紅茶を淹れる訳にはいかない。

血に見えてしまうのだ。

人は全くもって脆い生き物だ。

頭部をもぎ取られると動けなくなってしまう。

昆虫の中には頭をなくしてもしばらく生きられる奴がいると言っている。

「気分はどうだ？」

のそのそとやってきた仙石が隣に腰をかける。

暑苦しいが、ソファから追い出す元気も権利もポケットの中にないので、どうにもならない。

「生首と蛆虫の大群とか見ている人に対して気分がどうか聞くのは二度手間かと」

「尖った返事してくれな。生首はともかく、蛆虫はそこまで気分を害するものではないと思うぞ。カース・マルツウとか」

「それ違法食品!!」

よりによってカース・マルツウを選ぶとは。

カース・マルツウは、ペコリーノというチーズにチーズバエの幼虫、つまりウジを住ませて発酵させるイタリア・サルデーニャの名物チーズだ。

大抵の場合、半透明の幼虫をチーズから剥がさずに食べるらしいが、幼虫は触れられる等の刺激を受けると最大十五センチメートルほど跳躍するので、眼鏡やゴーグルで目を保護したほうがいい。

こんなにグロテスクな食べ物なのにも関わらず、サルデーニャの羊飼いに贈るには最高のチーズだとか。

ただし、健康に害を及ぼす恐れがあるため取引が法律で禁じられているので、闇市場でしか手に入らないと言われている。

随分とマニアックな解説になってしまったな。

しかしながら酷いチヨイスミスだ。

蛆虫を公共の利益のために使う例ならば、壊死した細胞を食べさせて患部を綺麗にするマゴットセラピーなんかもあるのに、よりによって違法食品なんかを例に挙げやがって。

夏場の食欲低下に追い討ちをかける気が。

「なんだ。知っていたのか。説明する手間が省けたからいいけど」残念そうに頭を掻くと、背もたれに両肘を乗せ、脚を交差させた。その所為で僕は窮屈な姿勢を強いられる。

マイナーなチーズは知っていても公共の幸福追求は知らないらしい。

このソファが僕の所有物じゃないことが悔しいばかりだ。

互いに一言も話さずに沈黙がそばを通り過ぎた。

こいつに限って余り絡んで欲しくない。

なんというか、心中がつかめない。

何を考えているのか、何をしようとするのか全くわからないのだ。

この前だって、発信機をつけた時だって、自然な状況の中で不自然なことをやり遂げている。

この男は警戒すべきだと、僕の中の何かがそう告げる。

全てを隠蔽し、全てを探るように、その目は宙を見つめる。

仙石が視野にいる限り、安らぎは訪れないだろう。

そう思いついてからは速かった。

ソファから体を起こして、旅行鞆を引っ張って。

乾いた音を立てる靴底に身を乗せて尋問部屋の向かい側へ。

認めたくないが、話し相手が欲しい。

僕だって人の子だ。疲れたときには一人で休みたい場合もあれば、矛盾しているようだけど誰かと話したいときだってある。

ただ、長い一人暮らしの所為で今まで後者を選んだ時が圧倒的に少なかっただけだ。

仙石や長谷園や烏熟やベル以外なら、誰とでも楽しく話せる気がする。

だから、別にこいつじゃなくてもいいのだ。

別にこいつだから一緒にいたいなど、考えていない。

近似値だ。これも。

十三杯目 おかわり

「開けてくれ。中で少し休みたい」

軽くワールドスタンダードを二回。

最近、扉を開けた瞬間とんでもない目に遭うことがしばしばあるけど、何かのジレンマだろうか。

そんな考えを吹き飛ばすかの様に、扉がこっちに勢い良く開いた。

「遅い」

仁王立ち佐鶴の零距离歓迎。

「今何時だと思っっているのよ」

機嫌は、若干傾き気味みたいだ。

確かに十二時半は朝とは言えないが。

「わりい。寝坊しちまったんだ」

密会の約束時間を破ったみたいな謝り方だが、そんな甘いものじゃない。

遅刻の原因が非人道的兵器の襲撃だと知ったら、佐鶴はどんな顔をするんだろうな。

「あれ？ どうしたの、この傷」

思いがけないことが起きた。

佐鶴の手が不意に僕の頬に触れた。

「あっ……」

さするその手に、乾いた血の軌跡がボロボロと崩れ落ちる感触がはつきりとわかる。

知らない間に切り傷がついていた。

そういえば帰ってきてから鏡すら見ていない。

シャワーを浴びたはずだが、落ちてないらしい。

意識していなかった所為か、はたまた傷が余り深くなかったお陰か、痛みは感じなかったが、こうして自分で認識できるとチクチクと疼いてくるのが生傷の不思議なところである。

痛みを感じるにつれて顔が熱くなっていく。

きつと赤くなっているんだろ。変に誤解されなければいいが。それより中に入れてくれないか。少し休みたい」

摩擦係数が存在しないと云われても信じてしまいそうな、傷口を撫でる滑らかな指先を後ろにして部屋に上がりこんだ。

「ちよつとベッド借りるぞ」

ロープ代わりに使ったシーツはベッドの上に適当にかけてあった。表裏が逆になっているのあたりにこいつのギャグセンスが伺える。家事をしたことがないことを持ちネタにしているのだろうか。

僕は四墨をきちんと揃えて　もちろん表にただして　腰をおろした。

「やれやれ・・・」

さすがに二日も立て続けにあんな思いをさせられては心身ともに荒廃してしまふ。

どんな因果が応報したのか、僕の頭には納まりきれないスケールの力に執拗につけまわされている。

僕だけじゃない。この少女もまた、不可抗力に欺かれた一人なのだ。

仙石はそれをただ「すごいもの」だといっただけで何も教えてくれないが、あの奥歯はとても重要なものなのだろう。

ホーネット&バレルとか言う巨大軍需会社が法治国家での殺人すら厭わずにそれを奪おうとしているのだから。

やはりここはひとまず極討放送の保護下に潜って隠れるしかないのかもしれない。

「ねえ、ちよつと。まさか忘れたんじゃないでしょうね」

「持って来ているから、そんなに急かさなくてくれ。はしたない」
膝を抱えたまま爪先で器用にバランスを取っている。

「まあ、はしたないだなんて。品のある素敵ない草ね」

はしたないと言ったらはしたないんだ。駄々を捏ねる年齢はもう過ぎていくはずだ。

しかしながら、潰れたお菓子の箱をそのまま渡すのは何だか気が引ける。

先にジャンプを渡して時間を稼いで、他の容器にお菓子を詰め替えよう。

たしか空の紅茶缶が一つだけ残っているはずだ。

「ほれ、ジャンプだ。明日発売の奴は自分で買いな」

子供を亡くした雌熊の如き乱暴な手つきで僕の手からジャンプを奪い取る。

今週の表紙であるルフィーがしわくちやになっている。

まったく。つくづく下流民体質な奴だ。教育の不在を感じる。

「たけのこの里の方は少し時間をもらうよ」

「三十秒ね」

「やらねえぞ」

不満そうに細めた目が僕を見上げる。

「アラブ人の軽業師みたいな顔しているくせに生意気ね」

「待て、どこで覚えた。その国籍不明の慣用句。僕の鼻梁をよく見る。肌の色もだ」

今の会話を活字化するなら、僕の顔はすごいことになってしまっただろうな！

そして、人の事をとやかく言う前に鏡を見る。お前の顔を。

「・・・・・・・・・・・・・・・・可愛じゃないか。」

「なに？ そんなにジロジロと」

ああ、今すぐ鮮やかに舌を噛み切りたい。

「えっと、どこにあるんだっけな」

顔を背けて一心不乱に探索にとりかかる

フォシヨンの缶がどこかにあるはず。

確かこの前飲み干したハピネスの空き缶がこの辺に・・・・・・・・

「あった！」

フォシヨンの色使いは実に巧みで、基本トーンであるビビットピンクとブラック、そしてホワイトの組み合わせは僕のお気に入りだ。

紅茶好きにとっては基本装備と言われるフォションだが、特に日本向けのラインナップが充実していることで有名だ。

フリーバーティーの種類も豊富で、アップルティーなんかその代表格と言える。

ストレートティーも中々のバリエーションで、中でも特に黒い紅茶缶はプレステージ缶と言って、最高級の茶葉を使用している。

ちなみに、今手元にはアッサムのプレステージ缶がある。

もったいないからまだ飲んでいないけど。

話を戻すが、僕が見つけたのはフォションのハピネスって言うお祝い用の紅茶缶だ。

孤児院を出るときにティーフォートゥーと一緒にジュペリ先生から授かったもので、中々美味であった気がする。

ピンクの缶に金色の花火やCELEBRATEの文字が輝いている。

壊滅した紙箱なんかよりはこっちのほうがずっと女性向けと言えるかもしれない。

そんな事を考えている内に三十秒経ってしまいそうだったので、ほのかな茶葉の香りが未だ残留している紅茶缶の中にたけのこの里の中身をぶち込んだ。

「かわいらしい缶ね。意外と少女趣味だったのかしら」

「別にそういうわけじゃないけどよ」

先入観って言うんだ。そういうのを。

「なら恋人かしら。缶のセンスに女の影がちらほらと」

僕の座っているベッドの上につつぶせになり、ジャンプの扉を開く。

今週の表紙はワンピースだ。

「そういう関係の女性はございませんが」

佐鶴はそれを聞くと気だるそうにため息を一つ。

「やっぱり。そんな辛薄そうな身なりじゃ、ねえ」

「ユニクロのどこが悪い！」

日本を代表する庶民向けアパレルブランドを馬鹿にするんじゃない。
え。

というか下流民体質の金持ちに言われたくない。

「でも、そのチョイスだけは褒めてあげるわ。わたし、フォションは結構好きな銘柄なのよ」

せわしなくたけのこの里を口に運びつつ、ジャンプに目を向けつつ会話。

女性は一度に複数のことをこなせるといって都市伝説はどうやら本当のことらしい。

「お前、紅茶の銘柄わかるのか？」

正直驚いた。こいつに紅茶がわかるとは考えていなかった。

「自分の手では淹れない主義だけどね。ちなみに好きな銘柄はティーセンター・オブ・ストックホルムよ」

「ティーセンター・オブ・ストックホルム?!」

ティーセンター・オブ・ストックホルムとは、名前から察しがつくとおり、スウェーデンの代表的な紅茶メーカーだ。

ハロツズやフォートナム&メイソン、そしてフォションなどの有名ブランドの最高顧問も勤める、「茶の王」の二つ名を持つトップブレンダー、バーノン・モリス。僕の最も尊敬する人物の一人だ。が作り出した「ファイブ・ゴールドデン・ブレンド」を始めとする様々なブレンドは、スウェーデン王室やノーベル賞授賞式前のティータイムに使われることで有名だ。

それだけにとどまらず、十年の歳月を費やして、世界初となる緑茶をベースにしたフレーバーティー「皇帝的四喜茶」を作り出すなど、茶の歴史に多大なる貢献をしている。

もちろん、全てのブレンドは無農薬無添加だ。

日本国内で販売される紅茶の大多数はイギリスもしくはドイツなどでブレンドされたものであるため、知っている人は結構な通であることが多い。

「爺が五つ全てそろえていたけど、一番好きなものはセーデルブレ

ンドね」

「ああ。ミステイクブレンドか」

スリランカ紅茶商の家計で、イギリス王室のティーブレンダーであったバーノンが作り出した中で最も有名なブレンドだ。

一九七九年、ファイブ・ゴールドン・ブレンドを編み出していた最中、テイステイング台の上に数種類の高級茶を零してしまったとき偶然作り出されたとされるため、ミステイクブレンドと言う名で売り出し始めている。

まあ、僕から言わせて見るとバーノンのマーケティングの一環だ
としか思えないけど。

そんな都合よくこんな絶品が生まれるわけないのだ。作り話と見て相違ないだろう。

初めて缶の蓋を開けたとき、茶葉の隙間から現われたオレンジピールやジャックフルーツ、ローズフラワーを視認、芳香を吸い込み、妙なときめきを覚えたんだっけな。

エッジの効いた花やフルーツの華やかな香りに、ソフトで簡潔な口当たりがなんともいえない。

安物のフレーバーティー、特に花を混ぜたものは化粧品を飲んで
いるような気分させられるが、そんなものとは根本的に違うふう
よかな味わいを持っているのだ。

まさに完璧なフレーバーティーと言えるだろう。

ただ、僕は典型的なイングリッシュブレックファーストのティー
センターブレンドの方を気に入っている。

セーデルブレンドとは対照的に純粋な紅茶の味を楽しめるところ
に意義があるのだろう。

バーノンが生まれ故郷スリランカを思い出しながら作ったという
逸話も、なんとなくリアリティを感じる。

ただ紅茶を飲むという行為に、これ以上相応しいものはないだろ
う。

これ以上の紅茶も、これ以下の紅茶も必要ない……のか

もしれない。

もしもこの世で粹ってという言葉を用いられる数が決められているならば、僕はためらわず真つ先に、この紅茶を修飾するために用いるだろう。

「へえ、結構詳しいじゃない」

細い指が跳ねるようにジャンプの上を舞う。

その度にヒラヒラとページが一枚ずつめくれる。

そして、ずっと一定のペースを保って瞳が右に左にそれを追う。

ジャンプ読み慣れているな。こやつ。

「嗜む程度だけだな」

ベッドは中々バネの強いもので、軽く身を投げたくらいではびくともせず、逆に押し返してくる。

ああ。極楽極楽。

先ほどのスプラッターシーンのインパクトも薄れてきた訳だし、なんだか紅茶が欲しくなってきた。

人とは本当に気まぐれな生き物である。

「お前こそ中々詳しいじゃないか。下流民体質の癖に」

こんな見下したような言葉も何のためらいもなくさらつと言えるようになった。

なぜだろう。ここ二日の修羅場が心の水面に何かしら多大な悪影響を及ぼしている事はわかるが。

そういえば誰かが言ってたな。厄日は二度来るって

「そうね。爺がいるいろと揃えていたものだから」

ジャンプも佐鶴も、突然動かなくなってしまった。

僕は、完全に忘れていた。

「でも、もう……」

揃えた前髪を下に垂らし、床にあぐらをかく。

両肩で自分を抱え込むように前から回した。

「ごめん。辛かっただろうに……」

彼女は見失ったのだ。

もうと取り戻せないほど遠くまで。

僕は彼女から目を離して天井を見つめた。

そうしないと、この世で一番惨めなものを見てしまいそうな気がして。

天井の様子は、雲とは違い、動いたりしない。

お陰で、どれほどの時間がこの沈黙の中に存在していたか、僕には意識できなかつた。

「爺はね」

死んだように黙っているのは僕だつた。

答えない僕に構うことなく、彼女は言葉を重ねる。

「あまり笑わない人だつたわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「これから話すのは私の勝手な話だから聞くも聞かないもあなたの自由よ」と、彼女の声は確かに語っている。

聞かないことにする。

「厳しい上、小言は多め。なんでも出来る人だから反論も受け付けない」

彼女が今描く執事はどんな目をしていたのだろうか。

やっぱり片眼鏡をかけた眉毛まで白い、細い目をした老人なのだろうか。

「私なんかと違って、ケーキを焼くときグラニュー糖と片栗粉を間違えないし、夜遅く寝たつて、朝寝坊する人でもないわ。そしてなにより、美味しい紅茶を淹れてくれたわ。完璧な執事だつた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「幼い頃に父と母を亡くした私の面倒を一から百まで・・・・・・・・・・天井の様子が、少しだけ動いたように思えた。

目頭が少し熱い。最近疲れているのだろうか。

「最近は何を壊したから庭の手入れだけは人を雇うようにと、私がしつこく言うまで聞かなかつた。結局、庭は汚くなつたけどね。雇用了庭師が事故でなくなつたから」

僕は昨日見た生活感のない庭を思い出した。

中に見えていたハーブの鉢以外、花はなかった。

「正直、私はあなた、颯一を恨んでいるの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「少しだけ早く、一分だけ早く来ていれば。爺は助かったかも知れないのに」

佐鶴は嘘をついていた。うらみなど、その声からは感じられない。ただ、淡々と、嘲笑交じりに自分に言い聞かせている。

何も出来なかった。

脱力と虚無を内包した、その言葉は彼女自身に向けられている。

「彼がいないと、私は何者でもないのよ・・・・・・・・」

涙声は、もうそこになかった。

「だけど、このままじゃいけない。」

「ねえ、知ってる？ 認識してないものは存在しないことになるんだって」

突然話が逸れたことにより、僕は固まってしまった。

「何が言いたい」

「爺がいる事で、私は生きていた。爺が認識する私が私なの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

たしかに、人もやはり、誰かに認識されることによって生きていく。誰にも認識されないのなら、その人は「そこにいない」ことになるのだ。

だが、認識されようがされまいが、その人は間違いなくそこにいる。

「でも、お前が自分を認識すれば、そこにいる事を確かめればいいんじゃないのか」

いや、言葉のあやだ。

彼女はさつきからずっと、それを確かめようとしていた。

両手でその小さな体を抱えて、まるで自分が存在していることを確認しているかのように。

「私には・・・・・・・・わからない。今ここで呼吸をしているのかす

ら、自分が言葉を発しているのかすら」

「じゃあ、いまお前と会話している僕は一体なんだというんだ！」

「口に手を近づけると確かに空気が出入りしている。でも、もしかしたらそれはただ風が吹いているのかもかもしれない。いまこうして言葉を発しているけど、それもただの想像かもしれない」

「馬鹿なこと」

「あなたもそうよ。あなたがもし想像上のもので実体を持たないなら？ 自分がそこにいるとどうやって証明するつもり？」

「一切を疑うべし」、方法的懐疑だっけ。自分を含めた世界全体を虚偽だとしても、その意識作用が確かなものならば、自分はそこに存在していると考える命題だ。

コギト命題とも言われる。

だが、デカルトが内部の発見へそれを繋げたこととは違う問題がここにある。

「彼だけが！ 確かなリアリティを持っていた！ 彼に認識されることで、私はそこにいた！」

矛盾している。執事のリアリティを感じ取る自分は、懐疑の対象に入れていない。

こいつ、小難しいことを話しているけど、結論はこうだ。

佐鶴の中のアイデンティティの半分ほどは、その執事に依存している。

その執事がいなくなったことによって、崩壊へ向っているのかも
しれない。

「私は、だれなの？」

僕は誰ですか？

いつしか、ジュペリに投げかけた問いだ。

僕もこんな感じに中学生の頃、柄にもなく哲学書を読みながら稚
気溢れる疑問をぶつけていた。

思い出したら急に恥ずかしくなってしまったが。

嫌な禅問答だ。人にはわかりっこない。

「そんなこと、僕が知るわけないだろう」

答えは、まだ見つかっていない。

だって、ジユペリの話すとおりならば、その答えは……
「もういいわ。出て行って頂戴」

きっぱりと言い切ると、ベッドに膝から上だけ横になった僕に近づき、見下ろす。

蛍光灯の光を遮った佐鶴の影が僕の上によこだわる。

「あなたがそこにいると私は泣けないじゃないの」

勝手な奴だ。女性はみんなこうなのだろうか。

自分の話が終わったとたん、出て行けとは。

悪いけど、僕には帰る場所がない。

部屋は既に占拠されている。

「出て行って欲しいって言葉が聞こえなかったかしら。それとも語彙不足なのかしら」

この少女に感傷を抱いているわけではない。

お気の毒だとか、見ていられないとか、そんな事を考えるほど僕は情の豊かな人間ではない。

ただ、僕ははっきりさせたい。

今ここで生きるこの少女の存在を。

「僕はこれから勝手にしゃべる。部屋から出るつもりはない。聞くか聞かないかはお前が決める」

「どういっつもり？」

上半身を起こして真っ直ぐ向き合う。

釣り上がり気味の尻尻が突き刺さる気がする。

どうしてこんなことになってしまったのかわからないけど、こうなったらやけど。

こいつがこれ以上馬鹿なことを言い出す前に止めてみせる。

「昔、僕は孤児院に住んでいた」

今度ははっきりと、彼女の目を見て。

「孤児院……」

丁度いい張り手だったのだろうか。

佐鶴の明らかな拒絶を和らげるには。

「そして僕にも……同じように、紅茶を淹れてくれる人がいた」

そう、僕にとつてはいい依存対象だったさ。

友達の出来ない僕にとつて、唯一。

言葉を交わしていたプロテスタントの宣教師。

時が経つにつれ、周り与人並みのコミュニケーションをとる事は出来るようになったが、心の深いところに踏み込んだり、踏み込まれることなどなかった。

ただ一人、ジュペリ先生を除いては。

「お前はどうかわからないけど、僕と心から関係を持っていたのはその人しかいなかった」

わからない。と言うのは嘘だ。

佐鶴もまた、同じなのだ。

どこか寂しげな香りも。孤児院の頃の僕と重なる。

人のおいがしない、といえはいいのだろうか。

たった一人にしか、内面を干渉されていない。

そんな僕と同じ種類の間人である、内側の声がそう語っている。ただの勘違いなどではない。

余りの似つかわしさに同族嫌悪すら覚える。

たった一人としか交わりを持たなかった孤独な、弱い人種だ。

「ジュペリ。リンダン・F・ジュペリ、イギリス出身の宣教師。や

せこけた六十代のおばあさんだ。僕はジュペリ先生と呼んでいる」

「ツェペリ先生？　もしかして彼、いや、彼女は座ったまま空が飛べるのかしら。」

「いや、波紋は教えてもらってないけどな」

大真面目な話しているのにすげえピンポイントにジョジョネタを絡ませるんじゃないか。

「十歳相手に妙に小難しい話をするのが好きで、いちいちホームド

ラムがかった冗句ジョークと紅茶の蘊蓄うんちくを垂れ流すところとか正直しんどい。手編みのセータとかミトンを無理やり着させようとすし。人を着せ替え人形扱いしやがって……」

うん、やっぱり。佐鶴が軽く引いている。ふとした拍子に積年の何かが赤裸々にはじけ出してしまったようだ。

「そ、そうなの……」

「紅茶だけは、少なくとも紅茶だけは。確かに美味しかったけどな。僕が淹れるより数倍は人を幸せにする。」

茶葉の種類なんて関係なく、蒸らす時間を計らなくとも、いつも同じ気持ち味わえた。

物理的には説明がつかない。秘密の香り。

何を飲むかではなく、誰と飲むか。

彼女はいつもそう言っていた。

嗅覚と視覚、そして味覚をもって味わう紅茶が導き出すもう一つの感覚。

安心感。

自分はいま紅茶を啜っている。

その糸口を手繰り寄せて、存在を確かめる。

たった一杯の紅茶が呼び覚ます、三分間の安堵。

朱色の温もりに込められた心を汲み取って、吟味する。

目の前に置かれたティーカップは、僕のために、いまこの場所に存在している。

だから、僕は存在している。飴沢颯一はそこにいると。

そう確信するのだ。

ジュペリの愛情は、それだけで伝わってくる。

「だから……」

僕は馬鹿だ。

馬鹿だと思って聞いてくれればいい。

「ちよっと紅茶、飲まないか？」

「………会話が噛みあってないわ」

思いつきと怠情で生きている僕だ。

なんとでも言ってくれ。

どんなに言ってもあまり間違っていないだろうから。

「唐突で悪いけど、紅茶が飲みたくなつた。僕は一日三回、決められた時間に空が見える窓辺で紅茶を飲まないと死んでしまう病気になるんだ。悪いが、部屋から追い出すのはそれからにしてくれ」

「勝手に死んでしまえば？ 私には関係ないもの」

ああ。そう来たか。

こうなつたら強行手段だ。

「それっ！」

「だめえ！ ジャンプは返してっ！」

ジャンプを握つた右手を高々と振り掲げた。

奴が必死に飛び跳ねるも、身長差は恐らく二十センチ近くある。ジャンプしたつて届くわけがない。

ほれほれ。ローキックなんかしたつて無駄じゃ。

「あなた一人で飲めばいいわ。私にこれ以上関わらないで」

そうは行かない。

僕は鞆から、生き残つた二つのティーポットの内、一人用のものを取り出した。

蒼い花模様が印象的なオランダ製の焼き物だ。

恐らく、一番使用頻度の高いものであるう。

蓋の頂点についている蓮の飾りがなんとも美しい。

それを両手で支えるように目の高さまで持ち上げる。

もちろんジャンプは脇に挟んで。

そして、佐鶴から十歩ほど離れた場所に立ち。

今までご苦労さん

床に落とす。

重力は平等だ。

何も無いところで物を手から離すと、地に落ちる。

自由落下の法則に則って、ポットは真っ直ぐ落ちる。

「きゃっ！」

思い出がまた一つ、淡く散った。

「ああ。何てことだ。手がいつももの三割り増し大きく滑ってしまった。一人用のポットはこれしかなかったのに。仕方あるまい。余り気は進まないが、二人用のポットを使うしか。だが、生憎僕は一杯しか飲まないつもりだったのに。どうしたらいい」

「……我ながら酷い棒読みだ。」

こんな芝居がかかった台詞を吐くと自己嫌悪に陥ってしまいそうだが、なんとか正気を装って頑張っで見ろ。

わかつてはいたが、佐鶴がカース・マルツウを初めて見た日本人の目をしている。

どうやら僕に対する評価は蛆虫入りチーズと同格かそれ以下のものらしい。

しかし、かまわず僕は続ける。

「そうだ。なら、こうしよう。そのあなた、よかつたら紅茶一杯いかがですか？ 一人で飲むには多いが、二人で飲めばちよつと足りないくらいで済むのです。足りない二割りは楽しいお喋りでなんとか埋め合わせましょう」

両腕を一杯に広げて、ゆっくり目を瞑って自己陶醉のポーズ。

左足だけ爪先で立っている。

「埋め合わせましょう」がこだまして寂寞の向こう側へ通り抜けて行ったのは気のせいだ。

もちろん気分は劇団四季だ。おなじみ、集客力抜群の。

劇団四季の皆様、ごめんなさい。あとでチケット買うから許してください。

ただ、その前に佐鶴の顰蹙ひそこまを買ってしまったようだけど。

糸目を開いて佐鶴の動向をうかがうが、しかめっ面で今にも「やれやれだわ」と言いそうなところを除けばおおよそ好評のようである。

よし。そこそこの興行収入が期待できそうだ。

しかし、佐鶴のアイデンティティに関して論じていたらいつの間にか僕のアイデンティティが薄れていく気がするが、なぜだろうか。僕ってこんな性格だっけ。

「ふーん」

佐鶴の表情が小賢しい不敵な笑みに変わった。

想像以上の冷たい笑顔にゾツとした。

完全に僕を手玉にとっていやがる。

いや、僕が勝手に道化を演じただけか。

「やさしいのね。少し愛情が重すぎるけど」

「そうだ。僕はやさしい。愛だつて重い」

何度でも言うぞ。照れてなんかいない。

否定したら照れているみたいだから即肯定する。

「否定しないところがますます優しいわ」

顔が全否定していることに気づかれた様だ。

年下の小娘に言われたって嬉かないね。

しかし、嫌な天気だ。立っているだけで冷汗がびっしりと。

顔に血が上る。

「別にお前にそんな事言われなくたって」

「なーんて言われると嬉しい？ 顔が茜色よ」

カッチーン。

僕がもしアルパカだったら間違いなく唾を吐いただろう。

「天気の時為だよ！」

「あら、全ては夏の所為だというつもり？」

「前後の文脈見ないとすげえ危ない意味に捉えかねるがな！」

「照れ隠しするところもまた趣があるわね。ハニカム王子ってところかしら」

「蜂の巣王子って、既に死んでいるだろうが！」

「たった今、こいつの中で僕は、蛆虫入りチーズから人気ゴルフのパチモンまで格上げされたらしい。」

いかん。完全にこいつのペースだ。話を戻さねば。

なんか、もうどうでもよくなった気もするけど。

「話を戻すけど、紅茶飲むかい？」

まあ、こんなんやってこいつが受け入れるはずもない。

その証拠に、神経質に細めた目でこつちを完璧に見下している。

「愚問ね。ポットを割ってまで紅茶を飲ませようとする男にまさか私が首を立てに振るとでも？ 大体、優しさの押し売り安売り薄利多売なのよ。重いつて言葉わかる？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

確かにそのとおりだ。的を射た張り手に返す言葉もない。

ネジの三四本抜け落ちていくくせに、こういうところだけはしっかりと断りを入れる。

余計な事はしないように生きてきたのに、なぜだろう。大きい御世話がとまらない。

これじゃまるで・・・・・・・・ジュペリにそっくりじゃないか。自分を見失っている。別に僕が佐鶴に関わる必要はないのだ。

残りの紅茶をこいつのために費やす必要も、こうして余計な気を遣う必要も。

床に散らばった陶磁の破片を蹴散らしてドアノブに手をかけた。

そのときだった。

「でも、その心意気に免じて一緒に紅茶を飲んであげてもいいわ」
まったくもって

人とは本当に気まぐれな生き物である。

振り向いた僕から見えないように、窓の外に目をやっている。

「あまり私を待たせないことね。いつ気が変わるか分からないから」
やはり、気まぐれである。

十四杯目

僕はコクリと小さく首を上下させては、隣のそのまた隣の給湯室で茶葉を入れた二人用のポットに熱湯を注いで部屋に運び込む。

ティーセクター・オブ・ストックホルムのセーデルブレンド。

別に佐鶴の事を考えた結果ではない。あくまで賞味期限が近づいてきたついでに、だ。

一人のときには飲もうとしなかったので未だ四分の一も消費していない。

このまま放っておくのは、バーノン・モーリスに対して余りの失礼であろう。

ティーカップはイギリスの老舗、ウエッジウッド製のワイルドストロベリーだ。

白地のボーンチャイナの上に咲き乱れる野イチゴの花と実が程よく抑制された美をかもし出す、愛らしいティーカップだ。

金で縁取られているのにも関わらず素朴な味わいを持っていて、心を落ち着かせてくれる。

朝顔のように広がった飲み口が唇にフィットするように出来ているため、飲むときに紅茶液にたつぷりと酸素が含まれるようになっているところに製作者の心遣いが伺える。

「ワイルドストロベリー……ポピュラーなチョイスね」

なんだか、こいつがこんなことを知っている所を見ると凹む。

おそらく僕同様　もしくは僕以上　幼い頃より紅茶に慣れ親しんでいるのだろうけど、自らの手でポットを持ったことのない人間がこつも多くを知っていることが癪に障る。

悔しいっ！

けど、紅茶のことでこんなに語り合える相手は中々いないのも事実で、このような会話もとても久しい。

楽しくないと言えば嘘になる。

「まあ、お前の趣味なんか分からないから一番無難なものにして置いたよ」

「大方許容範囲だね。この野イチゴのパターンは好みだもの」
もう少し派手なものの方がよいかと迷ったが、こっちにして正解のようだ。

茶具が派手すぎると、肝心の紅茶が廃れてしまいかも知れないから。

まあ、セーデルブレンドに限って華やかさでティーカップに遅れをとることなど決してないだろうけど。

煎出の時間すら、たまらなく楽しい。

ポットの湯気の中に見え隠れする北欧の草花の香りを汲み取って非常な興奮を感じる。

イギリスもいいが、機会があるのならぜひスウェーデンにも行ってみたいものである。

蒸らし終え、茶越しを乗せたティーカップの上にポットを傾ける。いつになく、よい色だ。

少しはジュペリ先生の紅茶に近づけたのかな。

「砂糖は？」

「いらないわ」

さすが、わかっていらっしやる。

テーブルがないため、ベッドに座るハメになってしまったのでポットが床に置きっぱなしにした。

冷えるともまずいので、旅行鞆から四角くたたんだジーンズを取り出して下に敷く。

佐鶴は再びベッドに座り、僕の手からティーカップを受け取る。

受け皿を左手に、ティーカップの取っ手に指を掛けては音もなくティーカップを持ち上げる。

「それじゃ、いただくわ」

僕は少し離れた壁際のほうに座る。

角と角にそれぞれ座って、黙りこくる。まるで口は紅茶のためにし

か存在しないと云った風に。

僕の分を注ぐのを待つことなく、奴は淹れ立てをゴクゴクと飲み干した。

品がないと言いたいところだが、皮肉なことに僕なんかよりずっと動作一つ一つ気品と節度が張り付いているため、こらえることにした。

下流民体質などといっても、やはりお嬢様はお嬢様なのかも知れない。

少しだけ感心した。

ただし、そのエレガンスな動作はものすごく早送りだけだ。

しかも「猫舌ってなんですか」としれっと言い出しそうなすまし顔でだ。

「おかわり」

なんて思っていると、奴はティーカップを僕に差し出し、おもむろにベッドの中央に置きっぱなしにされたたけのこの里が入った紅茶缶を胸に抱えてばくばくと喰らう。

お前にはやらないぞと念を押さんばかりのジヤイアン食いだ。

それを欲しそうに眺めるのはなんだか敗北感が湧きそうなので、僕は手早くもう一杯紅茶を注ぐ。

ああ、糖分が欲しい

「この紅茶の色と香りはすばらしいのに、淹れた人間が無職無収だなんて、皮肉だわ」

「余計な御世話だ！　というか僕には職業も収入もある！　宅急便って知ってるか？　みんなの気持ちをトラック一杯に積んで走るんだよ！」

無色無臭にかけているつもりだろうが、たいして上手くねえよ！

「ほら、魔女の宅急便とかあるだろう？　黒猫が出て来るとびつきりハートウオーミングな奴」

「あらいやだ、ジョジョの宅急便だなんて。素敵ね」

「それなんて微妙な冒険？　！　つうかどんな聞き間違いだ！」

はあ、実に馬鹿げた会話だ。
そこそこ楽しいけど。

それより、こんなこと言ってふざけるより重要なことがあるのを忘れていた。

確かめないといけないことがある。

強引だが、話を本筋に戻すことにする。

なによりも、そのための紅茶だ。

「えーと、さっきのよくわからない話のことなんだが……」
「ああ……あの話？」

突然佐鶴の目が泳ぎだす。挙動不審だ。

シーツの端を掴んでは離そうとしない。

「認識されないと存在しないって話」

折角和んだところ悪いが、しっかり話をつけさせてもらおう。

ジユペリ先生はいつも言っていた。空気は読むものじゃないと。

「執事さんの紅茶を飲んでいると、自分がそこにいると信じれる、
だっけか」

「爺は確かにそこにいるから。爺が淹れた紅茶は本物、そしてそれを飲む私は確かにそこにいる。少なくとも私はそう信じている」

佐鶴の顔が再び暗さを帯びた。

話を戻したのを、僕は少しだけ後悔した。

だが、僕は何も考えずにこんな話を持ち出したのではない。

「そうか。もしそうなら聞くが……」
僕は問いただしたいのだ。

そう。いつものやつだ。

答えが出なければ近似値で満足する。

「なあ、お前はそこにいるのか……」
瞼の隙間から戸惑いがこつちを覗く。

佐鶴は黙ってティーカップに残った紅茶を飲みきる。

僕の質問の真意を判断しかねるといった様子で相当迷っているのかもしれない。

いや、きつとわかつているのだ。
なぜ僕がこんなことを聞くのか。なぜ今紅茶を飲まされたのかも。
ただ、迷っているのだろう。

今ここで僕の質問に答える事は彼女にとって重要な決断なんだから。

いるかないかで答えるべきではない事位は分かっているはずだ。

「ええ」

そして、佐鶴が目を上げた。

「今確かに、紅茶が私の喉を通ったわ」

執事の思いは紅茶を通して佐鶴に伝わっていたのだろう。

僕が紅茶からジュペリの心を汲み取ったように。

誰かの思いを感じ取ることで生を実感する事は人間誰しも経験するし、必要とする。

目に映る全てが虚ろであっても、鏡に映るものが嫌いでも、嘘に思えても。

思いによって生きるのだから。

「そうか。よかった」

紅茶は水と茶葉だけでは表せない。

思いによって力を帯びるのだ。

僕の紅茶はどんな心を含んでいるだろう。

ティーカップだけじゃ寂しすぎるから、紅茶は存在するのではない。
い。

紅茶はそれを飲む人のために、そこにある。

同じように、人が生きることには確かな目的があるのだろう。

生きることを少しは実感してくれた。そのことが嬉しかった。

出来ることならば、これからも誰かに「生きる」ということを実感させる、そんな紅茶を淹れたい。ジュペリ先生のように。

「認識されなくたって、存在するものだってある」

こんな難しい言葉を使うのは少々気が引けるが。

「いないことにされるなんて、かなしすぎるじゃないか。この世界

には僕らの知らない物だつて、まだ見たことのない人だつて、ちやあんと存在しているのだから」

佐鶴の目がうつすらと赤い。

これだから女子は困る。

だつて、僕は、ついそれにもらい泣きしてしまつから。

「逆に言うと、認識されているけど存在しないことにされる場合だつてあるからな」

「えっ？」

意外だと、そう思っているのだろう。

紅茶は温かい。涙を乾かすにはもつてこいだ。

少しの笑いが加われれば全て上手くいく。

「男子トイレを掃除するおばちゃんなんかそうだろう？ たしかに認識されるが、そこに存在しないことになっている」

「・・・・・・・・・・・・・・・・プツ」

あなたが言っていること殆ど適当よ、と佐鶴が泣いているのか笑っているのか判断が難しい顔で吹き出す。

「そうね。掃除の妖精って言えば説明がつくのかしら」

そういつて、佐鶴はその細い腕を一杯に広げて後ろに倒れこむ。

「わわっ！」

手が触れた拍子に、驚いた僕が飛び上がる。

「きやはは。颯ー、あんだ絶対に可笑しいわ」

可笑しいか。悪い意味じゃなさそうなので甘言として受け取る。

「そう。僕は可笑しい」

何度でも言う。僕は肯定しよう。

「否定しないところがますます可笑しいわ」

佐鶴は何も言わなかったけど、僕はポットに残った紅茶をそのティーカップに注いで渡す。

「げえっ。体液に砂糖を入れたような味だわ」

「それポカリスエット！ とうか、さっき美味しいといつたらどう？」

「冗談よ冗談。でも、冷めているわ」

「そうか。冷めているならばしょうがない」

僕はすっかり冷めてしまった紅茶を口に含んだ。

でもなぜだろう。僕はそれを温かいときよりも美味しいと感じる。

ジユペリ先生の紅茶に少しは手が届きそうだ。

一人で飲む紅茶より、ずっとずっと温かくて芳しい。

これだから紅茶は止められない。

ティーカップの縁の中に広がる紅茶の水面みなもに人の内側が映りそう
で。

それを垣間見れる気がして。

ティーカップを覗き込んだ笑顔を見るために、イギリス人は澄んだ水色の紅茶を淹れようと必死になっているのかもしれない。

「そういえば銀魂が中々出て来ないわね」

いつの間にか再びジャンプのなかに顔をうずめている。

なんだか楽しそうだ。

その姿がなんとも愛くるしくて、執事の老人がいない今、佐鶴にとつての近似値が僕であれたらと素直にそう思えた。

しかし、なんか重要なことを忘れているような気が……

「ねえ、飴沢颯一」

ん？ どうしたんだ。急に苗字つきで呼びやがって。

見開かれたジャンプの中でスナイパーライフルを構えたゴルゴが向い側のビルの部屋を狙っている。

完全に忘れていた。佐鶴の小さな拳がブルブルと震えている。

「あ……それはな、ちょっとした事情が……」

「これはどうということかしら？ 私、劇画はあまり好きになれないのだけど」

「さて、素数を数えて落ち着いてくれ！ というかジヨジヨもどちらかと言つと劇画に近ゲホッ！」

「お黙り！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8055h/>

ガンパウダー・ティー・パーティー

2010年10月10日19時07分発行